

# 半世紀の歴史研究を振り返る

村 井 康 彦 (京都市美術館館長)  
朝 尾 直 弘 (住友史料館館長)  
酒 井 一 (三重大学名誉教授)

はじめに

小田 忠 (当館学芸員) きょうは、『大阪商業大学商業史博物館紀要』第六号に掲載します鼎談収録のためにお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。

昨年度、本誌第五号に初めてインタビューを載せることにして、石井寛治先生をとり上げましたが、引き続きいいものをつくりたいということで酒井先生に相談をさせていただきました。きょうのような案が浮かび上がることになりました。これを掲載させていただいてですね、今までになかった村井先生<sup>(1)</sup>、あるいは朝尾先生<sup>(2)</sup>、酒井先生<sup>(3)</sup>の新しいものをですね、活字にできたら、これからの若い研究者のためにもいいんじゃないかと。あるいは、我々のために次の仕事をすることする上にも非常に意味のある仕事じゃないかなと考えまして、今回このような企画を立てること

【注】

(1) 村井康彦(一九三〇— ) 国際日本文化研究センター名誉教授・滋賀県立大学名誉教授。当初は古代から中世への移行期における律令財政の解体、荘園制の成立過程などの政治や社会経済史的研究を重点的に行うが、のち文化史研究に力を注ぎ、茶の湯を広く位置つけた。『古代国家解体過程の研究』(岩波書店)、『平安貴族の世界』(徳間書店)。

にいたしました。きょうは、長時間になると思いますが、ひとつよろしくお願いいたします。

それでは、酒井先生、御紹介いただけますでしょうか。

**酒井** それでは、僭越ですけれども、私が進行を担当させていただきます。

きょう、村井康彦先生と朝尾直弘先生と私を含めて三人でお話できるというのは、私の人生にとつても得がたいことです。今までお顔はよく知り、お話もさせていたのですが、半世紀にわたるそれぞれの先生方の歴史研究の軌跡と言いますか、足跡、文章であらわされた業績は大きいものがありますが、その奥にあるものに少しでも触れて、先生方の業績を背景も踏まえて考えることができるような企画になったらと思っております。

それでは、専攻の時代順ということで、幸いに卒業されたのもその順番になっているかと思えますので、村井先生の方からお話いただけますか。

#### 京都女子大学での特殊講義

**村井** 今、卒業年次のことが出ましたが、私、昭和二八年に学部を出て、引き続いて大学院に入りまして、三三年に単位取得、退学ということを出まして、引き続き、その四月から京都女子大学の方へ専任で行くということになりました。以来教員生活をずっといたしました。昨年の三月に最後の大学の専任をやめました。ほんとはそこですべてを終えてすっきりしたかったんですが、たまたま大学院生、ドクターコースの院生一人、修士コースの院生一人の論文作成がそれぞれもう一年必要だということで、その指導に当たるために非常勤で行きまして、論文がそれぞれパスしましたことで、私の責任は終わりました。

したがって、もうこの四月からは、半世紀続いた教師をやめ授業を持たなくなつて、実にせいせいしているところです。そんな時、たまたま今回のお話をお伺いしたんですけれども、その意味では、私の人生にとつても一つの区切りになる時期だったというふうに思っています。

(2) 朝尾直弘(一九三一—)

京都大学名誉教授・京都橘大学名誉教授。敗戦後の日本史教科書墨塗り世代に属し、その衝撃から日本史研究に志した。近世における將軍権力の創出過程の分析や、小農民経営の実態分析などに、近世史研究をリードした大きな研究成果がある。『朝尾直弘著作集』(岩波書店)。

(3) 酒井一(一九三一—)

三重大学名誉教授。農村史から始まり、民衆運動、大塩中斎の研究など幅広く活躍する。その関係の論文のほか共編の『街道の日本史』30(吉川弘文館)などがある。広範的に多くの自治体史に執筆している。

なぜ、せいせいしているかというところ、近ごろの教育の仕方というのは、大学でも大変丁寧になつてきている。大学の先生は、教授法を身につけないといけない。かつての先生みたいに何十分か遅れてやつてきて、何十分か前にはもう出て行くという、そういうふうなことは夢のまた夢の時代ですね。すぐ訴えられるのがおちです。それから、パソコンなど先端技術が身近になつたことで、教師もそういう資料づくりをせよとせよとする。また、学生もそれを求める。ですから、なんにも資料のない授業なんて、もう考えがたいんですね。映像資料もできるだけ利用する。IT授業をやらんとあかんというふうなことで、旧人類で押し通した私なんかは、そういうのが面倒くさくて。資料は結構つくりましたけれど、みんな手書きで。今時分、手書きのレジュメはめつたにないぞ、いずれ文化財になるからちゃんと取っておけと言ったぐらいなんです。教育の方はそれなりに一生懸命やつたつもりではあるんで、愛着はないと言えませんが、しかし、もうそういうわずらわしさから解放されたことの方がうれしくて、ほんとにせいせいしているんです。

教師になつての授業というのは、私の場合、昭和三年ですけれども、まだ戦前的なやり方を踏襲しておりまして、前の日に一生懸命ノートをつくり、それを一字一句読み上げて書きとらせる。そして一段落すると、今、書き取ってもらつたところはこういうことなんだということとで説明を加えて、ひとしきり説明すると、行を変えて、一字下げてとかいつて次を読み上げる。ところが、それが九〇分、一講義分のノートができればいいんですけども、なかなか。私は今申しましたように、大学院を出て、すぐ引き続き京都女子大学史学科へ行き、そこでは特殊講義と史料講読（文書編と記録編）をとりあえずもたされたんですけれども、その特殊講義でやることは、大学院時代にやったことをもう一度組み立て直すくらいのことしかできませんね。既存の知識を総動員してノートをつくるんですけれども、莊園の問題とか、律令財政の問題とか、そういう難しい話を学生に書き取らせたのですが、行き詰まってノートができない

い。場合によつたら三〇分ぐらいで終わっちゃうというようなことも。そのときは頭を下げてできなかったという以外になかったんです。実に苦しい授業でしたね。でも、それを何とかやることによつて、一年たてば論文が一つ、二つは必ず書けましたし、その中で、学問的なトレーニングができたというふうに思っています。そういうことで、今では全くそういう授業形態はあり得ないですから通用しない理屈ですけど、若い後輩なんかに特殊講義だけはかつちりしておけ、あの中で自分の学問ができるんだから、と言ったものでした。古い授業の仕方でしたけれど、そして学生にとっては大変迷惑だったと思いますが、私自身にとっては、一番の勉強の場になったというふうに思っています。

### 「田堵の存在形態」のころ

村井 余談ですが、まだ二七、八の若いみそらで女子大学へ行ったもんですから、やっぱり恥ずかしいところがありましてね。文章を読み上げるのに初期荘園のことでしたが、越前の道守荘とか糞置荘とかが出てくるんですね。ところがノートを読み上げていて、糞置荘が恥ずかしくて言えなかった。話は前後いたしますが、大学院時代は、主として荘園のことをやりまして、その結論的なものが「田堵の存在形態」という論文です。出まして、大学へ行くようになってからは、ありていに申せば、『大日本史料』を読み直したんです。『平安遺文』ばかりでもあるまいと。むしろ『平安遺文』に入っているような史料も中にはあるわけですが。それ見ますと、いわゆる租庸調など律令財政にかかわるような史料がたくさん納めてあった。そんなわけで大学院を出てからは律令財政を中心とした問題にしばらく取り組みました。そういうことで、学位請求論文は第一部は律令財政の諸問題、時期としては逆になるんですが、第二部を荘園の諸問題という二部構成で提出いたしました。

ただ、卒業してすぐに女子大に行ったものですから、一生懸命教育の方に精を出しすぎま

して、論文を書く猶予期間を過ぎてしまっています。ですから、論文博士として提出いたしました。第一号かと思っていたら旧制の人が既に提出しておられまして、それはなりません。まあそんなことはどうでもいいことですが。

**酒井** 朝尾先生も記憶されてるようですが、「ごんのはかせ権博士」という文章を村井先生が書かれましたね。

**朝尾** 権博士の期間が非常に長かったですね。単位を取得して、学位は取らない間を村井さんは権博士というふうに表示されて、それが一時ちょっとはやったんです。

**村井** 権は仮ですから。

**朝尾** みんな僕らも、権博士でしたが、まもなく取得後三年以内提出と決まりました。

**村井** そんなことで、私の研究歴の第一章に当たるところに章の名前をつけるとすれば、「平安遺文とともに」といった見出しができるような感じがいたします。

**朝尾** 村井さんのお仕事で、今の田堵のお話が出ましたが、もう一つ僕が印象に残っているのは、まちの話を書かれましたね。

**村井** よろこぶまち諸司厨町ですか。あれは、やっぱり京女へ行ってからです。

**朝尾** ああそうですか。僕は、あれを見たときに、我々の考えている都市というものと随分違うなという印象を持った。それで、都市の時代的な性格というものが変わるんだということを、それもしかもしかも官司なんかと関係しているという話がありましたけど、そういうことに非常に興味を引かれた記憶があります。

**村井** 何だったら今それを申しませうか。時期としては、私の第二期ということになるんですが。

**朝尾** 第二期ということになるんですか。

**酒井** 古代の話を続けていただきますでしょうか。



ホテルフジタ京都にて

**村井** それではもう一度戻ることにして。基本史料の翻刻とか出版の持つ意味は、どの時代でも変わるものではないと思うんですが、私なんかにはきつけて申せば、『平安遺文』の公刊というのは実に大きな意味を持つていたと思います。『寧楽遺文』<sup>な</sup>が出されていましたが、その後、『鎌倉遺文』とか『南北朝遺文』とかいうのが出され、それぞれ役に立っていると思いますが、戦後における歴史学の歩みの中で果たした役割の大きさというか、比重の大きさということを考えて、あの『平安遺文』にまさるものはないと思います。

特に荘園の研究にとっては、年次的に編纂されたこと、それはおのずから地域的な広がりの中で史料が収録されるということでもありましたから、我々は、そういう地域的な広がりの中で、年代的、時代的な流れの中でその荘園がどういふふうにかわっていくかというふうなことがわかった。つまり、あれによって荘園のありよう―その構造や変化、あるいは特徴といったものを理解することができるようになった。私たちの世代は、その恩恵を最も直接的に受けた世代です。

**酒井** 最初に受けられた時期がわかりませんな。

**村井** そうです。もうね、ある意味では、同時進行的にその恩恵を受けながら研究したという世代です。

**酒井** 赤松先生が史料講読でとりあげられ、私叱られた覚えがあるんで、内容は忘れてましたけど。刊行中ですな、たしか。

**村井** 大学院に入りまして、『平安遺文』の講読があった。毎週担当者は、二〇通分調べなければならぬ。これはものすごい負担でしたね。他の個所にも関係の文書が収められておりますから、前後に広げながら見ておかないといけない。

今、『平安遺文』を取り出しますと、自分の担当しているところだけは書き込みがものすごくあって。人の担当したところは、実にあっさりしたもので。そういうふうなことで、『平安遺

『文』を赤松先生の講読で読んだということが、それ以後今日に至るまで私たちの世代の学問の基盤になっているというふうに思っています。

**朝尾** ちよっとつけ加えさせていただいてよろしいですか。

先ほど、このごろの学生と昔との違いというお話がありましたけれども、その難しい『平安遺文』のですね。今だったら平安時代をやっている学生しか集まって来ないのが一般なんですよ。古代やっってる学生は、古代の先生の演習には出るけれども、講義くらいは聞くんですけど、演習というとなかなか出て来ないのが多くなっている。

我々の時代は、各時代の演習なんていうものはありませんから、僕は近世史ですけど、近世の演習というものはなかったです。学部時代に、小葉田先生がおられて、一般的な中世と近世を混ぜたような中世に重点がある史料集みたいな。

**酒井** タイプ印刷の。

**朝尾** そうです。

**村井** 専攻する時代とは関係なしに出席していたと。それはやっぱり勉強になりましたね。

**朝尾** 非常に勉強になっていると思います。

**酒井** 歴史の最終的な我々の仕事というのは、時代の枠組みをどう考えるかということがかなり大きい。そういうときには、やっぱりポーリングした時代の専門以外の知識というのは、かなり有効に。

**朝尾** やっぱり違いがね、細かいところでわかっているといつかね。先ほどの話が先にいつてしまいまして申しわけありませんが、まちの問題とかですね。名主なんかの問題でもそうですよ。私、平安時代の名主っていうものをレポート書いたんですけど、そういうのと鎌倉、室町それぞれ違うということが、あの平安遺文の演習に出てて理解したんです。ちよっと横から口出してすみません。

村井 今の朝尾さんの発言に注釈をつけ加えますとね、実は、大学院の制度がきちつとまだできてなかったということもありますね。我々は大学院生になっただけで、大学院の制度の方ができていなくて、どういふふうに単位を取ればいいのかとか、実にそのあたりがいいかげんではないか。

朝尾 だから、最初はドクターコースを三年終わった後で、いくらいい話だった。今、村井さんは就職されたというお話がありました。我々は、何年おつてもよろしいと。まだ決まらないということで、私は昭和三四年に単位取得したんですが、一年間はそのままおつたんです。三五年になつて、何か文部省の方針が、やっぱりやめさせるということで、皆やめてくれという話になりました。

酒井 旧制の大学院のような形が残つてたんですかね。

朝尾 そうですね。旧制は何年いてもいいという。

酒井 特研（特別研究生）の権利は別ですけど。

村井 旧制の話が出ましたが、やっぱり旧制の最後と私たち新制の最初は一緒だったわけですよ。ライバル意識が猛烈にありましたよ。

朝尾 よくばかにされました。

村井 そういう意味じゃあ言わず語らずの間に新制の連中は、負けてたまるかというような言葉にして言えばね、そういう気分が勉強したということはありませんね。新制だからとかいふようないい方がなくなったのは、いつごろなんでしょうかね。

酒井 先生方にも、そんな頭があつたかもわかりませんね。

朝尾 公然という先生がいました。君らは新制だから学力は余りね。

酒井 そう言われても、こっちの責任じゃないですよ、制度の責任。

村井 そんなことで、私が一番興味を持ったのは、平安期の名主の前の段階の田堵でした。そ



れが出てくる荘園として東寺領の伊勢国川合大國庄というのがあって、これの一連の文書がありましたので、個別研究をやるようになったわけです。

私は修士論文では伊勢神宮の神宮経済の展開と変遷みたいなことをやりました。伊勢神宮では平安中後期に御厨とか御園——一般の権門で言えば荘園ですが、ちよつと違った性格を持っていた——をやりました。

伊勢神宮は各地の豪族なんかに接触して上分料を寄進させるといふうなことをやった。それに出かけていったのが権祢宜と言われた、神宮の周辺にいる田堵クラスの有力農民なんですね。これに仮の権祢宜という資格を与えた。この権祢宜たちが地方へ出ていき、地方の土豪と接触して彼らから上分料を寄進させた。じつは口入料（くちいれりょう、くにゅうりょう）がそれと同額なんですね。マージンが年貢と同じですから積極的になる道理です。この口入神主が、やがて御師（おし、おんし）、につながつていくわけなんです。そういうのをやったのが、実は伊勢の神宮の周辺にいた田堵と言われている連中であつた。

そういうこともあって、伊勢国川合大國庄をやり、その中に田堵の動きがかなり見られたものですから、やるようになった。当初は個別荘園研究としてまとめたものを『史林』<sup>(4)</sup>にのせてもらうことになった。当時は石田善人さんが編集委員のお一人でしたが、枚数が多過ぎる、半分にしろと言われましてね。半分にはとてもならないので、三分の二ぐらいにして出したら、まだ多過ぎると。これではもうどうしようもないと思って個別の荘園研究の発表は別個にするにして、その中に出てくる田堵だけを取り上げ、そのかわり、川合大國庄だけに限らず、ほかの地域の田堵もあわせてまとめてみようという方向にもつていったわけです。これは結果としては大変ありがたかつたわけですが、これが「田堵の存在形態」になった経緯です。

そこで論じたことは、従来の荘園経営の理解というのは、荘園領主により非常に強制力を持った、いわゆる奴隸制的な経営が行われていたといふうに言われていたのに対して、そう

(4) 『史林』

史学研究会の機関誌。当初から京都帝国大学教授三浦周行が編集主任をつとめ、一九三一年の退官まで続く。内容は史学・考古学・地理学にわたり、今もつづく総合誌である。現在の発行部数約一八〇〇部、原則として会員に頒布。

ではなくて、莊園領主は労働力をほとんど持っていない。むしろ土地は合法的に所有するけれど、人間を持っていない。だから、その周辺の人間を募集して、徴募して、そして耕作者になってもらって、作人になってもらって、一年契約で耕作をし、そして地子を出してもらったという、こういう請負形態が行われていた。その際、田を割り当てることを散田といいましたので、いわば「散田」請負」経営が平安時代のある時期、とくに初期から中期にかけての段階における莊園のあり方であった、そういう契約的なやり方で行われたことを強調したのがあの論文です。

『史林』に出したときに最初にほめて下さったのは、原隨圓先生でした。ギリシャ史の。専門外の人でもわかってもらえたかなというふうな気分がありましたね。数年後、博士論文の公開審査が行われましたときは、ある先生が質問をされたのですが、赤松先生も田堵の論文を書いておられたこともあったのでしよう、赤松先生が立ち上がって、とうとうと田堵論をやられまして、私はなにも言うことはなくなりました。これは助かりましたね。そういう意味では、もとへ戻りますけれど、名主の前段階としての田堵があり、そういう田堵を主体とするような莊園経営があったという研究が大学院時代で勉強したことの一歩の、自分でいうのもあれですが、それなりの成果であったと思っています。石田善人さんには感謝しなければなりません。

『平安遺文』については、また申すことがあるかもしれませんが、とりあえずは第一章はこれで朝尾先生の方にも。どうでしょう。ずっと私が続けるの。

酒井 できましたら、『大日本史料』は第一期の問題になります。

村井 二期になります。ついでに『平安遺文』について申せば、エピソードみたいな話ですが、先ほど申しましたように、京女（京都女子大学）で史料講読やるときに、一つは一通文書をやって、当然のごとく『平安遺文』あたりから探し、それをタイプ印刷して、テキストにし



村井 康彦 氏

てやったんです。ところが一字か二字どうしてもわからないところが出てくるんですね。一つの言葉がどうしても理解できない。やっぱり先生の「権威」がありますので、読めないとか悪いわけですよ。そんなことで完全に私が読める史料を選び出すことを何年かやっていたら、おのずから選ばれる史料は決まってきましたね。そのうち「類聚三代格」<sup>(5)</sup>なども見たりして広げましたが、それから、公にはこれが最初になるかもしれないですけど、実は、竹内理三先生<sup>(6)</sup>が亡くなられて、その追悼の文集が吉川弘文館から出されるときに声かけられ、書くつもりだったんですが、結局書けなかった。あるこだわりがあったからなんです。そのこだわりというのは何かというと、それ以前、『平安遺文』のずっと後の号の挟み込みの月報にエッセイを書けと言われて書きました。竹内理三先生たちに対して史料公刊の学問的な成果に対する謝意とともに、田堵の存在形態の論文を書いていたときの実感を書いたのです。その頃は京都市内のある女子高校の非常勤講師をやっていましたが、非常勤講師というのは、要するに一年契約。最後は専任が採用され首を切られました。何年間実績を積もつと、結局はそれ以上のものではない。田堵の場合は五代にわたってそこをきちつと違反なくやっていたらそれが積み重ねられていつて、ある種の権利―作手と叫びました―が出てくるんですが、非常勤講師だつてそういうこともあるかもしれません。結局は四年続けたけど、専任が入つたことで首切られたということ。私は、田堵のそういう契約的なあり方を自分自身のアルバイト生活と重ねながら一生懸命論文を書いたものでした。というふうなエッセイを書いたんですよ。そして、ある人に、そういう個人的な感懐はプチブル的な発想であるというふうに書かれた。時代が時代ですからね、いまさらいつても仕方のないことですが、私は、ちよつとがっかりきた。そして、端的に申せば、こういう連中を相手に歴史学をやらんとあかんのかなというふうな感じになって、歴史嫌いになってしまった。

(5) 「類聚三代格」

『弘仁格』『貞観格』『延喜格』を事項別に再編成した法令集。成立年代・編者は共に未詳。

(6) 竹内理三(一九〇七―一九九七)

一九九六年に文化勲章を受章。古代の寺院経済・寺領荘園研究の基礎を築き、『寧楽遺文』『平安遺文』『鎌倉遺文』などの古代・中世の基本資料の編纂・刊行に尽力した。

## 公家社会を見る

村井 今日自分史を書くというようないことが流行っています。自分自身の生き方というのを振り返ることが求められているのでしょう。そんなことと結びつけるわけじゃないけれども、発想はどんなに個人的であり、私的であっても、あるいは偶然的なことであっても、それを学問的なものに高めてやっていけばいいんであってね。それをそんな言われ方をされたというのが、私にとっては、シヨックというよりも、歴史学に対して絶望感を抱いたという方が本当です。私は自分をそんなにしつこい方じゃない、淡白な方だと思っておりますが、これはずっとその後も私の意識の底にあって消えませんでした。

その後、『大日本史料』を素材にして律令財政、租税制度というふうなものを何年かやりましたけれども、それらを博士論文としてまとめて出したあと関心を移したのは、公家の日記を読むことでした。研究の素材が変わっていったということが言えるのかなと思うんです。荘園や国家財政のことをやっていけば、おのずから為政者としての貴族とは何だったんだということに意識は移っていくわけで、公家の日記を読むことで公家社会を見るという方向へ進んでいきました。

ですから、政治史を真正面から論じていくというよりは、もうちょっと個人的な、あるいは生活的なレベルで公家社会、貴族社会を見ていくというふうな形の研究を始めたよう思いますが。先程のシヨックが無関係ではないでしょう。無論、男の日記というのは、どこ行つて何をしてどうしてというふうな、そこには当時の公のことが書かれていますから、全く個人的な生活のことだけということだけではありませんが。また、漢文体の男日記はもっぱら事実が書かれているだけで、その点『蜻蛉日記』<sup>(7)</sup>以後の自分の生き方について書かれた仮名の女日記とは極めて対照的であるわけですが、しかし、その中に個人的な表白もないわけではありません。そついった日記を通して公家社会を見るといふこと。そんな時期、たまたま京都の知人で東

(7) 「蜻蛉日記」

藤原道綱の母の作で、一〇世紀後半に成立。結婚生活の体験と心情を赤裸々に綴り、王朝婦人の実態が見える。

京の出版社の編集者になっていた人がいて、書いてみないかと勧められたのが『平安貴族の世界』です。

これは、最初は新書版で書いてくれと。二百枚ちょっとぐらいで書いてくれというふうに言われて、そのつもりで書き始めたんですが、まだ序章の段階で枚数がきてしまいました。それなら四百枚ぐらいで書いてくれと言われ、四百枚書いたのですが、まだ核心に触れていない。そんなことで結局八百枚は超えたと思うんですが、さすがにいいかげんにしてくれといわれ、「王朝の落日」で急転直下終わっています。当初の考えでは、鎌倉初期の新古今の時代、後鳥羽院、藤原定家の時期までの、つまり公家が文化的な創造性を持っていた新古今の時期までの公家社会を政治、社会、経済、あるいは文学というようなことを、ない交ぜにしながら論じてみたいというものだったんですが、結局は一一世紀半ばの宇治平等院がつけられたあたりで終わってしまいました。

こうして公家社会に興味を持つなかで生まれたのが、貴族たちの生活の場であった京都とは一体なんだったのかという、平安京―京都―古代都市への関心でした。そんな時期「拾芥抄」という南北朝期の百科辞書みたいなものですけども、その中でたまたま見つけたものに「諸司厨町」というものがあった。要するに、地方から徴発動員された衛士とか舎人とか采女など課役の民たちのために用意された京中宿舎のことです。それを官が設けているわけです。彼らは宿舎で寝起きし、当番のときには分属された役所の雑事に当たった―そういうシステムが平安時代の初期には行われていたことがわかってきたんです。

当然平城京やそれ以前にもあつたろうと思われんですが、平城京ではまだ関係資料は出ていないと思います。それ以前については、実は、直木孝次郎さんが「大和における国名を地名とする云々」という論文がありましてね、今でも分県地図を見ればすぐに石見とか豊前、土佐といった国名を幾つか見出すことができるのですが、多分それぞれの国から徴発された課役民

(8) 後鳥羽天皇(一一八〇―一二三九)

第八二代天皇。若くして和歌に熱中し、一二〇一年和歌所を設けた。承久の乱により、敗れて隱岐国に流される。一二〇五年『新古今和歌集』を完成させた。

(9) 藤原定家(一一六一―一二四一)

名前の読み癖は「ていか」。平安末期から鎌倉初期の歌人、歌学者。『新古今和歌集』の撰者に任命される。定家の日記『明月記』で、現存するのは一一八〇年から一二三五年まで。

(10) 「新古今和歌集」

八番目の勅撰和歌集、二〇巻。藤原定家・源通具・藤原有家・同家隆・同雅経・寂蓮などに和歌の撰進を命じた。寂蓮は亡くなり、一二〇三年四月二〇日頃に撰進し、上皇は一二〇四年六月中旬までに親撰した。

が、その場所に集団居住させられていた一種の屯田村みたいなもので、そこから働くべき場所に駆り出されていたんだろうというふうなことを書いておられましてね、これが多分前身だと考えた。私はそれを縮めて国名村と称しているのですが、簡単に申せば、律令体制の役所の制度が十分整ってない段階のありようが、いわば国名村の段階で、それが平安京の段階になると、大内裏の中に役所が集約されておりますから、全国から集められた課役民は、国ごとに働かされるのではなくて、役所単位で働かせることになっていったんではないか。したがって、国名村から官衙町へというふうな言い方をしてもいいわけです。それが諸司厨町というものであった。それだけ官司＝官人制度が発展したことを物語っているといったことを書いたのが諸司厨町の論文です。私が都市研究にかかわる、あるいは平安京研究にかかわる最初の論文であつたというふうに思っています。

**酒井** 朝尾先生がおっしゃった論文ですね。

**村井** そうです。この諸司厨町が持つもう一つの意味合いは、大内裏の中にあつた役所は、平安後期から鎌倉期にかけて廃絶し、それにともない京中に設けられていた諸司厨町も役所の廃絶に伴ってなくなっていくんですが、しかし、その中で商工業や運輸などにかかわるものは、四府駕輿丁座しふかちよていざとか、西陣織の大舎人座のように、諸司厨町の住人を中心に座的結合が行われ、それが中世に降って座となった。座といえは、例えば興福寺などは八十幾つの座を持っておりましたが、そういうものとはまた違った形で、京都では官衙役所が本所となり、それに本来仕えるべき厨町の間人だったものが、その役所との関係を生かしながら商工業、あるいは運輸なんかにかかわる座をつくっていった。これが京都における中世の座の一つの特徴ではないか。

つまり、そういう意味では公的なものが変質しながら新しい形のものをつくり出していくと。四府駕輿丁座については、豊田武さんの研究で最もよく知られていたんですが、言ってみ

れば、その源流というのが、実は諸司厨町だったのです。こうして関心は、宮都というものは何だったのかということで時代をさかのぼり、飛鳥京以来の宮都の発展というものを考える一方、平安京は中世ではどうなっていくのかという中世の京都の研究にも関心を向けることにもなりました。

そんな時だったと思います、角川書店から『古代の日本』<sup>(11)</sup>というシリーズものが出され、その中で、私には「平安京の成立」というテーマが課せられて書いたんです。自分が何かをやっていると、それを発表する機会が向こうからやってくるというようなことが時々あるもんですが、この時がそうでした。この原稿の中で、改めて平安京はどういうふう形成され、その実態はどうだったのか、住民構成や都市機能はどうだったのか、といった問題を考えた。そんな時、京都市では市史編纂事業が再開され、その分担執筆者の一人に加えてもらうことになり、ここでも平安京、あるいは京都に関係することを勉強することになりました。これが私の宮都研究、あるいは京都研究のそもそもの始まりです。

### 遷都の政治力学

**村井** わが国の宮都は、羅城を持っていませんから、都城という言い方は正確ではありません。そういう言い方をすると、中国の宮都との違いが出てこない。日本の場合は、それがないところに特徴があったというべきでしょう。それはともかくとして、飛鳥あたりをどれだけ歩いたでしょうか。もともと田舎者ですから、じつは京都の街中を歩くよりは飛鳥のあぜ道を歩く方が好きでして、近鉄をどれだけ利用したかわかりません。ところで古代の宮都といえは、発掘調査の進展もあって、どういふ場所にどういふ規模のどういふ建物があつた、といったことばかりに関心を持たれる。確かに、だんだん発展していく過程が明らかになれば、宮都の歴史がわかっていくわけですから、大事なことですけれども、それとともに忘れてならないの

(11) 『古代の日本』

一九七〇年から一九七一年にかけて刊行。全九巻、角川書店。

は、日本の場合は遷都を繰り返していること、特に遠隔地遷都というものの持つ意味を考えていく必要があるということだ。

といいますのは、中大兄が実質推進している、いわゆる大化改新後の難波遷都、そこに孝徳天皇をおいてまた飛鳥に戻った飛鳥遷（還）都、それからしばらくおいて近江へ移る近江遷都が行われるわけですが、このいずれにもネズミの大群が大移動したという話が伝えられている。それを見た古者たちは「遷都の予兆なるべし」――遷都が行われる兆しであるうと判断したという話が出てくるんですね。一度ならともかく二度、三度となると、これは一種の人心操作ではなかつたかと思われて来る。遷都というものを考えてみますと、どの時代でも必ず反対があつた。特に遠隔地遷都の場合は、人びとの生活が激変するわけですから、当事者以外はみな反対した。そこで必要だつたのがコンセンサスの形成で、それを古くは、事が起こるときはそれの予兆があらわれるという考え方を逆用たのではないが。

ところが平城遷都の場合には、このときは藤原不比等(12)が中心なわけですが、「衆議」が形成されている。無論貴族だけの衆議で、一般の庶民にまで広げたわけではありませんが。このときの元明天皇の遷都の詔を見ると、「私は、遷都を必ずしも欲しているわけではない。しかし、衆議もだしがたく（衆議を無視することができないから）遷都を行つんだ」と。都は内外の人々が集まるところだから、立派にする必要がある。だから遷都する以上は立派なものをつくらう、というふうなことを言っているんですが、そこで印象に残つたのが、衆議を無視することはできないという理屈です。あの段階になると、もうネズミの大群ではちょっと通用しない。そして衆議とはいうものの、それにはある種の根回しが行われたに違いない。それらをひっくるめて、私は、「遷都の政治力学」ともいつべきものを考えないといけないと思うようになりました。

そういうことに関連で申せば、長岡遷都についてもある種のステレオタイプの理解がありま

(12) 藤原不比等（六五九―七二〇）

奈良初期の公卿で右大臣、正二位。父は鎌足。大宝律令を修正して養老律令を完成。平城京遷都に際しては、氏寺山階寺を新都に移し興福寺と改称した。



す。それは、桓武天皇<sup>(13)</sup>—平城京の最後の天皇です—が即位して間もなく、「ここは居るにふさわしいところである。だから造宮省を廃止する」という方針を打ち出しています。ほかの二、三の役所と同じように造宮省を廃止するといひ、造都事業を打ち切っている。これにはちよつと説明が必要でして、平城京の場合は造宮省というのが常置の官としてあった。絶えず造作、保守、修繕が行われたからですが、それを廃止することにした。ところがそれから二年後に長岡へ移っている。そこでこのことが疑問とされた。宮都の古典的研究者といつていい喜田貞吉博士<sup>(14)</sup>は、これ既に解すべからざる事柄である。もう造都はしないと云いながら、二年後には遷都し、造都している。これはちよつと理解しがたいことであるといつわけです。当然そこから出てくるのは、長岡遷都は急いで秘密裏に行われている、といった考え方です。これは今でも通用している考え方です。

長岡遷都は、その遷都の中心になった藤原種継<sup>(15)</sup>がこれからという時に殺されてしまい、ために造都事業は混乱と停滞に陥り、結局十年で放棄することになります。これについても喜田氏は、長岡造都は秦氏<sup>(16)</sup>の経済協力で行うことができたが、その秦氏と関係の深かった種継が殺されたので造都ができなくなったのだ、という説を出した。秦氏が協力していることは事実です。しかしそのことと遷都、造都が全面的に特定の豪族に依存して行われたということとは別問題であつて、実際には全体の中の一部でしかないわけなんですけれども、それがすべてのよつに言われると、やっぱり拡大解釈といわざるを得ないので、私は、基本的には賛成できない。そういうことも絡まつての話なんです。長岡遷都は念々の間に慌てふためいてやった、だから失敗もしてしまうんだというような理解になつてはいる。

ところが、事実を見たらそんなことじゃなくて、威風堂々と移つていつているんですよ、たくさん人間を動員して。そういう点で、長岡遷都に対する理解は、ちよつと世間の理解とは違つかも知れません。しかし、その長岡遷都と平安遷都に共通しているのは、この遷都を「公

(13) 桓武天皇(七三七—八〇六)

第五〇代の天皇。平安京の礎を開いた。財政再建、地方政治の肅清を企画した。最澄らを保護し、仏教の俗化を抑えた。

(14) 喜田貞吉(一八七一一—一九三九)

日本歴史地理学会をおこし雑誌『歴史地理』を刊行。一九一九年に雑誌『民族と歴史』を創刊し、「特殊部落号」を編纂し部落問題の先駆的役割を果たした。考古学・民俗学・歴史学・地理学の学際的研究に新しい分野を開拓する。

(15) 藤原種継(七三七—七八五)

遷都並びに新京造営の責任者として事業を主導する。しかし、長岡京造営現場視察中に遷都反対派に襲撃され死亡する。

(16) 秦氏

朝鮮系渡来人で、六世紀前半から中期に山背の深草地方に強力な基盤を構築し、六世紀後半から七世紀にかけて山背葛野地方に進出し、葛野太秦に本拠地を移す。

私草創」、つまり天下草創の一大事業と認識し意義づけていることです。そして事実、革命の時を選んで移っている。つまり、意識としては遷都というものは革命なんだと。世の中を変えていくことなんだということです。長岡遷都に先立ち造営省を廃止したのは、二年後の革命の年をにらんだことで、省の廃止は遷都のサインだったと見るべきです。

長岡京は、結果としては十年で終わりましたけれど、その意図するところは、皇統を天武系から天智系<sup>(16)</sup>に切りかえること、それから、奈良仏教の寺院勢力を抑えること、それから、大川に接した都をつくること、などいろいろあったと思うんですけども、これを一言で言えば、「山背遷都」という位置づけができるんじゃないか。したがって、それ以前の大和宮都の時代に終止符を打ったのが桓武による山背遷都であり、山背宮都である。そして長岡京は成功しなかったが、平安遷都、造都に至って完結したというふうに言っているように思います。

桓武天皇の平安造都に対する意気込みというのは大変なもので、長岡造都のときには種継にかなり任せており、桓武は蝦夷経略の方に入れ込んでいます。ところが、平安京については、三十数回も次々と京中巡行、つまり工事現場を巡回、視察、督励をしており、桓武の意気込みがわかります。これはもう二度と失敗は許されないという気持ちをよく示していると思います。

そういう点で、私は、平安京というのはそれまで一世紀続いた飛鳥京以来の造都のノウハウを最大限に活用して行った、事実上最後の宮都であつたと思つています。平安京の場合、大内裏図が伝えられており、それが結構確かで、その図面に従って掘っていくとそのものが出てくるんですね。それを見ますと、役所群が大内裏、宮城の中に集約されている。あそこが日本古代国家の中枢部を形成していたわけです。大内裏の中にあつてはちょっとぐあいが悪い、例えば獄所とか修理職とか、そういうのは京中に、つまり大内裏の外に設けられている。だけど、

(17) 天武天皇

第四十代の天皇。天智天皇の崩御後、壬申の乱に勝利し、飛鳥の浄御原宮に即位する。八色姓を制定、位階を改定、律令を制定した。

(18) 天智天皇(六二六―六七二)

第三八代の天皇。中臣鎌足と図り蘇我氏を滅ぼし、皇太子として大化の改新を断行する。

ほとんどはあの中に集約されている。

ところが、平城宮の場合は、まだ未成熟だった。よく京中から大型の建物跡が出てきた。すばらしい構造だなどと言いますけれど、そのほとんどは、大内裏の中にあつてしかるべき役所なんですね。つまり奈良時代というのは、国家体制がづくり出されていく過程にあつた。いわゆる令外の官が次々と出てくる。そういうのは後から出てくるから、つくる場所がない。そこで、おのずから京中につくらざるを得ないということなんで。だから、京中から官衙がたくさん出てくるということは、そのぶん国家体制の核をなす官衙体制が十分できあがっていない、成熟していないということの証拠と見るべきだろうと思います。その点では、平安京の方がはるかに整っていた。平安京に至って「百官の府」、古代国家の中枢部ができあがったということとです。そういうことで、奈良時代を研究する人は、歴史を結果から見るといのは一番よくないことではありますけれども、その後どうなったかどうかと考えると、平安京のあり方を見れば理解できるものがあるのではないでしょうか。

実は、私の博士論文も荘園についても国家財政についても九世紀をもうちょっとやらないといけない。奈良から平安にかけて連続して見るべきだという意識で書いたんです。

ちよつと今思い出しましたので話がそれるようですが、桓武朝は大和宮都を否定して山背に宮都をつくり出したところに大きな画期がありました。しかし、平安朝的なもののできたのは、桓武朝ではなくて嵯峨朝なんですね。それには嵯峨天皇<sup>(19)</sup>のときに起こった薬子の変が大きく関わっている。桓武の息子で嵯峨の兄貴の平城上皇には、皇太子時代から寵愛していた藤原薬子<sup>(20)</sup>という女性がいた。平城上皇は即位当初は觀察使を置いて地方の実情を調べるなど意欲的な政治をやっておりますが、病弱であつたために数年で譲位します。当時上皇御所というものは用意されていなかったため、大内裏の中の適当な建物を転々と移り住んだ後、最終的に平城宮へ行った。まだ建物はいくらか残っていたようです。そこに住むようになる。弟の嵯峨天

(19) 嵯峨天皇(七八六―八四二)

第五二代天皇。書道に堪能でわが国三筆の一。薬子の変後、弘仁文化が華やかに開花し、この影響力は貴族・宮廷にまで及んだ。

(20) 藤原薬子(？―八一〇)

平安初期の女官。薬子は平城天皇に籠

皇も、平城宮で生活できるように大和の正税を割くなどの措置をしており、協力的でした。そのまま推移すれば何事も起こらなかったでしょうが、それでは満足できなかった薬子、仲成たちが、平安京にいる貴族たちに対して平城京へ戻れと、いわば平城京還都令とも言うべきものを平城上皇に出させたわけです。これに対して嵯峨天皇方が機先を制してこれを討つ。薬子は服毒自殺する。平城上皇は髪を下ろして出家する。仲成は平安京へ来ていて殺されてしまう。事件としては、全くあつという間に終わったんですが、しかし、この事件というのは、平安京が安定する上で極めて大きな意味を持つたんじゃないか。

この薬子の変の後、平安京というものは定まる。例の蔵人頭が設けられたことか、上皇のために冷泉院、朱雀院という上皇御所、これを後院と言っておりませんが、それが設けられる。それから、齋院が置かれ、女御、更衣の後宮を整えた。五〇人にも及んだ皇子女のうち三二人を臣籍に下げ源氏賜姓を行った。清涼殿もつくっている。

紫宸殿が晴れの間であり、その後方の仁寿殿が天皇の日常起居する場、その後ろの承香殿というのが後宮の建物で、この三つで宮廷内裏の中核ができていたんですが、その仁寿殿の真西に清涼殿をつくり、以後、天皇は仁寿殿と清涼殿で交互に生活するようになる。これは歴代遷宮の平安京版と言ってもいいわけです。それをはじめたのが嵯峨天皇で、宇多天皇のときに清涼殿に固定され、仁寿殿はその後使われなくなっている。我々は、王朝貴族の社会や宮廷社会を見るときに清涼殿がいつも中心にあるように思いますけど、実は、それは嵯峨のときにつくられたこと、それは以前からあつた天皇ごとに宮殿を建てかえていくという習慣の最終形態が仁寿殿と清涼殿の交互利用であつたということもわかってきたんですが、それをやったのが嵯峨天皇だった。つまり、嵯峨天皇が平安王朝的なものの枠組みをつくつたのだと。だから、平安朝は桓武でベースがつくられたけれども、枠組みは嵯峨によってつくられ始めたと言っている。後に鴨長明が「方丈記」で福原遷都のことを述べた中で、この都を定めたのは嵯峨天皇

せられ、尚侍として後宮に権勢を誇っていたが、天皇が病弱のため退位し、弟の嵯峨天皇が即位すると、勢力失墜を恐れて兄仲成とともに平城天皇の重祚を図つたがうまくいかず、自殺する。

(21) 冷泉院

平安時代に京都の堀川の西にあつた上皇の御所。嵯峨天皇が造営する。当初は冷然院だったが二度の火災により、九五四年に冷泉院と改名する。

(22) 朱雀院

嵯峨天皇が朱雀院を建てた以後、歴代天皇が利用する京都の離宮。

(23) 鴨長明(一一五五—一二二六)

名は「ちようめい」と呼び習わしている。初め洛北の大原の別所に、のち洛南田野の外山に方丈の庵を結び隠遁者として終わる。歌集として「鴨長明集」、散文は「方丈記」が有名だが、他に「無明抄」「発心集」などがある。

であるという言い方をしている。桓武天皇であるという言い方はしていないんですね。最初はどいうことだろうかと思いましたが、今のようなことを考えると、まさしく嵯峨天皇によって平安京は定まったと言っている。こういうふうなことも遷都の政治力学という中で考えてみた事柄です。

### 芸能史・文化史

村井 ぼつぼつ終息に向かわないといけないと思うんですが、そしたら、最後の話題に。これまで社会経済史研究、あるいは政治史的な研究というものをずっと続けてきた中で、都市研究、宮都研究というようなものもやってきたわけですが、それと並行してずっとやっておりまして、茶の湯、茶を中心とした芸能史、文化史の研究です。そのきっかけは、山口県岩国市の吉川家に史料を集めた徴古館<sup>(25)</sup>というのがありまして、そこに私の義兄がとめており、吉川家本元亨積書（鎌倉後期につくられた日本の最初の仏教史の本）の紙背文書に茶勝負（いわゆる鬪茶）記録がありまして、それを紹介してみないかと言われた。これを『日本史研究』三三号に「中世鬪茶の方法」として紹介をしたんです。

私の母親が岩国で娘さんたち相手にお茶とお花を教えていたということがあり、歴史をやっているんだからこれを紹介してみたらどうかということだったんです。それがきっかけで、茶の歴史——一般の歴史にもいろいろなところがかかわってまいりますし、決してむだでもありませんでしたので——をやるようになったわけです。当時林屋辰三郎先生<sup>(26)</sup>の「伝統芸術の会」の近畿支部がありまして、研究的な会であったんですが、その事務局をやってみないかと言われる、私は、茶のこととはかくとしても、井上流の舞<sup>(27)</sup>とか、歌舞伎とか能・狂言とかは、京都へ来て初めて接した世界でしたからね、泣きの涙で事務局を務めたんです。しかしやがてあの会が、安く見せてもらえないかといった割り引きを世話する会になりました段階で、もうこれ

(24) 「方丈記」

鴨長明の随筆で一二二二年に書かれた。中世初頭の知識階級の思考が展開されている。

(25)

岩国徴古館  
吉川史料館、山口県岩国市にある。八〇〇年の歴史を持つ吉川家に伝来した歴史資料、美術工芸品約七〇〇〇点を収蔵する。吉川家文書など二五〇〇点の歴史資料は国の重要文化財に指定されている。美術工芸品には国宝も含まれ貴重な資料。

(26)

林屋辰三郎（一九一四—一九九八）  
『中世文化の基調』をはじめ、歴史学・国文学・民俗学・芸能史など関連諸分野に大きな影響を与えた。『日本史論聚』（岩波書店）。

はやめようということをやめて、それが何年かおいて芸能史研究会になっていくわけです。

その会でのことですが、大徳寺で茶の会をやった。多分、茶と禪についての話だったと思います。大徳寺でやった茶の研究会でしたから。そして、講師のお話が終わった後、質疑応答に入り、いろいろなやりとりをやっている中に、一人の中年男が立ち上り、茶はどんな格好をして飲んだっていいじゃないかと。今やっている議論なんてくだらんというような発言をしたわけです。それが岡本太郎<sup>(28)</sup>でした。岡本太郎は、あの前後、日本の伝統文化に関心を持っておりましたが、芸術は爆発だという岡本氏には、そこでのちまちました話は耐え切れなかつたんでしょう。たまたまそのときは林屋先生は何か用事で出席されず、私が進行係を頼まれていた。

詰め襟姿の学生時代でしたが、ほんとに往生しましたね。それはともかくとして、茶はどんな格好をして飲んだっていいじゃないかというのは、確かにそうなんです。抹茶を飲むためだけだったら、抹茶があり、茶碗、茶筌があれば、お湯を注いでかきまぜるのは三〇秒とかからない。それがああいふ茶の世界をつくり出している。一体これはどうしたことだと考えるようになった。別に岡本太郎に反論するとか、茶を弁護するということじゃなくて、茶の湯というものが日本の文化を理解していく上で欠くべからざるものであることは違いない、生活文化的な要素としての茶の湯というものを華なんかとも理解する必要がある、ということでは、茶の湯研究の学問的な意味はあると思っておりましたから。そこで茶の湯はどうしてできたのかと考えるようになりました。ただ茶の歴史といっても、この時代にはどういうやり方で飲んでいったといった事実の整理だけじゃあ意味がない。茶の湯とは何だというふうに考えていかなければいけない。それが私の課題になっていったわけです。

しかし、なかなか答えは見つからない。そのころ、平安京研究から京都研究になり、中世の京都というものに関心が向いていた。私の興味関心は茶の世界に絡まっていた室町文化でした。室町文化は、今日の日本人の生活文化に連なっていく要素がある。その室町文化について、戦

(27) 井上流の舞

井上流は寛政年間（一七八九—一八〇一）に近衛家の舞指南役を勤めた井上サト（初世井上八千代）が宮廷文化を基盤に創始した。現在は五世井上八千代（観世流能楽師九世片山九郎右衛門の長女）を襲名。

(28) 岡本太郎（一九一—一九九六）

仕事は多岐にわたり、絵画・彫刻・版画・書・モニュメント・評論・エッセーなど、大阪万博での「太陽の塔」を制作。

後進んだ分野として時衆<sup>(29)</sup>研究があった。赤松先生<sup>(30)</sup>や金井清光さんなどによって時衆と中世文化の関係が論じられておりました。早い時期は阿弥号を持っていたらみんな時衆であり、みんな時衆文化にされておりましたね、観阿弥、世阿弥<sup>(31)</sup>父子も時衆であり、したがって能なんかも時衆文化であるというふうに言われていたわけです。

余談ですが、これに猛反発をしたのが神戸の人で、在野の研究者であつた香西精さんです。大変な世阿弥研究者であり世阿弥信奉者でしたから、あの同朋衆というのは室町幕府の中で雑務に当る雑役夫ではないか。世阿弥と雑役夫を同格に論ずるとは何事であるか。世阿弥というのは大変な教養人、文化人であつて―事実、晩年になるほど禅への傾倒が強くなっていくんですが―、それを阿弥号を持つているだけで同朋衆と見るなんてとんでもないことであるという猛烈な反論を出されたんです。結論をいいますと香西説は正しいんです。猿楽者たちは、座的結合をしているのに対して、同朋衆というのは個人で仕えています。存在形態も違いますし、阿弥号をもつていても同朋衆ではありません。將軍を取り囲む芸能者の一人ではありますけれど、同朋衆ではない。世阿弥は曹洞禅を信仰しており、奈良県田原本の味間に補嚴寺というのがありますが、その竹窓という禅僧に深く帰依していた。臨濟禅でないというのがちょっと気になるころではあるんですが。ですから、時衆ではありません。時衆説は香西氏によって完全に否定されたと思えますし、そういう点で無限定だった時衆文化論はだんだんはつきりしてきたというふうに思います。同朋衆は、鎌倉末期から南北朝期にかけて時衆が武将にくっついて従軍するようになりませんが、それを源流として室町幕府の職制として位置づけられていったものと考えられています。時衆がなぜ武士の合戦に従ったかといえば、かれらが最も早く葬送にかかわったからです。武將といえはすぐに禅と結びつけられますが、他方、全く別の意味において不可欠の存在となったのが時衆の僧侶たちで、これが従軍僧になった。そして、合戦のときには、みずからは戦わないで合戦の様子を見て、主人がけがをすれば従軍医に早がわ

(29) 時衆

時衆の全盛期は鎌倉後期より室町前期までで、信者の中心は武士であつたが、一般庶民の間へも広がりをみせた。時衆僧は仏僧としての教化活動のほかに、広く茶道、花道、連歌、書画などの分野でも才能を示し、武將の運営に仕えて戦死者葬送の儀を執行し、あるいは情報提供の任をも務めたという。室町後期の浄土真宗の急激な膨張とともに衰微し始めた。

(30) 赤松俊秀(一九〇七―一九七九)

古代・中世史家。仕事は鎌倉仏教、荘園、商業、平家物語など多方面に渡る。供御人の起源や史料、親鸞についての研究もある。『鎌倉仏教の研究』『古代中世社会経済史の研究』。

(31) 世阿弥(一三六三―一四四三)

室町初期の能役者で、能を優雅なものに洗練し、芸術の域にまで高める礎となった。「風姿花伝」は特に有名。「老松」「高砂」などの多くの能を作った。

り、亡くなれば十念を授けた上、その鎧兜の一部とか、髪の毛の一部を取って、それを遺族に持っていくというようなこともしている。「楠木合戦注文」に正成が赤坂城で鎌倉幕府を悩ます戦いをしたときに初見するんですが、以来、戦さに時衆がかかわったことから、この時期、「太平記」<sup>(33)</sup>の時期から軍記物に登場し、場合によっては、軍記物の素材を提供する存在としての時衆というものが注目されるようになっていくわけです。それが室町幕府の職制としての同朋衆となった。ただし、この段階になると、時衆以外の熱烈な日蓮信徒もおり、立場上、臨済禅に帰依して息子を寺に入れるというふうな同朋衆もあらわれてきますので、室町文化を理解する上で、時衆だけで同朋衆を論ずるのは、間違いです。

それはともかく、その同朋衆に興味を持っておりましたので、同朋衆の画証というか、絵画に描かれたものはないだろうかとかねがね思っていたんですが、京都府の寺宝調査で五条通にあります若宮八幡宮に行きました時に、これは応永一七年、義持が当社に社参したときの絵巻物ですと示された。それを広げていく中に將軍に扈從する三人の同朋衆の姿が出てきた。飛び上がって喜んだというか、初めて同朋衆と出会った瞬間です。

### 室町文化論

村井 そんなことで、室町文化論というふうなものに関心を持つようになっていったんですが、文献の中で出くわしたのが、ジョアン・ロドリゲスの著した『日本教会史』の中に堺の茶の湯のことにふれた部分があった。「堺では富裕な町人がまちの雑踏の中に小さな家、小屋を建てて、そこでの閑居の生活を楽しんでいる。そして、彼らは、この方が純粹な閑居に勝るものと思っている」と。純粹な閑居というのが、かつての西行や長明なんかが人里を離れ、まちを離れて山里へ入り、そこで結んだ草庵の生活。だから、そこでは世俗を離れた脱俗の世界にいるわけですが、戦国時代の都市の富裕者たちは、まちの中に、生活の中に、日常の中にその

(32) 楠木正成(一二九四—一三三六)

後醍醐天皇に応じて兵を挙げ、千早城にこもって幕府の大軍と戦い、のち九州から東上した足利尊氏の軍と戦い湊川で敗死。河内の国司と守護を兼ね和泉の守護にもなった。

(33) 「太平記」

北条高時の失政・建武の新政を始め、南北朝時代の五十余年間の争乱の様を華麗に描いている。

(34) ジョアン・ロドリゲス

João Rodrigues (一五六一—一六三四)  
ポルトガル人、イエズス会士。一五七七年に来日する。一五九六年に司祭。日本語に熟達し、豊臣秀吉・徳川家康の寵を得。通訳および日本布教、マカオ長崎貿易に重要な役割を果たした。著書に「日本文典」「日本教会史」がある。



非日常の草庵、空間を取り込んで、そこでの時間と空間を楽しんでいた、という文章に出会ったわけです。

朝尾 市中の山居ね。

村井 ええ市中の山居、これに出くわしたときに、私は、はたとあの人（岡本氏）が投げかけた謎が解けたような感じがした。

つまり、いいとか悪いとか、好きとか嫌いということとは別問題の話なんです、文化の構造、ありようとして日常性、あるいは素材そのものではなくて、それをある種、虚構化し、形式化することで生まれてくるものがあるのではないか。その最も典型的なものが茶の湯や花ではなかったか。お花を野山で摘みとって、花びんにぼんと投げ込むだけで部屋はきれいになるし明るくなる。実用的な意味だったら、それだけで十分である。それをあえてまっすぐにしたり曲げたりして、一定の型をそこに持ち込む。ある種の作為を加えることによって素材以上に花の美が再現できるんだとする。そういう理屈が出されているわけです。茶の湯にしても、飲むというだけだったら、ああいう点前作法なんか要らない。茶室も要らない。庭も要らない。ほんとに必要な最小限度の道具が二つ、三つあれば済むことです。それをああいうふうに仕立てているということで、これは一種の虚構の文化というふうに見るべきではないだろうか。

そういえば、岡倉天心<sup>(35)</sup>が『茶の本』（ブック・オブ・ティー）のはじめに「茶道とは日常生活の雑事の中に見出されたる美的なものを崇敬する一緒の儀式である」というような言い方をしているんですね。言葉の一字に賛成ということではありませんけれど、これは、要するに日常の中から素材を見つけ出して、それを一種の非日常的なものに仕立てたもの、それが彼に言わせれば茶道だということを言っている。だから、これを要約すれば「生活芸術」といってよい。しかし生活芸術という場合、生活は日常性、芸術はある種の非日常的なものである。したがって生活芸術というのは、それ自体矛盾した存在であるんだと。茶の湯は、まさに矛盾した

(35) 岡倉天心（一八六二—一九一三）

明治期の美術史家、横浜生まれ。『東洋の理想』、『日本の目覚め』、『茶の本』をロンドン・ニュー・ヨークから英文で出版する。東洋の優秀性を主張するとともに日本文化の役割を強調した。

存在ではなかったかというふうに思うようになり、そしてそういうものが出てくる基盤というか、場が都市ではなかったか。「都市の空気は自由にする」というヨーロッパの格言がありますが、「都市の空気は虚構化する」「都市の文化は虚構化する」と言っているのではないかと。都市民は自分たちの生活の中にも取り込んでそれを楽しんだ、それが都市文化というべきものではなかったのだろうかと思うようになってきた。

我々、生活文化というふうに申しますと、冷蔵庫を使うようになりましてとか、テレビが普及しました。だからこれらを用いるようになって便利な生活になりました、などという使い方をしている。つまり、ここでいう生活文化とは、生活に用いられるさまざまなものの総体のことを指している。しかし、私のいう生活文化、というより生活芸術は、そうした生活そのものではなくて、それを素材としながらそれを非日常的なものに仕立て直す、そういう文化芸術の構造のことをいい、それは都市でこそ初めて生まれたものではないか。農村では生まれなかった。ちよつとエピソードを申しますと、滋賀県立大学の人間文化学部が地域文化学科というのを立ち上げるといって西川幸治さんと、どういふふうな学科にしたらいいだろうか、どういふカリキュラムをつくらうかというふうな話をした。滋賀県立大学を立ち上げる前段階、準備段階のときですけれども、そのとき私は言ったんですよ。琵琶湖に浮かべる船がほしい。船を買ってほしいと。地域文化学科だし、その船に乗って対岸にすぐに行けるではないか。琵琶湖上でゼミもできるのではないかと。これこそ地域文化学科の武器になると。そしたら、金がかかることが一番ですけれども、琵琶湖の北の方の気候は荒れるんですよ。一年を通して使えるようなものじゃありません、もったいない、というふうなことだね、簡単に却下されました。それならというんで、えらいまた要求は小さくなるんですが、最近では湖北の方で民家が解体されるという事例が多い。あの民家をキャンパスの中にほしい。そうすれば民俗学の授業もできるじゃないかと言ったら、そんなの防災上危険だし、だいいち何であんなものがほしいんです

か。私たちは、ああいう中で生活して、見るだけでも嫌なのに、それを何で大学に持ち込む必要があるんですかと県庁の役人にいわれ、これも簡単に却下されて、結局実現しなかったんですね。

つまり、ああいう民家風の農家風の草庵を楽しむのは農村の人ではない。そういう生活をもたない都会人なんです。都市民です。これが市中の山居ということであって、つまり、都市文化というのは、そういう生活を虚構化するところに出てくる文化形式というふうに見えるべきではないか。茶の湯というのは、都市の都市文化だったと考えるようになりました。茶はどんな格好をして飲んだっていいんですが、それをあえてある種の約束事みたいなものを設けることによって、一つの文化形式に仕立てたものというふうになりました。

茶といえば、すぐ四畳半を連想しますが、それはなぜか。四畳半というものにどういう意味があるんだろうか。あの山里の草庵は、必ずしも四畳半ということではないけれど、隠者、遁世者たちが世を捨てて入った脱俗の空間を畳の数で表せば四畳半ということになるんですね。四畳半のことを方丈の間と称するのは、まさにそこからくるんです。ということは日本の家屋では、畳で大きさが表示されるわけですが、四畳半にだけは特別の意味があった。それは四畳半という空間は脱俗の空間、世俗を捨てた空間という固有の意味があったということです。そういうつもりで一六世紀にあらわれる茶会記を見ますと、堺の事例が一番よくわかるんですが、ワンパターンとっていいほどみんな四畳半の茶室を持っている。茶室といえばもう四畳半。それがまさに草庵茶の湯ということであつたわけです。その点で想起されますのが、足利義政(36)が東求堂の東北の隅につくった四畳半の書院、書院座敷に「同仁齋」という名をつけた。これは禅僧の横川景三(37)と相談してきめた扁額名でしたが、その言葉は、「聖人君主は一視同仁」聖人君子はだれも同じように見る。身分の上下をつけなくて見る、扱うということからきている。四畳半が脱俗の空間であるならば、そこは世俗の論理が通用しない世界。世俗の論理とい

(36) 足利義政(一四三六—一四九〇)室町幕府八代將軍。慈照寺を建て、芸術を愛好し保護し、東山文化を生み出した。

(37) 横川景三(一四二九—一四九三)室町後期の臨濟宗の僧、相国寺・南禅

うのは身分の上下ということです。その身分の上下がない四畳半の世界は、まさしく同仁齋に違いない。この二人の間にどういふ議論があったのかわかりませんが、四畳半の部屋に同仁齋という名前をつけたというのは、実に見事であったと言わざるを得ません。

ただ、義政の同仁齋は、書院造です。それが四畳半という規模を共通項として、やがて一六世紀に入りますと草庵四畳半が登場し、それをベースとして草庵茶の湯が出てくるわけでしょう。そういえば、義政ともかわりのあった三条西実隆<sup>(38)</sup>の日記を見ますと、ある連歌師から、今、六畳の小屋を売ってもいいという人間がいることを聞きました実隆は、早速それを買って求めて、自分の武者小路の屋敷の一隅に移しかえるんですが、そのとき方丈の間になっている。六畳をわざわざ四畳半にしているんですね。これは、やっぱり四畳半志向とも言うべきものがあつたのでしょうか。つまり、応仁の乱前後から都市民の間に四畳半志向が出はじめ、それがやがて草庵茶の湯へとつながっていくことだろうと思います。都市民の美意識なんですね。

京都の住民はいわゆる町衆だけではなくて、公家なんかも含めた都市民として見ていく必要がある。その中核になったのが町衆であることは言うまでもないんですが、町衆の文化には公家的なものをはじめ、さまざまなものを取り込まれているわけですから、広義に理解する必要があります。その点、一六世紀の京都というのは、主役、脇役は、時代により交代しておりますけれども、天皇や公家、それから公家以上に多かつた在京の武家、僧侶とか神官、成長する町衆、それに名もなき人たち、というふうな、京都の歴史にかかわつたすべての人間が出てきて文化的なかかわりを持った時期、それが一六世紀という時期ではなかったか。京都のまちとしては、空間的には一番小さくなった時期、上京、下京がもう一本の道でつながっていたような感じ。それはちよつと極端な理解ですけども、極限にまで小さくなった。しかし、その内部は両側町が生まれて、いわばまち共同体ができてくる。そういう時期に、実は京都文化

寺に住み、五山文学者の代表であった。漢詩文集に「東遊集」「京華集」がある。

(38) 三条西実隆(一四五五—一五三七)

室町後期の公卿、歌人、古典学者。歌風は儒艶で表現も洗練された歌人で、近世への影響も大きい。伊勢物語・源氏物語の注釈や有職故実にも詳しい。

というのは、最も凝縮された形で、したがって濃密にできあがってきたのです。それを一口で言えば、都市文化というふうに見えると思いますし、王朝以来のものの集積された複合文化というふうな言い方もできるんじゃないか。その点で、茶の湯というものをやっておりましたときには、歴史と全く無関係というのではないにしても、しかし、常識的に全く別のことをやっているという感じでした。そんな時期に、村井康彦なるものが茶の湯のことをやっているけれども、あれ、だれだろうなんて言って、人をだまして喜んでいたこともあったんですけども。ところが、こういう都市研究、こっちの方の流れでやってきた都市研究と、茶の湯研究の中で必然の流れとして出て来た都市文化論が、ある時期、完全に重なってしまったわけです。そういう点で、何十年来やってきた研究が茶の湯を媒介としてひとつになったというふうに理解しています。

岡本太郎に対する全面的な回答にはなりませんけれども、日本の文化というものを理解していく場合に、生活芸術的な要素というものが大事であること。そして、それを理解するには、やっぱりそういう構造を見る必要があるんじゃないか。単に実用主義だけで理解できるものはないということです。細部にわたれば利休の研究とかいろいろありますけれど、大ざっぱに私自身を振り返って整理すれば、そんなことではないかなと思います。簡単に整理できるんです、我ながら情けなく思っているんですが、雑談というか、余談が多過ぎたような感じが、とりあえずは以上のようなことで、終わらせていただきたいと思います。

**酒井** ありがとうございます。

ちょっと時間が迫って来ましたが、せっかくのお話ですので、朝尾先生、何かご意見を私、お聞きしている範囲では、やっぱり古代律令の研究から転換されたと言っているかどうかはわかりませんが、平安京を中心に都の発展を研究され、そこから都市をお考えになって市中の山居としての茶の湯の文化史に入られた。そういう点では、はらばらのものでなくて、

ちょっと言葉をお借りすると、トラックは違っててもですね、あるところから合流していくような感じでお聞きしたんですけどね。それぞれ別でなくて、やっぱり底流において研究の流れが一貫しているというふうな印象をもちました。

**村井** 後からそう理屈つけただけで、能力がないもんだから、やっぱり前のものを引きずった結果にすぎません。

**酒井** どうですか。自覚的にやる場合と、自覚してないけれども、結果的にはそういう流れ、一つの流れに沿っているということがあり得るんじゃないでしょうかね。目的意識的にやる場合と、そうでなくて、もっと大きいスパンをとれば、研究というのはそういうことがあり得るんじゃないでしょうか。局面だけ切っていくとばらばらだけどね。やっぱり半世紀になると大きな流れになるんじゃないかな。朝尾先生どうですか。

**朝尾** そうですね。『鎖国』を書いたときに江戸の都市建設の時代と大名たちのあいだに盆栽愛好のブームが起きたこととの関係について述べたことがあります。同じ流れで理解できません。その時はわからないでも、面白いから追求していくと、後で全体の位置づけが自然にわかってくることはよくありますね。

**酒井** もう一言、お茶の世界でね、一期一会という言葉がよく軸にかかって、お茶の先生、指導のときに、よくそれを言われるんですね。これはやっぱり時代というものもそういう言葉が生まれるためには、単に人と人との一期の一会じゃなくて、もうちょっとそれこそ人生に絡むような、あるいは時代が生み出した言葉じゃないかと。ちょっと先生、補足していただけますか。

**村井** 茶の湯は、複数の人間が集まっての、しかも小さい空間の中に集まってやりますから、結局は、上手、下手といったことよりも、人間関係が重視されて来るんですね。複数の人間が行う連歌でも宗匠は、集まった人がいい句ができるよう和んだ雰囲気をつくり出すのが大事で

あるとされているんですが。しかし、連歌の席ではお互いライバルなんですネ。

その点について、スペイン人のオクタヴィオ・パスをはじめフランス、イタリア、イギリス四カ国の文学者がパリのホテルに集まって、連歌の会を催したという話。そこで感じたのは、「羞恥感。私たちは、日本人が素っ裸でお風呂に入るような感じで恥ずかしかった」というふうなことを言っている。「我々は書齋でいいことも悪いことも行う。ところが、日本人は公衆の面前で風呂に入るようなやり方で文学をやっている」というのです。いわゆる「座の文学」と「個の文学」の違いで、ヨーロッパ人、個の文学の世界に生きた人間にとつては、みんなの前でみんなとともに句をつくり連ねていくのは、その才能がもろにあらわれてくる。すぐ句を続けることができる人はともかく、文字通り苦吟惨憺しなきゃならん人間にとっては、これほど苦痛なことはない。こんな恥ずかしいことはない、そんなことを言っているんですが、ヨーロッパ人の感覚がよく出ていると思います。

連歌と同じように茶の湯も座の芸能で、ここでは亭主が茶をたてて客人に飲んでもらうわけですから、極端ないい方をすれば亭主の技量が問われるだけのことですね。そこで求められたのは、今集まっている人が和やかないつときを過ごすことができるようにという心くばり。それを「一座建立」という言い方をしている。したがってそこでは求心的な力しか働かない。批判して座を白けさせるような言動は、むしろタブーなんですネ。そしてその一座建立のため必要なものが、一期一会の気持ちであるということです。『山上宗二記』に書かれている文章です。それは、どういふことかという点、亭主は客人に対して、客人は亭主に対して、毎日出会える間柄であつても、一期に一会の思いでその人を敬い誠意を尽くすことが大切である、というものです。

つまり、一期一会というのは、例えばニューヨークの雑踏の中で知人と偶然出会ったとか、サハラ砂漠で出会ったとかいふような奇遇、それも一生に一度しか会えないような会い方のこ

ととしてふつう使っています。それで間違いいではない。間違いいではないんだけれども、一期一会という言葉が使われている状況は奇遇でしたなということと終わる関係ではなくて、毎日会える間柄でも、もうこの人とは、あしたは会えないかもしれないと思うことで相手を一生懸命敬ったり誠意を尽くしたりする、そういうむしろ人間関係、あるいは心がけを言っているんですね。だから、奇遇といった唯一回性より、日常的な関係の方に比重がある。

それを極端に言ったのが井伊直弼(39)の『一会集』です。朝尾さんも館長をされました彦根城博物館には井伊家のものがたくさんあって、その中の庄巻は『一会集』です。『一会集』という書名も、まさに毎日交會する間柄でもそういうふうな誠意を尽くすということが必要なんだというふうなことを説いたことに由来する。独座観念という言い方もしております。会が終わったら客の背中を見ながら、ばたばたばたつと戸なんかを閉めるといっのはもつてのほかである。静かに茶室にたち戻り、炉端に座って一人お茶をたてて飲む。そうすれば過ぎた時間が思い出される。今お客はどこまで帰られたであろうか。一期一会の会が終わった後も、その過ぎた時間をもう一回思い返しながら、お客のことに思いをはせる。そのとき聞こえるものは釜の音だけである、というふうな名文があるんです。極限にまで人間関係を問いつめた考え方だといってよいでしょう。

茶の湯というのは、そういう点では、結局は人間関係に帰せられ、その究極をあらわした言葉が一期一会であると考えます。世間でよく言われているような一期一会の用い方は間違いいは言わないけれど、しかしそれではこの言葉が登場した時の歴史的な状況や意味を知ることができないと思いますね。

**酒井** ありがとうございます。

彦根城博物館が出てきたところで、お休みを。あと、朝尾先生に継ぎますので、休憩を。時間がずれ込んでますけども、休憩一時間ほどいただきたいと思います。よろしくお願いしま

(39) 井伊直弼(一八一五―一八六〇)

彦根藩主、幕末の大老で勅許を待たずに諸外国と条約を結び、反対派を「安政の大獄」に処した。このため、水戸・薩摩浪士らに桜田門外で殺された。



す。

〔追記〕

すべてが終わったあと、忘れていたことを思い出しました。卒業論文(「周防国衙領の研究」)にはじまる国府研究や、受領を介しての中央と地方との関係、そこに見られる「都鄙意識」についてです。カメラを肩に六六カ国の国府跡をめぐり歩いたのは、主としてこのテーマに関してのことでしたが、これが私の今日に至るまでの一貫した研究テーマでしたのに、卒論のことから始めなかつたばかりに、すっかりわすれてしまいました。これについては『王朝風土記』(角川選書、平成二二年)にまとめました。

研究の端緒から

**酒井** それでは、午後の部といたしまして、朝尾先生にお話をお願いしたいと思います。ちょうど著作集全八巻(岩波書店)が昨年に完結いたしましたので、いろんなところへお書きになった論文、その他の文章を身近に読むことができるようになって、近世史の研究について大きな礎石を置かれたと思います。よろしくお願いいたします。

**朝尾** 酒井さんとは学部の上三回生のときからのつき合いで、高尾一彦さんが神戸大学の講師で行かれた年の最初の学生が酒井さんですね。

**酒井** そうですね。河内の更池村と、三宅村も行きましたね。調査にね。朝尾さんと出会った最初ですね。脇田(修)さんがいて、よくしゃべる人だなと思ってびっくりしたんですけど。

**朝尾** 脇田さんに高尾さんが調査に行くからと誘われてね。それで行ったのが最初でした。あのときに屋根裏部屋みたいなのころへ上がったら、ほこりがこれぐらい(一五センチメートル)積もってました。

酒井 橋本さんの家じゃないですか、三宅村の。

朝尾 更池の田中さんの家へも行きましたね。あれ以来ですね、長いおつき合い。

私は学年が村井さんより一年下で、新制の二回生になります。兵庫県立芦屋高等学校から昭和二五年、朝鮮戦争の始まった年に京都大学文学部に入学しました。芦屋では井上良信先生に学びました。「太平記」や「梅松論」の研究をされた方です。同級生には渤海史研究の上田雄君がいます。この人は神戸で酒井さんと同期でもあります。

旧制芦屋中学が新制芦屋高校になるのですが、その中学二年のとき日本の敗戦で、日本史教科書のスミ塗りを体験しました。いわゆるスミ塗り世代で、私たちの年代の者は日本史研究者になった人が多いです。先生の指示どおりスミを入れていくと、全ページ真っ黒になり、スミの膠でべちゃっとくっついて、二度と開けられなくなった教科書を手にして、一体ほんとの事実はどうだったんだ、事実の探求ですね。これは皆さん大体共通していたと思います。僕は、もう一つ感じたのは、その時に何か非常に自分の立っている大地が頼りなくなつて、浮遊しているような状態を感じたんですね。これは一体何だろうということがずっと頭から離れない。結局いまだに解決していません。ひよっとすると歴史ないし歴史学というものが固有に持っている何かがあるんじゃないかと。そんなことで、歴史と歴史学について何かわからない感情、感覚を一方でいつも追求しようとしてきた。この二つがスミ塗りから出てきた問題です。

ですから、経済の堀江英一先生<sup>(40)</sup>のゼミにも入れてもらい、いろいろ教わったけれども、著作集を見ると、『明治維新の社会構造』の書評(著作集第二巻)で、先生に対し「いぶん失礼なことを書いている。安良城盛昭<sup>(41)</sup>さんの議論も、あの人の言っていることは、大筋で僕は正しいと。京都では数少ない理解者の一人といえますけど、学説に対する尊敬の一方で安良城さんの方法というか、進めるやり方、お人柄、あの鼻持ちならぬエリート意識、それらに対する批判

(40) 堀江英一(一九一三—一九八一)

『藩政改革の研究』(御茶ノ水書房、一九九五年)では、今までの研究視角で捉えようとして捉えられない藩の事例が紹介されたことにより、藩政改革研究の地理的拡大と方法的な進化を招来する先駆となった。幕末小営業段階論を提唱し、明治維新の社会構造を明らかにした。工場制度の研究もある。『堀江英一著作集』(青木書店)。

は公然と持ち続けてきたわけです。堀江先生への批判も、これは歴史じゃないとか、思い切ったことを書いているんですけども、もとはといえば、中空を浮遊しているような感覚というか、生きる上での根本問題というか、そこからきているんですけど。

ところが、我々の三回生、専門へきた時代は京大生協の書籍部や、京大の正門前にあったナカニシヤ書店の書棚を占領していたのは、日本資本主義論争の書物、あるいはそのころ勢いがあったのは近世では藤田五郎さん<sup>(42)</sup>。毎年本を出しておられた。そういう本しかなかった。そんな本ばかりで。話はちょっと小さくなりますが、日本史関係ではアテネ文庫<sup>(43)</sup>という薄い小さな文庫本で伊東多三郎さん<sup>(44)</sup>の『日本近世史』かな、何か。津田秀夫さん<sup>(45)</sup>も書いてた。あの本がおもしろいと思っただけで、経済史の先生方の論争は、いくつか読むとあきてしまった。

教養部の講義では西田太一郎先生の「東洋政治思想史」(二年目は社会思想史)といったかな、これが面白かった。ウィットフォーゲルの水の理論なんかもこれで教わりました。それで西田先生の漢文(こちらの方が本業だといっておられた)の授業を受けました。「朱子語類」がテキストで難儀しましたが、後に役に立ったと思います。

それで、先ほどの高尾一彦さんにつれられた更池村と三宅村の調査ですが、この間亡くなった永原慶二さん<sup>(46)</sup>の「私の中世史研究」を見ると、古島敏雄先生と永原さんと杉山博さんとか、あのグループが桂の上久世の調査をやられて、その報告書は、たしか出ていたと思いますけども、その調査に高尾君や黒田俊雄君<sup>(47)</sup>が来たと言われている。そういうのは、高尾さんは、あのに、東京の連中はこれこれこういう調査の仕方をしているという話を、どんな調査だったか忘れてしまいましたけれども、教えられた記憶があるんですね。

酒井 そのときか河内の下小坂村の調査のときの写真を高尾さんから見せてもらったことがあります。古文書を広げておられるところですね。

朝尾 卒論で河内の農村の研究を書いたんですけども、四条村は中塚明さんの家、中塚さんは

(41) 安良城盛昭(一九二七—一九九三)

『歴史学研究』誌上に「太閤検地の歴史の意義」を発表し、太閤検地によって、封建制が成立したと主張し、封建制成立の時期をめぐる論争をひきおこし、近代天皇制論に及んだ。

(42) 藤田五郎(一九一五—一九五二)

日本近世の農村社会において、豪農がブルジョアの性格をもちつつ成長し、藩権力との連携を強めて持続的に上昇し、転化を上げた結果、明治絶対主義が成立したと主張。『藤田五郎著作集』(御茶の水書房)。

(43) アテネ文庫

戦後、弘文堂より刊行された。「最低の生活の中に最高の精神が宿されていないなければならない」という刊行のことはどおり、幸徳秋水・川端康成・鈴木大拙・小林秀雄・柳田謙十郎・西田幾多郎・土屋喬雄・安田徳太郎など多彩な顔ぶれが執筆した。

(44) 伊東多三郎(一九〇九—一九八四)

『大日本近世史料』の編纂をはじめ、日本近世の思想史、および生活史で業績をあげる。藩政史研究でも指導的役割を果たした。著作集『近世史の研

一年上の旧制最後の学生でしたが、うちの近世文書を見てくれと言われて行きました。中塚さんも几帳面な人ですけど、あそこの御先祖も几帳面な人で、克明に農業日誌を書いているんです。それを四、五冊だったかな、卒論に使った。実際は十冊ぐらいあったと思います（現在京都大学総合博物館蔵）。ほかに村内で二軒ほど調査させてもらいました。大学院へ進んだ一五四四年に有名な社会経済史学会の大会がありました。関西大学で、安良城盛昭氏が乗り込んできて宮川満さんと論争があった。

酒井 太閤検地論で宮川満さんと<sup>(45)</sup>。

朝尾 その学会があつたんです。けども、行つたらすぐに中塚さんにつかまって、古島敏雄先生が、うちの文書を見たいと言われるので案内してさしあげてくれ。自分は、文書は見えないし、わからんからかわりに行つてくれんかといわれて、それで、古島先生と一緒に四条村へ行つたんですよ。したら、大石慎三郎さん<sup>(46)</sup>とか安良城盛昭さんが来た。縁が非常に深いんです。

戦後の近世史の調査というものを主導したのは古島敏雄先生だと誰もが認めています。僕は、何も知らないで偶然それを目のあたりにするチャンスに恵まれた。そのときはただ見に来ただけだったと後で思いますけども、当時、日割奉公人というのが話題になって、日雇い労働者みたいなもんだと。農民が労働者になる直前の一つの形だという議論がありまして、その日割奉公人の史料が中塚さんところにあつたんです。僕も卒論で書いてますけども。どんな史料が見たいとおっしゃるので、それを主に見に行つたんですね。

### 幕藩制構造論

朝尾 話、全然違いますけど、最近、尾張の生駒さんという武士の史料をずっと見てるのですが、日割奉公人という言葉自体は近世の初めからあるんですね。それは自分ところの侍・中間

究』（吉川弘文館）。

(45) 津田秀夫（一九一八—一九九二）

史料の博搜で知られ、摂河泉地方はほとんど調査したといわれる。気骨の歴史家で、史料保存運動にも尽力した。『封建経済策の展開と市場構造』（御茶の水書房）、『幕末社会史の研究』（柏書房）。

(46) 永原慶二（一九二二—二〇〇四）

一九五〇年—一九七〇年代初頭は、主として荘園制の問題を中心に日本中世社会の研究を進め、その後は戦国時代に移った。晩年には『苧麻・絹・木綿の社会史』『20世紀の歴史学』（以上、吉川弘文館）をまとめた。「私の中世史研究」（『歴史評論』二〇〇二年二月・二月号）。

(47) 古島敏雄（一九二二—一九九五）

『近世日本農業の構造』『日本農学史』など、戦前から実証的農業史研究を発表し、多大の影響を与えた。『古島敏雄著作集』（東京大学出版会）。

(48) 黒田俊雄（一九二六—一九九三）

権門体制国家論を唱えるときに、中世の身分制と卑賤観念などで、中世の

など奉公人に対して切米を払うのに日割でやる。この奉公人は武士の奉公人です。言葉としては一七世紀からあるんです。最近になって気がつきました。あのころは天保以降にそういうものが出てきて、我が国の労働者の原始的な形態になるといふふうなことで、その史料をこらんなったんです。そういう意味では、偶然ですが、近世の最先端を歩まれたグループの仕事ぶりを目のあたりにすることができた。

そのころ農民層分解論が中心であったわけですが。藤田五郎さんが大変苦勞されたわけですが、我々が共通にぶつかつた問題は上昇転化論です。農民層が分解して富農と貧農に分れる。それが順調にブルジョアジーとプロレタリアートにならず、上層はあるところまでくると地主化し、ぱつと領主側に転化する。下層は小作人になる。それも一般的にいえる現象なものですから、この上昇転化論という壁をどういふふう突破するか、かなり真剣に悩みました。結局、その結論は社会構造全体の中であらうと、中農富農層だけを見ていたのでは解決できないと。どっちにしても上昇転化するものであれば、それは本来的に農民層の内部に何かあるからじゃないか。何かはらまれていたものが表にあらわれるか、あるいは社会構造全体が何かそれをうみ出すんじゃないかというところへいきまして近世初期の研究に移つたんです。成り立期に実は問題が胚胎しているんじゃないかと。

幕藩制構造論というものがそのころ近世史の学界をにぎわせていました。博士課程に入ってから、初期幕領の分析をやつたのは。ドクターの終わる年ぐらいに発表したと思います。そのときに大体、安良城氏の言つておることと僕の分析と、ある一致する部分がある。それは、近世社会の前提に小農保護、彼は小農自立政策と言つてましたけど、がある。そして、奴隷制の体制的否定、そういう面があることに気がついて、僕は近畿では珍しい安良城派とみなされることになるんですが、彼の歴史学については徹底的に批判、これも恥ずかしいんですが、著作集に載つてます。とてもじゃないが赤面しないではいられない代物ですけども、初期から元

身分制と被差別民衆史研究をめぐるその後の研究史に画期を創つた。『黒田俊雄著作集』（法蔵館）。

(49) 宮川満（一九一七—二〇〇四）

『太閤検地論』（御茶の水書房、「改装版あり」、第一部 日本封建制成立史、第二部 太閤検地の基礎的研究、第三部 基本史料とその解説からなる）は「相対的革新説」の立場から太閤検地論争を主導した著者の代表作。『宮川満著作集』（第一書房）の中では、第二部の補論が増補改訂されている。

(50) 大石慎三郎（一九三三—二〇〇四）

『享保改革の経済政策』（御茶の水書房）において徳川体制崩壊過程を追及した。他に市場構造論を展開した。『田沼意次の時代』（岩波書店）、『近世村落の構造と家制度』（御茶の水書房）。

氣に批判してます。学問の批判は私情ではない、公的なものだという考えからですけれども。

安良城さんの学説の恩恵はいろいろこうもつています。実際、彼は、初めは、ういやつたぐらゐの感じじゃなかったかと思うんですけどね、そのうちにだんだん生意気なことも言うやつだと。関係は一樣じゃなかったですね。しかし、僕の歴史学の立場からの批判には、彼は一回も答えなかったです。無視された。しかし、この間の著作集（第八巻）にも書きましたが、手ごたえはあった。だんだん有名な、早朝の電話がかかってきました。自分の意見をこうだろうとか、こういうふうと思うんだが、どうだ。僕は、朝弱いんでね、物すごい迷惑なんです。親しい人間に対してそういうふうにくるんですね。一遍、彼の家に泊めてもらつたこともありませんけど、芝原拓自君ともう一人中村哲君かだれかいたような気がするんだけど、僕はもう途中で失礼して寝ちゃつた。芝原拓自君が一晩つき合つたと言つてました、飲みながら。あの人と体力ではちよつとけんかになりませんので私は降りた。

私の安良城批判はその基本階層論に向けられています。これはできあがつた社会構成の枠組みを基本的にささえる階層を中心にとらえるもので、移行期・過渡期をとらえることはできない。静態的把握にならざるをえないというものでした。では何が有効か。当初はウクライド論でした。複数のウクライドを想定し、成長するもの・衰退するもの・体制をささえるものなどなど。それらが競いあつて社会構成体を変革させていく。これは安良城批判としてはかなり有効だつたと思います。しかし、現実のさまざまな事象をすくいあげるにはウクライドの概念ではまだ狭い。たとえば賤民身分について生業の部分だけ（経済的に）とらえても、その歴史を把握できないでしょう。

そんなことをしてりましたが、私は、そういうふうには講座派と労農派の論争には関心がございませんでした。それよりも、上昇転化論ですね、これを一体どうしたらいいんだらうか、克服できるかという。それには、やっぱり近世史の総体ということを考えないとわからないん

(51) 講座派

一九三二年頃から野呂栄太郎を中心に『日本資本主義発達史講座』（岩波書店）で日本資本主義の歴史的・政治的総合分析を行い、日本における封建遺制の残存を強調して労農派と論争した。

(52) 労農派

一九二七年創刊の雑誌『労農』を中心として集まつた社会主義理論の学者・社会運動家・文字者たちの総称。講座派との間で政治路線に絡む日本資本主義論争を展開した。

じゃないかと。そうすると、近世史は、いつからいつまでなんだという話になってまいりました。そのころは講座派の考え方をさかのぼらせて近世史を明治維新史の前身みたいな扱い方が中心で、初期の研究をやる学生はほとんどいなかった。初期へ移るのには相当決意がいったんです。それで、近世史の範囲は一体いつからいつまでと考えるのがいいかということを考えて、それが「日本近世史の自立」にいくんです。

当時の研究史上の大きな問題は、近世は封建制か封建制の再編か純粹封建制か、それに服部之総さんの初期絶対主義論。いったん胎内には生まれた資本制が徳川家康の東国封建制により墮胎されたという。三つないし四つぐらいの説があつて、議論になっていました。僕は、それにも関心がなかったわけじゃないけども、自分の関心というか、問題の方が手いっぱい、私自身が研究史とのつき合い方はいつもそうだったと思うんです。自分の持っている問題にどういう答えを出してくれるだろうか。答えを出してくれない研究は、わしはしらんということです。そのころは浪人時代です。五九年に博士課程の単位を取得しましたが、新制大学院の制度が定まっていない。一年留年して、翌年は退学せよとのことで退学し研修員になった。しかしこれは無給で、研修料を支払わなくちゃならない。それで小葉田先生<sup>(53)</sup>の推薦で堺市史統編の編集主任(囑託)になった。六八年に京大に就職するまで九年間の浪人生活です。浪人はよくも悪しくも自由ですね。さつき休憩時間に村井さんにいつ勉強できましたかとお尋ねしましたが、浪人しているときは、アルバイトや何かで自分は勉強する時間がないと思っていました。後から考えると、就職すると仕事が忙しくて時間がありません。結局、浪人時代が一番勉強できました。その中に居るときと外に居るときでは評価が変わるものだということを認識させられました。当時は熱中していたのは、近世の社会構造全体というか、総体的な構造の把握であった。そこへ岩波講座日本歴史、戦後第一次の講座、すこく沢山出たの。あれが回ってきて、豊臣政權論<sup>(54)</sup>というとてもない題がきた。『將軍権力の創出』にも書きましたけど、腰抜かすほど

(53) 小葉田淳(一九〇五—二〇〇一)

対外関係史研究・貨幣史に従事し、台北帝国大学在職中に書いた論文をもとに『中世日支通交貿易史』をまとめた。日本の前近代鉱山史においても、各地を調査して堅実な実証研究で大きな足跡を残した。

(54) 豊臣政權論

豊臣政權は統一政權であり、全国的に大間検地を実施して荘園制を終息させて石高制を確立した。在地領主制を否

びつくりしました。人違いかとわざわざ聞きにいった。豊臣政権論、このあと政治史へ回った。総体構造の把握を自分でやることになった。織豊政権の評価について当時、豊田武さんと今井林太郎さん<sup>(55)</sup>の意見が対立していた。今井さんは、一揆に対する抑圧体制といわれた。結果的には僕の考えはそちらを継承したといえる。当時そういう意識はなく、豊田さんは封建的秩序の強化と都市・商業資本の重用をあげ、封建王政に比定された。「世界史の基本法則」の時代ですから、賛成派も反対派もヨーロッパのどの段階へ日本社会が位置づけられるかという議論が盛んに行われていた。それも僕は余り関心がなくて、さつきから言ってますように内部構造、社会構造という社会の内面から見る立場に自分をもっていった。豊臣政権というものを秀吉個人でなく権力内部の諸將・構成メンバーを含め、権力構造分析の視角からとらえた研究はあれが初めてだと、ひそかに自負しておりますが、村井さんのお話との接点をさがしますと、千利休<sup>(57)</sup>の事件に行き着きます。千利休の死を権力構造内部の葛藤として取り上げた。あの結論が正しいか正しくないかよりも、あの当時と言いますと、芳賀幸四郎さん<sup>(58)</sup>、桑田忠親<sup>(59)</sup>さん、文学者で唐木順三さんとか、皆、茶聖利休から出発している。僕はお茶の研究をしようと思って読んだわけじゃない。千利休が生きてるうちに、政権内部で重要な地位を占めていたらしい。御承知のように、「内々のことは利休、公儀のことは秀吉に」という秀吉の言葉があつて、これは勉強せないかんと思つて利休関係を片っ端から読んだ。大体そういう扱い方なんです。なかには、「世間にはソロバンで生きる人と、気持ちで生きる人がある。利休は後者で気持ちで生き抜いた人物だ」と、どこでも通用するよつなことをいつてる。利休がどうしてあの時点で、どういふ理由で死なねばならなかったか。歴史の初歩的な疑問について、僕には納得のいく説明がなかった。先ほどの市中の山居についての考え方は、村井さんのお考えは、もう出ていましたかね。

定して近世社会の基本原則である、兵農分離制を完成させた。

(55) 豊田武(一九一〇—一九八〇)

寺院・神社組織の研究・市場・座・商人など、武士団や村落結合の幅広い研究を行い中世商業史の研究水準を大幅に引き上げた。『豊田武者作集』(吉川弘文館)。

(56) 今井林太郎(一九一〇—二〇二二)

莊園の研究に早くから着手し近世初頭の検地によつて莊園的土地制度が消滅したことを論証した。『日本莊園制論』(三笠書房、復刻版・臨川書店)、『石田三成』(吉川弘文館)、『織田信長』(筑摩書房、のち朝日文庫)。

(57) 千利休(一五二二—一五九一)

草庵の小座敷で完全に自然と一体化して簡素でおごらぬ美の創造を主張し、精神の深淵を追求して侘茶を完成した。

(58) 芳賀幸四郎(一九〇八—一九九六)

東京高師在学中にプロレタリア教育運動にかかわった。その後、東京文理科大学(のちの東京教育大学)で教鞭をとる。一九三四年に両忘庵釈宗活に入



## 千利休

村井 僕は利休を書いたときには、朝尾さんを参考にしたように思うから。

朝尾 私は、茶聖が政権に参加したのではなく、政権にいた豪商が茶聖になった。日常ビジネスに生きている人間が茶の湯の四畳半あるいは二畳の狭い非日常の空間で茶の湯をつくったんだというふうに思うようになってきました。そういうふうには、ああいう解釈も成立する余地があるのではないか。

堺でも利休さんに対する信仰は非常に強いですね。一口ではちょっと言いにくいですけど、堺の人は利休が好きで、自由都市が好きでというのがあるんですね。僕が行ったころは、前の三浦周行先生<sup>(61)</sup>が市史をつくられた時代の古老が残っておられましてね、難しい文書なんかを持ってきては、人を試すんですよ。そういう人たちが好んでいたのが自由都市と利休。私が担当した堺市史続編は市内が対象じゃない。酒井さんにも分担していただいたように、合併周辺地域なんです。だから、そんな話にはつき合いたくないんだけど、地元がそういう話を好まれるもんだから、しょうことなしに勉強した側面もございました。そういうのと両方で利休さんに対する私の考え方、つまり政治目的の達成や利潤追求といった俗事にまみれた活動しながら、一方で茶を追求する。それがあある時点で破局に至ったのがあの事件じゃないかという、そちらの方に重点がありました。

村井 一言いいですか。

私の利休理解もね、朝尾さんの考え方にかなり影響を受けていて、信長時代は利休は三番手。今井宗久<sup>(63)</sup>、津田宗及<sup>(64)</sup>、田中宗易という。それが秀吉時代になった途端に一番手になる。今井宗久は三番手になっていくというね。二番手が周恩来<sup>(65)</sup>みたいなのがね、津田宗及という感じですが、それはともかくとして、側近的な動きというものをそれをちょっと俗事にかかわった利休と芸術家利休というふうに分けたりしてね、理解するというような、あるいはこっこの方

門。一九五八年には人間禅教団師家に任ぜられる。『芳賀幸四郎歴史論集』(思文閣)。

(59) 桑田忠親(一九〇二—一九八七)

戦国武将の実像や戦国時代が生み出した茶道文化を専門に、晩年は信長・秀吉・家康らの合戦を生き生きと描写した。『桑田忠親著作集』(秋田書店)。

(60) 唐木順三(一九〇四—一九八〇)

京大で西田幾多郎門下として哲学を学び、教員生活のあと、著作・評論活動に入った。戦後は明大教授を務めながら、『千利休』など多くの著作を発表し、中世の再発見に努めた。『唐木順三全集』一九卷(筑摩書房)。

(61) 三浦周行(一八七一—一九三一)

京大國史研究室の創設にかかわり、その基礎を固め、史料収集に努めた。研究分野も広く、古代から近代に及び、日本社会史研究の道を切り開いた。『日本史の研究』(岩波書店)。

(62) 織田信長(一五三四—一五八二)

戦国・安土時代の武将。足利義昭を追って幕府を滅ぼす。安土城を築き、天下統一をめざすが京都本能寺で明智

を無視して芸術家利休の芸術面での対立であったというような言い方なんかで行われていたのが利休論だったと思うんですよ。それを一緒にした利休でないとほんとの利休ではないではないかというふうなことで、今おっしゃったように、側近としての活動と茶の湯での活動、特に利休の茶の湯での作為が出てくるのは、やっぱり秀吉時代なんです。しかも、もう天正一三、四年ぐらいに彼の一つの茶の芸術ができ上がっていると見てもいい。

私は、最近、大阪城の利休というものをちょっと考えなあかんというふうに思っています。ついでに申せば、天正一四年、一五年ぐらいから石田三成と津田宗及と、それから博多の商人、豪商、かみやうたぬひ神谷宗湛とか、この結びつきが出てくる。利休はだんだん脇に置かれてくるというふうな状況が出てきていて、三成が利休の追及の先頭だったというふうな昔から言われているけれど、多分それはそのとおりだろうと思います。そして、いわゆる唐御陣、朝鮮出兵に反対したから利休やられたんだというふうな言い方されますけど、そこまで言えるかどうかは知らないけれど、朝鮮出兵推進派と結びついた連中と利休とは、明らかに離れてきているということはあるんじゃないかというのは私の最近の理解ですけど、利休論に幅を広げてもらったのが朝尾さんだろうというふうな私も思っておりますけれど。

### 近世社会のとらえかた

**朝尾** 市中の山居論というのは、僕は、最初はロドリゲスの記事を見過（65）してましてね、『鎖国』を書いたとき村井さんの本で知ったと思います。私の考えたこととびつたりあっている。さて、豊臣政権から政治史へ転換しました。ごく簡単に申します。將軍権力ですね。これはどこからお話したらいいかわからないんですけども、日本近世史の枠組みを考えたときに、これも言葉だけ有名になってしまいましたけど、兵農分離、石高制、鎖国制この三つのセットで近世の社会はとらえられるという仮説を出しました。私は早くから人文科学も仮説なしに仕事は

光秀に襲われて自刃する。

(63) 今井宗久(一五二〇—一五九三)

室町末期の茶人で堺の納屋衆の一人。信長・秀吉に仕え、利休・津田宗及と共に三大宗匠と称された。

(64) 津田宗及(?—一五九一)

安土桃山時代の茶人、茶を紹鷗・宗達に学んだ。

(65) 周恩来(一八九八—一九七六)

中国の政治家、母方の祖父の家で多くの書籍を学び中国古典の教養を身につけた。日本で日本語、基礎教育を受けた後、早稲田大学・京都帝国大学で聴講した。一九三五年以降、毛沢東を支持し、補佐役を指向し、死亡時は総理だった。

(66) 石田三成(一五六〇—一六〇〇)

佐和山一八万石の城主で、豊臣秀吉に仕えた。五奉行の一人で、特に経済・財政面で活躍した。関が原に敗れて京都で斬首された。

(67) 神屋宗湛(一五五三—一六三三)

豪商で茶人でもあった。秀吉の博多復興に尽力、屋敷を与えられ町役免除の

できないと考えておりました、その点も安良城さんと共鳴するところがあるんですが、怠け者ですから、自分もそれに沿って研究をほかの人よりもやらないとだめだって、尻をたたく意味もあります。兵農分離がその中でも一番基本かなというふうに思っています、これをいろいろ考えているうちに、信長、秀吉が一番対決しようとした勢力は何だったんだろう。やっぱり農民じゃないかなと。戦国時代は戦国大名同士が戦ったと言われているんだけど、よく考えてみましたら、日本歴史の上で百姓が万単位で殺された時代というのは一六世紀以外にないんじゃないか。信長の場合、皆殺的な状況。秀吉はちょっと反省して「秀吉人を切りぬき申し候こと嫌い」(『毛利家文書』九八〇)とかいってますが、一揆勢力は解体した。

農民の力は、どついう形で発揮されているかという点、やっぱり一揆だ。その中で、一番大きなものは一向一揆、もう少し一般化すると宗教一揆。島原の乱に際し柳生宗矩が、「宗門につきて人心の一致は大事のものなり」これが一番恐ろしいと言ったという(『徳川実紀』第三篇)。これじゃないかと思っていて、「將軍権力の創出」<sup>※</sup>という論文を三回に分けて発表しました。これは、大学紛争の真つ最中で、私の研究室は封鎖されてもちろん入れない、図書は利用できない、授業はできない、そういう状況で、私の家で学部で学生何人が集めて輪読会をやっていた。ちょうど『信長公記』<sup>(68)</sup>が角川文庫から出た年かな。それを一字一句最初から最後まで読むことをやっておりました。それが一つの基礎作業になったわけです。いろいろ御批判もちょうだいしておりますけど、基本線は間違っていないんじゃないかと今でも思っているんです。

一方で、兵農分離は政治的につくり出された体制である。当時は兵農関係というのは、一般的に階級関係ととらえる方が多かった。それが主流だったんです。私はこれは身分の問題じゃないかと気がついた。身分関係としてとらえられる。そういう意味では階級と身分とはつきり分けて考えたのが一つのポイントだと思います。身分の話はちょっと後へ回しまして、鎖

特権を得た。一五九二年の朝鮮出兵では兵糧集積など兵站面で活躍し、秀吉から名護屋での商売を許された。

(68) 「信長公記」

織田信長の一代記。太田牛一により一六〇〇年頃成立。首巻とも一六巻。

国ですね。鎖国も非常に重要な条件なんですけれども、これも全体的な議論をしようと思うと大きな話になってしまつので、ちょっと堺の問題に絞らせていただきます。

※「將軍権力の創出」は話題になり、信長の政権構想をめぐって、いまだに物議をかもしませんが、ひとことどうしても言っておきたいことがあります。論文は七〇～七四年の発表ですが、九二年になって、「この提起は、天皇を戴かない国家の可能性を探るという、一九七〇年代当時の課題に因應のものであった」（池享「戦国・織豊期の朝廷政治」『一橋大学研究年報 経済学研究』三三）という解説が出されました。私はこの方から著書や抜刷を頂きましたが、お会いしたことはありません。「七〇年代の課題」とは何か。だれのどういう課題か。私としてはあずかり知らぬことです。ところが、近年研究史の説明などにこれを引用する人がいて、迷惑しています。当時、私は日夜史料を手にするたびに、「いったい信長はどこまでいくつもりだろう」と考えながら過ごしたのは事実です。しかし、「天皇を戴かない国家……」のような、政治的課題を前提に研究したことはない。このことは論文の品格にかかわることなので、ひとこと申し上げておきます。

### 自治都市―堺

朝尾 堺は自由都市だったのかそうでないのかというと、僕は、自由都市ではないと。一貫して自治都市と言っております。そういうことを教えられたのは小葉田淳先生の業績からでした。小葉田先生は、御承知のように、卒論で貨幣史をやられた。台北帝大から引き揚げてこられ、京大で西田直二郎さんが追放されたあとにこられた。そのころの先生は、戦争で御家族を皆亡くされて、一人で京都へやって来られて、ほとんど絶望的な状況であられたと思うんですね。講義も、声は小さいし、ボソボソとよく聞こえないときもあるし、余り名講義というものではなかったですね。それが『中世日支通交貿易史の研究』と『中世南島通交貿易史の研究』これは琉球通交貿易史ですが、この二冊を読みまして、僕の考えががらりと変わった。小葉田先生に対する尊敬の念が強くなった。これは偉い先生だと。どこだったか何かでインタビュー



朝尾 直弘 氏

を受けたときに、偉そうにも自分は恩師の業績を尊敬しているので、これを世間に広める役割をしたいというようなことを言ってる。若いころは冷や汗もののことを大分言っています。この転換の背景に、先生が新しい家庭をお持ちになって元氣になられたことがあり、また、先生の鉱山史調査のお供をしてお人柄にふれたこともありです。先生は史料の前に座られると一日中その姿勢で史料を見ておられる。集中力がすごい。これは学びました。研究を始めるのに周到な戦略計画を立てられる。これは晩年に知ったのですが、私には真似できません。おだやかな方でしたが、テコでも動かぬ信念を内に秘めておられました。私が一番印象を受けたのは、東アジアにおける通交貿易というのは中国、一六世紀には明帝国ですが、中国を中心とした朝貢体制に規定され、国家と国家の貢納関係、貢納通交として現われる。したがって国家⇨公権と公権の間の公貿易が基本になっている。商人とか民間人が割り込める可能性は体制としてはほとんどない。体制が衰弱したら可能性がある。そういう内容が事実をもとに淡々と記述されている。

話は堺へ戻りますが、ヨーロッパの自由都市についての研究もそのころ少しずつ変化してきて、自由都市とは国王・貴族・司教など都市領主の支配からの自由を意味し、そういう特権をもった都市であるとされる。堺も結局あそこが勘合貿易に包み込まれてくるのは、全く偶然の要素ですわね。応仁文明の乱で明へ渡った船が瀬戸内海を通れなくなった。それで、四国の南を回って紀伊水道から入ってくる。いわゆる南海航路が開かれた。都市の自立的発展というより、ときの政治状況に従属して堺の貿易港としての地位が左右されている。また、体制として商人の位置が非常に低い。公権でないと対応できない建前、そういうようなことから、どうも自由都市が成り立つ条件というのは非常に小さいのではないか。まして秀吉が天下統一した段階では、中央権力は非常に強力なものになってますから。数年前ですけど、堺でこの話をする機会があったんで、もしも可能性があったとすれば、応仁文明の時期くらいではないだろ

うかという話をしたんですけどね。（『自由・自治都市堺』著作集第六巻）あの時期ですと、大体堺商人は錢四千貫ないし五千貫で貿易を請け負うわけね。一回渡航すると一万貫ぐらいもかかる。商人が一番豊かだったんじゃないかなと思う。それに比べると、千利休たちの時代は、やはり豊臣権力が強くて、商人の手にはそれほど富は残らなかつたんじゃないかなと思う。

### 身分制と都市の研究

**朝尾** 昭和四三年に京都大学文学部助教授に任用され、翌年一月から大学紛争になり、文学部は長期にわたって騒ぎが絶えず、落ち着いた研究のできない大学生活でした。講義ノートは満足できるものではありません。外部の出版計画に編集委員として参画することが多くなりました。昭和五年に教授になり、翌年ハーバード日本研究所の招待でポストン生活を一年間楽しみました。帰ってすぐ博物館の改築にあたつたのがきっかけで大学行政に関わるようになり、定年（平成七）までよく使っていたいただきました。退官後、京都橘女子大学にお世話になり、彦根城博物館の館長、住友史料館の館長を勤めましたが、体調を崩し、平成一六年三月で前二者はやめさせてもらいました。住友は近いのと小葉田先生の遺志もあり、館の充実をめざして努めています。結局、就職してからは仕事らしい仕事はしていません。ただ研究テーマとしては、いくつかあります。一つは身分制と都市の研究です。これは両方まとめてお話できる面と、そうでない面とございます。まとめてできる方から話しますと、これも堺から始まるんです。地縁的職業的身分共同体、それが日本の近世都市の基礎にあるんだという話を発表したのは、八〇年だったと思います。そのきっかけは、七六年に堺大絵図<sup>(69)</sup>というものが発見された。元禄二年の、堺は古くから発展したまちにもかわらず、絵図はないんですね。元禄二年が一番古いものです。その古いものが大きなものでありまして、十畳敷ぐらいのところへ広げると部屋が狭く感じられる。それを見ておりますと、町ごとの出入り口が書き込んである。一つの

(69) 堺大絵図

元禄二年（一六八九）に作成された堺大絵図の原本と見られるものがあらわれ、前田書店より刊行された（『元禄二己巳歳堺大絵図』一九七七年）。

通りを挟んで両側に並ぶ屋敷と言いますか、短冊状の棚店、それを一つの単位として一つの町が成立していることが絵図の上で非常にはつきりと確認できた。これが一つです。

それから、文禄三年の秀吉の検地ですね、いわゆる太閤検地、検地帳は一冊だけ焼け残っているんです。九間之町くけんのみちやうという町の検地帳です。これ見たときに、おやつと思つたのが一番最初なんです。僕は、それまで堺の検地帳は堺全体が、せいぜい南北、南の荘と北の荘が単位になつてやられていたと思つていたんです、漠然と。ところが九間之町くけんのみちやうという一つの町まちですね。六〇間の長さの通りの両側に屋敷が並んでいる。棚（店）が並んでいる。それが一つの単位になつていてということに気がつきまして、考えてみたら、農村は村が単位ですわね。太閤検地の場合はもうちょっと広い範囲の郷というような単位になつてゐるものもありますけども。そうすると、都市といつても、実は農村の村に対応するものは町ちやうではなからうかという発想がびんときました。都市の単位は町、農村では村という考え方がだんだん固まつてきた。そうしてみますと、今井宗久の覚書なんか、南の荘、南材木町、あるいは甲斐町かいのみちやうと、町を単位に代官として税金徴収を進めている。堺という都市はないと違つかと、極端に言えば。あるいは南北はあるけれども、南北と言つているものも、ひよつとしたらないのかもしれない。実は、住民（＝町人）のほんとの共同体、自治を担う共同体は、町にあるのではなからうか、これが身分共同体、町人身分の共同体と考えたきっかけです。

一方で、先ほど来お話ししております統一政権の成立する以前に抵抗した一揆というのはどういふものやという関心があつて、それと並行しながらこの問題が出てきたわけですね。そうすると、抵抗したのはどうもいろいろ考えていきますと、やつぱり惣というものじゃなからうかと。その辺まではだんだんいろんな史料から考えがまとまつてきてたんですが、先ほどの町が共同体というときの、集団であるということから、惣も集団ではないのかな。今まで皆さん、惣というのは一つの村的なものであるとはだれもが言つてたけども、人の形成する団体が惣な

んではないか。理論面で考えまして、ドイツ語のシュテンズ(Stände)という概念ですね。これは要するに、身分制議会かなんかのことをシュテンディツシエ・フェアファッスング(Ständische Verfassung)といって、身分団体という翻訳がついている場合が多いと思います。身分団体の研究している人はいないかという文献調べたりしました。東大で当時、西洋史をやっておられた成瀬治さんが北大時代に書かれた論文で、「Ständische Verfassung考」(身分団体考)という長い論文が二号にわたってありまして、これ苦労しながら読ませてもらったんです。シュテンディツシエ・フェアファッスング、身分団体とはこういうものだということが書いてあるんです。細かいことはもう忘れてしまっただし、日本史でそこまでいらんだろうと思っんですが、要するに、身分制議会のもとになった身分団体とは、一つの人間の集団だということがわかってきた。これなら日本でも使えるんじゃないかと。先ほどの都市の町というものの一つの身分団体。農村では村というものが一つの身分団体。そして、惣も実は百姓の自律的な身分団体と考えると、兵農分離というものがわかりやすくなるんじゃないかな。この身分を集団としてとらえるという考え方、多分、僕が研究史に貢献しているところじゃなからうかなと思っんですけれども。もちろん、細かいこと言いますと、集団なのか団体なのかとか、自律度如何とかいろいろ問題はあるんですけれども、今まで身分制度というものが論じられる場合には、やっぱり制度の枠の中へはめられた地位としての身分という考え方が強かったけれども、身分集団というものがあって、それが自律的に動いていて、その自律的に動いているものを権力が押さえ込む、あるいは編成するという考え方はなかったと思います。

身分論はそういう入り方で結末も大体そういうことでした。もう一つ身分論には別な系統から入りました。これは酒井さんも御承知のとおり、更池村の分析、あそこは御承知のように被差別部落があった。そして、居住地も竹垣で囲った、江戸時代ですけど、湿地帯で条件の悪いところにある。これは、私の学位論文を刊行した本(『近世封建社会の基礎構造』)に図面で出



ていて、非常にわかりやすいものだからいろいろな人が使って、いろんな団体も使っています。あることはわかっていたけれども、史料を何しろ追求してなかった。それが酒井さんや森杉夫さんや、大阪のグループの方が史料を調査して、オープンにできるようにされたんですね。(70) 更池村史料。もちろんほかの南王子村の史料など多くの成果があります。ほかの村はともかくとして、更池村の非常に充実した史料集ができあがった。私がそれまでの議論で違和感を持ったのは、皆さん、更池村の「かわた」と理解しておられるんだけど、よく史料を見てみますと、更池村の属している布忍郷の「かわた」なんです。享保ぐらいまでは布忍郷の「かわた」なんです。これはおかしいじゃないかと論文を書いたのがきっかけで、その後の研究にはまり込むことになる。その布忍郷の「かわた」というのは一体いつできたのが、これはわからないけども、近江や河内のほかの史料から考えますと、中世の終わりぐらいにそういう郷単位、あるいは郡単位の「郡中惣かわた」というような在地の団体ができている。すべて集団であり、それが近世の中期以降に村に配属されていくというようなことがだんだんわかってきた。これが惣や町村の分析の結果と大体一致してくるんで、ずっと取れんしていくと兵農分離と將軍権力の勢力というものが総合的、統一的にとらえることができるかなということになったわけです。

お前は近世社会を一体どう考えているんだと言われますと、私は、今、近世というのはやっぱり身分制社会だ。そういう幾つもの身分団体、主要な身分団体、すなわち土農工商という、例えば農だと村、商だと町というようにですね、団体・集団に属した諸身分が將軍権力によって統合されている。土農の土は大名の家が単位であった。皆、「中」という言葉で統一されて、村は村中、町は町中、大名は家中、この中に入らない者は正規のメンバーじゃない。近世は、そういうふうになんか中と言われるような各身分団体に属していることによって生存権が保障されているという、そういう社会ではないか。非常に複合的、重層的に構成された社会で

(70) 更池村史料

河内国丹北郡、松原市内に伝わった文書で、『河内国更池村文書』（部落解放研究所）が刊行されている。

(71) 南王子村史料

和泉国泉郡、和泉市内に伝わった文書で、『奥田家文書』（大阪府立図書館、部落解放研究所）、『大阪府南王子村文書』（和泉市教育委員会、部落解放研究所）と奥田久雄による索引・目録（比叡書房）が刊行された。

はなからうかというのが大体大きっぱに言って今のところの到達点で、上昇転化論はどうなったと言われると困るんですけども、そういう構造の一つの動きの中で出てくる問題だというふうに説明しようと思えばできんこともないんじゃないかと思ってます。

駆け足で、申し訳ありません。これぐらいで御勘弁下さい。何か御質問がありましたら補足いたします。

#### サマーセミナー

酒井 それでは、朝尾先生独自の近世史の自立と展開ということだったんだと思うんですが、これに関連して、先生、今の報告された内容の延長として幾つかの大きな仕事をされています。例えば、サマーセミナーを創設されたということは、近世史の今も四〇年以上続いていると思うんですけども、もう半世紀近くですね。これは、私は画期的なことだったろうと思うんですね。その最初のきっかけを京都で朝尾さんが担当されておられた。これについて幾つかお尋ねしたいんですけど、まず、サマーセミナーをどういういきさつで大学、地域を超えたフリーな研究会が可能になったのか。若い研究者の結集が可能になったのかですね。

朝尾 あれは、一九六〇年ですね、第一回です。サマーセミナーとしては近世が一番早かったです。モデルになったのは、芝原拓自君が聞き込んできた、物理学の素粒子論の若手研究者グループがサマーセミナーというものをやっている。あのころは湯川秀樹<sup>(72)</sup>さんがノーベル賞をとられて、物理の連中の鼻息の荒い時代で。

酒井 京大の地下食堂にメソンのという喫茶店ありましたね。あれ、中間子のことですね。

朝尾 若手グループが毎年夏に大学の枠を超えて集まり勉強会をもっているらしいと。あんなんでけへんやろうかと来たんです。ちょうど私は、佐々木潤之介さんとの歴研大会での論争の最中でした、これまた大変、あの人、かみそりみたいな人でね、物すごく鋭い。新制東大文学

(72) 湯川秀樹(一九〇七—一九八二)

東京生まれ、理論物理学者でノーベル賞・文化勲章を受章。中間子の存在を考え、素粒子論展開の契機を作った。また、核兵器は悪とみなし平和運動に貢献した。

博士第一号で、歴研大会のたびに論争していた。今から思えば新制の大学院生がドクターコースを修了し始めた時代で、新制は学力がないといじめられていた時代で、逆にになくそというんで皆頑張っていた時代なんですね。それがある節目を迎えつつあった。そういう気運に乗ったといえましょう。歴研大会の後で近世史研究者集まってくださいということで、私がここの夏、京都でこういうことをやりたいと思うがどうですかと言ったら、皆、賛成賛成と。あれ、何名集まったか。そのときの参加者の資料見たらすぐわかります。随分たくさん集まりました。京都の外れの大悲山峯定寺というお寺で。

**酒井** 左京区とは言いながら、すごい山奥でしたな。

**朝尾** 山の中。外へ出られないようなところでカンヅメにしてみました。主テーマは、時の話題になるような報告をしてもらって、夜を徹して、二泊か三泊しましたな。

**酒井** そうですね。最低二泊はしたんでしょうな。平均年齢は三〇歳という報告がありましたな。年配の先生クラスではどうですか。

**朝尾** 年配の方では大石さんと津田さんですね。岡山の内藤二郎さんも常連でした。

**酒井** 大石慎三郎さん、津田秀夫さん。中心は院生ぐらいですね。平均すると満三〇歳だと朝尾さんが発表されたと記憶しているんです。大体私の年齢に近いなと。

**朝尾** そのときの連中がその後ずっと日本の近世史を担ってきたと思いますね。亡くなりましてたけど、東北の渡辺信夫さんとかね。新幹線もない時代、あんな遠いところから参加した。近世史は史料が膨大で一人でこつこつやるには限界がある。どこへ見に行っても、友人がいて教えてもらえる、そういう状態をつくるうとしたのが受けた。

**酒井** あのセミナーに私はそう毎年出たわけじゃなくて、時々気が向いたときに広島へ行ったり九州へ行ったり、回り持ちでね。あのおかげで地域を超えた、あるいは大学を超えた友達が全国にできることになりましたな。研究上の交流で非常に便利になりましたな。近世サマーセミ

ナーは今も続いていますね。あと、中世も近代もやってますね、毎年夏に。古代もですか。最優先で、つまり夏何か行事するかといったらサマーセミナーの日程が問題になる。もうちょっとほかの催しは下げようかというくらいの盛会ぶりですね。

**朝尾** このころ行ってないのでね。どうなっているか、よく知りませんが。

**酒井** 私も全然。年配でまじめに行ってる方、まだあるのと違いますか。それで、ほんとに知らない人と幾つかのグループに分かれて議論をして、それから、最後、ソフトボールをしましたね。東西に分けると、必ず東は佐々木潤之介<sup>(73)</sup>さんが終始一貫ピッチャーやるんですよ。あれ、考えたら体力あつたんだなと。一回やったらへたへたになるのにね、全試合、彼が投げるんですよ。わしは大将だという感じですね。朝尾さんは、野球は余りお好きでないような感じでしたけど。しかし、東西対抗みたいなのがあつて、それにもうひとつ、広島の頼(祺一)さんが教育学部出身だから教員免許の関係でラジオ体操できるんですよ。だから、第一体操というのは、我々は全然覚えてないけど、教育学部では特訓受けるらしくてね、頼さんが壇上で指導されたようですね。そういうつまらんことを思い出しましたけど、今で四六回目になるのかな、ことし夏やるとしたら。それは大きいですね。その最初をつくられて、院生は必ず視野を広げるためには参加するという感じだったですね。

**朝尾** あのとときまではね、知り合いはなかったんです。

**酒井** 朝尾さんも余りなかったんですか。

**朝尾** 佐々木さんとは論争していましたが、いわばオモテのつきあいでしたね。

**酒井** 一回目、佐々木さん見えてましたでしょうね。余りそのときの記憶がなくて。人数のわりに風呂が小さくて、寺の前の川に京都、大阪組は入れといわれて川に入ったこと、都会育ちですから初めてでね、非常に劇的な経験を山寺でしましたね。あれは印象的ですね。いい企画ですね。芝原君は来てなかったですか、あのととき。

(73) 佐々木潤之介(一九二九—二〇〇四)

技術史から研究を始め農村史研究、地主制史研究、さらに幕藩制構造論、世直し状況論などにも独自の理論を提起した。幅広い活躍で近世史研究をリードした。教科書問題にも発言した。『幕藩権力の基礎構造』(御茶の水書房)、『幕末社会論』(塙書房)。

**朝尾** いたんじゃないかな。ちょっと記憶してませんが。

### 文化財指定

**酒井** 朝尾先生はサマーセミナーで若手の全国的交流の場をつくった後、幾つか大きな仕事をされた。井伊家文書ですね、これが今まで文化財指定はいいものだけを選び出して指定するということに対して、近世大名文書として重文に一括指定された。だから、東寺（教王護国寺）文書はこの前ぐらいですか、もうちょっと後でしょう。

**朝尾** 教王護国寺文書の方が早い。

**酒井** 早いですかね。教王護国寺文書が指定されたときに、大山喬平さんが、私の言葉でいうと、名も知れない寺の坊さんが書いた記録が、天皇でもなければ貴族でもない、そういう人が書いたものが全体として指定されたということは、非常に意味が大きいと朝日新聞に書かれたことを覚えているんですけどね（一九九七年七月三日付、夕刊）。それと前後して、遅れてかもわかりませんが、彦根の文書調査は三年ぐらいされたんですか。すごい調査ですな。

**朝尾** 柴田實先生を団長に京大の近世・近代研究者を動員してやりました。柴田先生とは大学院入学と同時に『水口町志』の編纂のお手伝いをし、滋賀県の仕事をいくつかが一緒にさせていただけました。井伊家は当初の三年計画が遅れて延ばしてもらって、五年かかりました。そのときに、まだやり残したものを文化庁の方でもう一年かかってやってくれました。それで指定された。

**酒井** 朝尾さんが、井伊さん、市長さんが弟さんかと、本のしおりで対談された。あれはこの調査の前ですか。

**朝尾** いや、後です。一九九二年、中央公論社の『日本の近世』七・身分と格式の巻です。巻報ですね。

**酒井** 『日本の近世』ね。それで対談。市長になられた方ですか。

**朝尾** いや、弟さん。

**酒井** 弟さんの方。

**朝尾** 双生児の兄弟でね。お兄さんが市長で、弟さんは美術館長をやっておられた。博物館ができて弟さんが博物館長になって、亡くなったんで、あとお兄さんの長男の方がトヨタを退職され館長に予定されていたのですが、この方も亡くなってしまい、私がやむなくお引き受けするハメになりました。

**酒井** こういう文化財の指定の仕方というのは、私はほんとにあるべき姿だと思いますね。近世の庶民資料調査が戦後全国的に行われて、所在だけは確かめていった。それから、さっきちょっとお話に出た国立史料館がそういうところの一つの先端的役割に対してですね、全国の庶民史料ですね、近世文書を集め始めて、その上で本格的に、一時代前だったらとても認められないようなものが光を浴びてきましたね。特に藩文書が指定され始めた。この後、県とか市レベルでも一括指定が始めている。明治以降の京都府庁の文書も指定されましたね。

**朝尾** 大体目録がないと指定できませんからね。しかし、僕らがやったときは指定考えてませんでした。博物館をつくるというか、井伊家のものを市に寄贈するについて目録がないとできないでしょう。それで、市長の井伊さんは、『大日本維新史料』の井伊家文書はいつ終わるともしれない。自分も年とって生きているあいだに見られないだろう。いずれ市へ預けたいというところで、目的はそちらだったんです。三万五千点一点残らず名前を付けるのは大変でした。井伊家の魚屋の通いに至るまでね。あれはそういう点では苦労しました。非常におもしろい史料が出てくるんですが、どの部局間でやりとりされているのかわからない。題をつけるのに苦労したんですよ。後半は、今、住友史料館にいる安国良一君がよくやってくれた。

彦根藩の文書は、大名文書の一括指定という点では早い事例です。この後、大名文書でも柳

川の立花文書、島津文書も入ったかな。一括文書という指定が一般的になってきている。これまでは重要なものだけが、何が重要かは別に考えるとして、歴史的・経済的・社会的等々重要と思われる文書が指定された。最近大きく転換して、史料の価値の上下をつけられない、また総体としてとらえる視点だと思いますが、一括してとらえる方向に進んでいます。

**酒井** そのときは文書はもう彦根にきていたわけですね。江戸の方のは、関東大震災などの被害でかなり……。

**朝尾** 関東大震災のときに大八車に積んでね、燃えせまる炎を横へよけながら逃げ回ったという伝説があります。国賊の疑いを晴らすための直弼文書と彦根屏風ですね。東大の史料編纂所は井伊家文書を随分たくさん出しておられますけども、市長さんは、これでいけば、何世代か後でないと完成をみることはできない。そういうこともあってね、私とここで引き受けることになった。

双生児の弟さんの方は、正弘<sup>74</sup>さんというんだけど、小さいときは僕と同じ直弘といわれたんです。

**酒井** そうですか。大阪商大で宇野茂樹さんが井伊正弘さんと対談されましたね。『大阪商業大学商業史博物館紀要』の創刊号にある。実に興味深くて、思いつきを商大で話されたのがね。

**朝尾** 苦労しておられるんだなというふうに思いましたね。維新後は国賊でしょう。政府からは予算も何も回ってこないんです。だから、井伊家と彦根市民との間には共通のある絆があったわけです。殿様と領民だけれども、一緒に抑圧されている、維新政府からね。井伊家はいろいろ事業を興したりして市民を何とか飯食わせていかないといかん。なかなか大変だったようです。これは目録じゃなくて、市史の編纂をやるようになってだんだんわかってきた。

**酒井** 東京の紀尾井坂というのは紀州と尾張と井伊さんの屋敷のあったところですね。それを井伊家は維新政府に没収されて別のところの三千坪ぐらいのところへ移された。そこで関東

(74) 井伊正弘(一九〇一—二〇〇三)

東京に生まれる(大老井伊直弼の曾孫)。一九三四年東京大学農学部卒業。一九四一年北里研究所嘱託、一九五一年農林省農業改良局研究企画官退官。同年、井伊家伝来の古文書・美術工芸品などの保存整理と井伊直弼や歴代藩主の研究にあたる。一九五五年井伊美術館を設置、館長に就任。一九八七年彦根城博物館が彦根市によって設立され、初代館長に就任する。

大震災があつたといえますね、それでも大きいものでしょうけど。ああいう大藩になると、すごい屋敷を持つてたんですな。

『京都町触集成』<sup>(75)</sup>

酒井 つぎに、先生は『京都町触集成』という一三巻と別巻二（岩波書店）、研究編もあつて、大仕事をされたんですが、これについてお話ししていただきたらと思います。

朝尾 町触は、どうでしたかね。それまでは御触書というものは日本全国同じだというふうに考えられていた。しかし、さつきから言っていた各地域ごとに団体があると。身分集団、あるいは身分団体、村や町が独立で自律的な団体であるとすれば、法もまた自律的であるはずですよ。村掟とか町掟とかをもう一遍見直さないとかなという考えが一方にあつた。

他方で、同志社大学におられた秋山國三先生<sup>(76)</sup>が京都の衣櫛町<sup>いすもとのまち</sup>の御出身で、自分の本家が町の年寄というか、そういうクラスで、衣櫛町の人の触書だとか、町の独自の決め事を書いた書類をたくさん持つておられた。それを出版したいと考えておられたようです。これまた紛争の産物なんですけどもね、同志社で紛争で締め出されて授業できない。どこかでやつてもらえんやろつかという話になって、京大も我々の研究室、文学部の建物は封鎖されていたんですけど、陳列館の方は人がいないせいもあつて無事だつたんです。助手の熱田公さん<sup>(77)</sup>がいろいろ話し合いをされたこともあつたと思つてんですけど、史料に手をつけるなつて。一種の中立地帯みたいになつて、あそこは何も起きなかつた。そこへとにかく衣櫛の史料を預かつたんですよ。それで、預かつたんならせつかくのこと学生の文書の訓練しようやないかということで、どの大学でもいいから志のある者は来いということでもやりました。その前に、私が京大へ来てから毎年夏に古文書調査、古文書合宿をやつてまして、それも来たい人はどの大学でも来たらええということ、立命館・同志社はもとより、近畿地方の神戸大学、奈良女子大、大阪

(75) 『京都町触集成』

京都の町に京都町奉行所より布達された触を編年順に配列し、翻刻。伝統的な権門に関する触や、町人生活の諸相にかかわる触などを提供する。岩波書店。

(76) 秋山國三（一九〇七—一九七八）

近世の自治都市としての京都の町に関する研究を行い、近世京都の基礎単位が「町」であり、町規約や町式目により、家、屋敷の所有、売買などが規定され、さらに非人・捨子の扱いにまで詳細に定められていることを明らかにした。『近世京都町組発達史』（法政大学出版局）。

(77) 熱田公（一九三一—二〇〇二）

長年京大の助手を務めた。神戸大学名誉教授、兵庫県立歴史博物館館長。室町・戦国時代の研究で知られる。『中世寺領荘園と動乱期の社会』（思文閣）



市大とか、京女・橘女子大、いろんな大学から来てましたね。この古文書合宿出た人は活躍している人が多く、自治体史の編纂など中堅クラスを占めています。いまは年賀状だけのつき合いいなくなってますけど。

そういう地盤があつて、その上へ乗っかるような形で、町触の原稿づくりをした。毎週毎週やってますから、結構たまってくるわけです。これまとめて出そうかという話になった。そこまでは簡単やつたんやけど、実際は出すとなると、学生の書いた原稿をもう一遍、一から全部見直さないかん。なかなかそこは大変だった。しかし、あれで上から出てきたという触書ですら都市ごと、まちごとそれぞれ違うんだということが非常にびっくりしました。あれまでは、御触書といえは、幕府の御触書、『天保集成』とか『寛保集成』とか、御触書は皆あれに載っているというふうに極端に言えばそういう考え方が中心だった。しかし、地域性があるんだと。その基礎には身分団体の自律性があるということがはつきりしたんです。

酒井 そうですね。

朝尾 秋山先生が亡くなった日の研究会はおられましたか。

酒井 ちよつと記憶にないんですが、亡くなったあと、御自宅へ富井康夫さん、門下生で高槻市史編纂のあの人と一緒にお参りに、命日か何かに行った覚えがあるんです。場所は京都でなかったような気がするんですけど。

朝尾 高槻です。

酒井 高槻ですか。富井さんが高槻市史にいましたのでね。

朝尾 町組の色分け図について報告をしておられて、突然、すといすに座られたんです。その座り方がね、ほんとにすといすとんと落ちるように座られたんでね、おやつと思っただけで、その後ちゃんと報告続けられて、解散して、帰りの電車で降りられてから、うすぐまられた。心配して一緒に送っていった仲村研さん<sup>(78)</sup>から伺った話ですが。

(78)

御触書の集成  
江戸幕府が公布した御触書の集成は、『御触書寛保集成』、『御触書宝暦集成』、『御触書天明集成』、『御触書天保集成』(岩波書店)がある。

酒井 研さん心配してついで行かれたんかな。私はそのときはいなかったな。

朝尾 僕は目の前ですとんと座りはったんで、何が起きたかと思った。そのときは、また立つて話されました。心臓という話聞きましたけど。

酒井 秋山先生は、衣棚文書を中心にして朝尾先生にそれを引き受けてもらってうれしそうでしたよ。ほっとされたという感じです。だから熱心に研究会に参加されていたと思いますね。朝尾 亡くなるまではお手伝いの気分でしたが、その後は仲村さんと代表ということになり、責任が重くなりました。

酒井 そうですか。私は、七巻か八巻が忘れましたが担当しておりまして、当時、龍谷大学におりましたので、今、奈良大の学長をされている鎌田道隆さん、それから菅原憲二君ですね、千葉大へ行っている。それから富井康夫さんもいた。それに私で、週に一回夕方から原本校正ですわ。水本邦彦さんも史料を送ってきてたかな、当初は。そういう思い出がありますけどね。私のところだけでなく、いろんなところで担当者を置いてやっておられたんですよね。大変な仕事。

朝尾 一八巻出ましたよね。

酒井 ようやり抜かれましたね。

御触書でいうと、『御触書集成』はどついう形で入手したか覚えてませんけれど、『徳川禁令考』<sup>(80)</sup>を国史研究室で申し込む。本をまとめて研究室で買つと一割引にしてくれます。私の持っている禁令考には朝尾先生の「酒井様」という字が各巻に入っているんです。だから、先生に本をもらつてお金を届けるわけです。私だけじゃなくて何人かの近世史の、金のない、金のないって私だけかわかりませんが、研究者のための院生のための世話をされた。これはなかなかできることですね。安丸良夫さんが『著作集』の第八巻の月報に書いておられるけれど、朝尾さんは僕から見ても、いつも机の前で肅然と座っておられる。うるさいのは奥の

(79) 仲村研(一九三一—一九九〇)

若い頃は吉田松陰の思想など近代思想史の研究を志していたが、石母田正の『中世的世界の形成』に感銘をうけ方向転換をした。本格的には莊園支配と莊園村落内の身分秩序との絡み合いを解明した。『莊園支配構造の研究』(吉川弘文館)『中世地域史の研究』(高科書店)。

(80) 『徳川禁令考』

江戸幕府法制史料集で司法省編 前集と後集とがある。明治に刊行されたのち、創文社から復刻。

方がたがた議論してるといって感じてましたね。

**朝尾** 陳列館の研究室ですか。

**酒井** 研究室で。そこで本の配分のような雑用もですね。なかなかできんことだなと思いますけどね。ちゃんと鉛筆で堂々たる筆跡で書いてくださいました。

**朝尾** たくさん人いましたからね。書いとかと忘れるから。

### 『日本の社会史』と『日本の近世』の思い出

**酒井** だけど手間ですわね。集金もせないかんじ。余談申しましたけど。

それからあと、編者共編といいますがね、『日本の社会史』全八巻（岩波書店）、これは社会史のあり方については先ほどお話に出た佐々木潤之介さんあたりとはちょっと違う意見を持つておられたようですけど、そのことと、『日本の近世』一八巻なんですけど（中央公論社）、これの思い出を話していただけますか。

**朝尾** 社会史はね、網野善彦(81)さんが山口啓二さんと組んで、私と吉田孝さんを引張りこんでやられた。書店（岩波）側では松島秀三さんが熱心で、これにはいろいろ批判もあった。社会構成史の立場から厳しい反対の声があがっていた。僕は身分団体に関心があり、抵抗なく議論に入っていた。しかし、社会史とは何ぞや、に関しては、編集委員のあいだでも見解は分かれていた。僕は八一年、八二年とハーバードの日本研究所へ行きました。その期間を挟んで、プランが進行した。たしか八〇年秋に地縁的職業的身分共同体論を発表しています。八一年六月に東大の文学部でその講義をして、八月に向こうへ行つたと思う。翌年九月に帰ってきた。そのときには、流れは変わっていた。しかし、『日本の社会史』と正面きつたタイトルは発刊の直前だったと思います。並行して出そうと準備されていたのが歴史学研究会と日本史研究会編集の講座ですわね、東大出版会から出た。『講座日本史』だったか。

(81) 網野善彦（一九二八—二〇〇四）

中世の職人や芸能民など農民以外の非定住の人々である漂泊民の世界を明らかにし、天皇を頂点とする農耕民の均質な国家とされてきた、それまでの日本像に疑問を投げかけ日本中世史・社会史研究に大きな影響を与えた。『中世東寺と東寺領莊園』（東京大学出版会）、『日本中世都市の世界』（筑摩書房）。

村井 その次の『講座日本歴史』です。

朝尾 そう。『講座日本歴史』（東京大学出版会）の編集がボストンに行く前に入ってたね、それで私は、見てもらったらわかるんですが、近世の町とか村とか、それまでの立て方とは全く変えました。それまでいわゆる発展史観で、検地から始まって、幕末があつて、元禄あたりを動揺あるいは再編期とし、享保で転換というような大体どの講座もそうだったんです。あのとさ先に早く僕の家をつくってからいこうと思つて、近世の町とか私が公儀権力と幕藩制だったかな、公儀の問題を中心立てて書いたんですけども、近世は佐々木さんと私が編集担当で、佐々木さんは僕の言うことには黙つていたけれども、反対の気分はわかつていた。だけど、何も彼は言わなかった。結局、近世は前期と後期に分かれて、前期は私が編集して、後期は佐々木さんが編集したという形になりました。後期は私がアメリカへ行っている間に大体の骨格も決まり筆事も決まった。近世全体としては、ちょっとちぐはぐになっているかもしれないと思います。

酒井 出版が八五年になっていきますね。「公儀と幕藩領主制」、『講座日本歴史』。「社会史」があつて『日本の近世』と。

朝尾 社会史は佐々木さんは入ってないでしょう。

酒井 入ってませんね。

朝尾 あのとくに、西洋史の吉岡昭彦さんが、歴史学は日常の雑事なんかを書くべきじゃないと。政治史というか「経世済民」の気概でいかなあかんと。それが歴史学だというようなことを書かれて物議をかました。佐々木さんは、それに賛意を表されて、支持するという文章を書かれた。

僕は、日常茶飯事というものそれが必要やと。先ほどの歴史学とは何かという問題にかかわってくるんだけど、人間それぞれ自分の立脚点というものがあつて、根っこというのはそ

ここにあるんで、歴史学は、どうもそれと無関係では成り立たない学問じゃないかというふうに思っているわけです。それで、根っこということを考えてと、社会史、日常茶飯事と考えられるものの中に非常に重要なものが入っているんじゃないかというふうに思った。だから、大艦巨砲主義はいいけれども、それだけじゃ完全ではない。東大出版会の講座のときには言葉としては出なかったけども、お互い内心では違うなという意識があった。私がアメリカへ行っている間に網野説に対する反発もあって、日本国内でこの問題をめぐる、かなり対立がはつきりして、それで、岩波の松島秀三さんなんかが最初は日本の社会史じゃなく、タイトルはちょっと今、思い出せないですけど。日本における何とかのかんとかという長ったらしいタイトルのシリーズ案だった。私が帰ってきてからもうすったもんだで、一二転三転して、最後『日本の社会史』で押し切ろうということになった。僕は初めからそれでいいや、話はそうなっているんだから、その方が明快だし、と考えていましたけど、社会史という言葉に対する反感というが、反発はかなり強かったようですね、当初。

**酒井** それはどういうところからですか。例えば、安良城さんの晩年大阪の歴科協（大阪歴史科学協議会）の合宿で同室になったことがあるんですよ。こんな人と同室になったらかなわんなと思ったんだけど、午前二時に起きられるんですな。そして、ロビーで浮浪者のような格好で座るもんだから、そのこの宿舎のガードマンの人が心配しましてね、何者かが侵入してきたんじゃないかと。だけど二時に起きて仕事ですね、あの方。寝てる相棒には迷惑をかけないよ。そのときに、かつての安良城さんより随分おとなしくなっておられましたね、社会構成史研究をやったということは、自分として後悔していません。それから、若いときにマルクスに触れたということは後悔してないということ部屋で言われましたね。だから、岩波で企画された社会史のねらいを考えると、安良城さんあたりが大きく太閤検地を画期にして、日本社会をほとんど分けて考えられた社会構成史的研究、あるいは戦後間もなく『社会構成史体系』（日本評

論社」というシリーズが出ましたですね。ああいうものの延長にあって、その安良城理論の上に、今言われた佐々木理論の流れが出てくると思うんですね。私は、佐々木理論というのは安良城理論とも一つ、山田盛太郎さん<sup>(82)</sup>の『日本資本主義分析』に乗っていると見ています。非常に忠実に、その点では講座派に徹している方法だと思っんですね。

こういふのと岩波の社会史は、佐々木さんがちよつと前の段階の『講座日本歴史』で朝尾さんと意見の違いを意識された。朝尾さんも意識されたといふことの後にこれが出てきたといふのは、今述べたような社会構成史を明らかにすればいい。国家とか階級関係を明らかにしたらいいと。それに対して朝尾先生が、階級とは別に身分といふものを地域と集団で考えようとした。日常茶飯事であつて、大艦巨砲主義ではない社会史が大きな価値観になって、茶飯事な問題を取り上げられた。いかがでしょうか。

**朝尾** 留守中の論議のことはちよつとわからないんですけど、ただ、執筆者会議の段階でも社会構成史をあくまで本道だと考える人は多かつたですね。

**酒井** そうですね。それと発展段階論。

**朝尾** もちろん発展段階論と結びついているわけです。僕は、今ごろはやりの言葉で言えば、文化といふか、いわゆる文化史といふような立派な文化じゃなくて、庶民生活の形といふか、生活様式、ライフスタイル、思考の習慣、信仰そういうふうなものを含めた文化ですね。そういうものを歴史はとらえないといかんのじゃないかと。今おつしやつた地域とか集団、伝統、慣習とかね。こういうことを調べるのが歴史にとってはかなり大事な課題じゃないだろうかと思つたわけです。

**酒井** それから、佐々木さんが亡くなったときに、「佐々木潤之介さんを偲ぶ」(『歴史評論』六五六号)といふのをお書きになっているのを拝見したんですけど、佐々木さんには、地域があるよつでないんじゃないかと。

(82) 山田盛太郎(一八九七—一九八〇)

『日本資本主義分析』で講座派の中心的理論家として、大きな影響を与えた。コム・アカデミー事件で検挙され、起訴猶予後は中国農業研究に従事、戦後東京大学に復職。『山田盛太郎著作集』(岩波書店)。

**朝尾** あれ、書くか書かんとこうか迷ったんやけど。

**酒井** 研究の立地点として。

**朝尾** ちょっと憊ぶ文章としてはどうかと思った人もいるんじゃないかと思ったんですけど、僕は正直に書いた方がいいと思って。佐々木さん自身は最後は気がついていたと思います。地域史をいかに学ぶかという本を出して、送ってくれた（『地域史を学ぶということ』）。僕たちは別にけんかしたわけじゃないから、お互いに本のやりとりはしてありましたけれども。

彼は大館の出身なんですよ。僕は長いこと東京人だと思っていただけ、もちろん亡くなるまでには知ってましたけどね。安藤昌益(83)の出身というか、住んだといわれる秋田の二井田(二井田)へ調査に行ったんです。墓があるという農村なんですけど、ずっと向こうにまちが見えていく。かすみにかすんでいくぐらいに見えている。地元の人から、あれが大館で潤之介の故郷です。佐々木さんは、その本で自分で書いていますよ。自分の秋田を見る眼が「よそ者」のそれであったと気づいてショックを受けた。もう一遍やり直すと。あそこは比内(ひな)といつて、おもしろいところでね、内藤湖南先生(84)の出身地、鹿角(かづの)と隣接しているのに雰囲気がちがう。文化のね。私も内藤邸へ行ったことがあるけども、複雑な歴史を持った地域なんです。そのことにふれながら佐々木さんらしく昌益と湖南、狩野亨吉、小林多喜二を結びつけて郷土の歴史をもう一遍考え直すと書かれています。僕はそういう結論が出てたんならいいじゃないかと思って、書いたんですけど。

**酒井** かなり秋田は意識されていたのと違いますか。

**朝尾** 愛憎あいながばしたんじゃないですかね。

**酒井** 卒論は秋田の鉱山ですね。それと、安良城さんが『太閤検地と石高制』をNHKブックスで書かれたのを見ると、安良城さんの方法の出発点というのは、東大の経済史セミの同窓生が岩手の出身で岩手の農村を見て名子制度を知り、そこから発想したというから、安良城さん

(83) 安藤昌益(一七〇三—一七六一)

江戸中期の医者で思想家。自然真言道と称する社会改良案を提唱し、儒教仏教の教説を排し、農耕による行き方を説き総ての平等を唱えた。著書に『自然真言道』『統道真伝』などがある。

(84) 内藤湖南(一八六六—一九三四)

東洋史の学者で、秋田県鹿角市生まれ、大阪朝日新聞社の記者を経て京都大学の教授に就任する。著作は『支那絵画史』『日本文化史研究』ほか、支那学の発展に貢献した。

のルーツは沖縄のようですけど、沖縄、東京、発想は岩手で、秋田をどこかに持っている佐々木さんとはかなり共通してるところがあるんかなと私は勝手に勝手に解釈して。

**朝尾** でも二人に限らない。講座派の発想は根元に岩手の二・三男以下には人権がない。貧しくて労働者になって、小屋に丸太ん棒を枕に寝かされて、起きるときは端をこんと叩かれ一斉に起きるといふ有名な話がありますが、あの発想が根底にあると思いますね。

あと中央公論社の『日本の近世』ですね。これは中公の編集者で東大歴史の卒業生に岩田堯という人がいて、ブームになった『日本の古代』に続く中世以下を企画した。中世も近代もなかなかまとまらないので、近世を先にやろうと辻達也さんに相談したら、辻さんが朝尾とやろうといわれた。私としては全く受け身の有難いお話で、当時考えていた問題を整理して、皆さんに書いていただいたものです。

**酒井** 実は、時間が三〇分ほど超過したんですが、お話する課題は残ってるんですけども、会場の都合で、この辺で打ち切らせていただきます。どうもありがとうございます。

**小田** 酒井先生、きょうは来ていただきまして、ありがとうございます。

五月八日に村井先生、朝尾先生、酒井先生で、鼎談を行っていただきました。話中に熱中されたせいか、お二人で予定の時間を三〇分も超えてしまい、酒井先生の話が聞けずに終了してしまいました。これは非常に残念なことでした。新たに酒井先生のインタビューを収録することにより、各先生の話がそろった方が読者にわかりやすいと考え、本日、酒井先生にお話を伺いする次第です。

インタビューの内容は、一つめが民衆史の視座、二つめが地域史からの視座、三つめが大塩平八郎、四つめが歴史学の視座を支えたもの、この四つの視点からお話をお伺いしたいと思います。



まず最初に、民衆史の視座ですが、この中で都市の打毀しというものがあるかと思いますが、その辺りのお話をお伺いしたいと思います。

### 民衆史の視座

**酒井** 最初大坂の打毀しについて関心を持ちましたのは、神戸大学の卒業論文で灘の酒造業の地である魚崎村、現在の神戸市東灘区で村の史料を分析しておりまして、近世後期魚崎村というのをまとめてみたわけですね。当時、村レベルの研究が多くて、定量的な研究も含めて、古島敏雄さんなどの研究もあって、それらに学んでまとめたんですが、このあと、一年間病気をしまして、時間をおいてもう一度書いたものを再検討することになったわけですね。この魚崎村に慶応二年五月の打ち壊しの史料がわずかながらあった。ここからもう一回見直してみると、兵庫あるいは西宮から慶応二年、ちょうど長州征伐のときで、幕軍が大坂城へ入っているときですが、それが大坂に波及して、六月に江戸へ飛ぶという、大坂周辺が全国的な打毀しの起点になっている。慶応二年と天明七年も同じなんですが、そういうのを書いてみたんですね。今ほど明確な意識は持ってなかったんですけど、初めて、書いたのがそれなんですよ。ちに個別に絞り込んで書きました。

**小田** 天明七年のときは、大飢饉が起こった背景があり、慶応二年の江戸の打毀しは、世直しで、幕府の倒壊を促したとは思いますが、このような社会的な背景あるいはこのような幕府の態度をどのようにお考えですか。

**酒井** 最近、山形大の岩田（浩太郎）さんが総合的な打毀しの研究、『近世都市騷擾の研究』をまとめていますが、早くは津田秀夫先生などが書かれていて、その時点ではまだはっきり考え方として持っていないんですが、ひとつ出したのは、大坂の打毀しが、大坂のご真ん中から起きないということを発見したんです。そこに目をつけたのは、難波村から東の方にかけて、長

町、日本橋筋<sup>(85)</sup>ですね、これが起点であるということを押え込んでね。そして、ここから大坂へというか、大坂の周辺を巻き込んでいく。打毀しというのは、船場、島之内<sup>(86)</sup>の大商家では起きないというふうになると、さまざまな理由が考えられるんですけども、ともかく大坂周辺を縫うようにして広がっていく。ところが、天明七年もこの慶応二年も同じで、考えるきっかけになったのは、住吉郡平野郷町の覚帳にある菜種の売り先ですよ。大体打毀しの進行していくところにしかるべき職人だとか、小さな住民たちが存在している。概して大きな鴻池屋<sup>(87)</sup>とか、天王寺屋<sup>(88)</sup>とか、平野屋<sup>(89)</sup>とかいうような大商業資本のもとでは、下は丁稚奉公から編成され、管理システムが強いので自由に動くことができないということに気がついたわけですね。それで、打毀しというのは、都市で起きるけれども、都市の民衆が、例えば船場から走り出ることはいんです。これは米の問題ですから、必ず米の打毀しの季節は五月であり、百姓一揆の季節は一二月である。大体そのパターンが決まってるんですね。そういう点で、大坂周辺をずつと縫うようにあつて波及して行く。江戸でもど真ん中でなくて品川から入っていくという。それから、江戸を巻き込んで関東農村の武蔵地域にひろがると考えたんですね。具体的に岩田さんはもっと精密な研究をされていますし、それから、町方の構造については乾宏巳さん、内田九州男さん、吉田伸之さん、塚田孝さんなどが細かく分析されていますけど、私が最初入った時は精細なものではなくて、全体的なものを考えてみました。ただ嬉しいことに食べる米の問題がどういふふうで大坂とその周辺で問題になったかを考えて、ときどき示唆的なことを書いたんでね。私ちょっと変なくせがありまして、議論で展開していることよりも、その注で、わりあい大きなことを入れているんです。これを、奈良教育大の本城（正徳）さんとか岩田氏が見つけて、酒井が少し言ったことを自分たちの米穀市場の問題だとか、打毀しの問題に広げてくれているんです。若い方がね、ささやかな注、実は私も思いを込めて注を入れてるんですがね。それを取り上げてくれてまして、大変うれいんですね。

(85)

長町・日本橋

大坂市中の堺筋から南へ日本橋を渡って堺に通じる道筋で、日本橋一丁目から四丁目、長町五丁目から九丁目とつづいていた。長町の毘沙門堂は有名。旅籠屋や木賃宿が並び、大坂の町触でもしばしば治安の対象となった。

(86)

船場・島之内

船場の範囲は、北は大川・土佐堀川、南は長堀川、東は東横堀川、西は西横堀川に囲まれた矩形地域を指す。江戸時代から大阪の商業の中心地。島之内は、北は長堀川、南は道頓堀川、東は東横堀川、西は西横堀川までの地域で、江戸時代は、船場と共に商業の中心地だった。

(87)

住吉

住吉神社を筆頭に古来から名所・旧跡が数多い。各宗寺院も並び、多くの見物・参詣客を集めた。住吉社頭の北には新家が形成され、「金魚・蛤蜊・竹馬・土人形・麦わら細工等」を名物とし、料理屋が軒をつらねて賑わいを見せていた。

小田 今のお話は、都市周辺で起きやすい問題なんでしょうか。船場・島之内では起きにくいという、周辺から起きやすいというのは。

酒井 大坂のご真ん中から起きないということは事実としてそうなんです。そして、なぜかということを考えるのにな、二つ判断の基準があるんですね。一つは大坂の履物問屋でまさに株仲間(88)の構成員の家筋でみずから最後の「御堂筋履物問屋」の当主であった米谷(89)(修)さんという郷土史家の方がおられて、その人はなかなかするどいことをよくおっしゃった方です。履物問屋は、昭和初年の御堂筋の拡幅で姿を消したんですね。そのお話を聞くと、船場・島之内の本店に奉公している小僧さんとか、丁稚、そういう人たちが住み込みで寝てますね。それを、ちゃんと番頭あるいはそれに近い立場の人が見てるんです。チェック、本当に寝てるかどうか。夜分抜けて遊びに行く可能性あるな。遊郭に行ったり夜遊びしてくるか。必ずそれをチェックしていたということも米谷さんから伺ったんです。こういう状態であれば、梓にはまっていますね。下から自分をどうこうして上へ上がって、成功する人はごく少ない。鴻池でもね、途中でやめていく人もかなりいると思うんですね。そういう中で、一つのシステムにはまっていますから、こたこたした雰囲気の間ではないわけだな。こういうところからは、打毀しをやるような層はまず出てこない。

もう一つ、実際住友(90)の奉公人のデータをみると、夜遊びをよくしているけれども、しかるべくチェック機能が働いていると。一たん失敗したら店を放り出されますからね。そういう中で梓にはまっている。ここからは私が追いかけている打毀しは出ない、むしろ難波村(91)から下ですね。長町のイメージ、最近考えをちょっと変えないといかんと思っていますけど、あそこは煙が多くて、こたこたしたところで傘の仕事があったり木賃宿が並んでいるところで、大坂以外のところから来た人がまず住み着くところですね。それで、東成(92)・西成(93)郡の市中隣接地もそういうところですね。ある程度住むと、船場界限へ入っていく人もいるけど、まず食らいつくのは大

(88) 平野郷町

中世以来堺とともに栄えた環濠集落。絞油業の原料は、綿実を五畿内および他国からも買入れ、菜種は摂津一国限りで買入れた。また、綿・木綿の取引も盛んだった。独自の平野目という綿の目方があった。一八八八年平野紡績が設立された。覚帳は大坂大学所蔵。

(89)

鴻池屋

今橋にあった大坂随一の豪商で、もと清酒を発明したといい、運送業も始める。後に両替商を始め、取引先の大名家貸しは三十数藩に及ぶ。一七〇七年に鴻池新田を開発する。関係文書が大坂大学経済学部にある。

(90)

天王寺屋

江戸時代を通じての豪商、両替では十人両替の役を勤め、代々大層五兵衛を名乗っている。今橋一丁目に店があった。

(91)

平野屋 平野屋五兵衛(高木氏)

今橋一丁目で両替商を営み、十人両替の役を勤め、天王寺屋五兵衛とともに「十兵衛横丁」にあった。多額の御用金を納めていたが、両家とも明治維新後、没落した。

坂周辺。今のJ・R環状線界隈がそういう役割を果たしている。そこは、村がかりの住民税も安いですよ。形の上では農村ですからね。町のように、町年寄があつてというのとちよつと違つてたことだしている。ここらが打毀しの発端と主体を構成する。

小田 その長町といいますと、長町も紀州街道(98)につながつていますし、玉造(99)の方も奈良街道(100)に通じているし、京橋(101)は京都の方でしょう。それぞれの街道という意味では、つながっているかと思ひますが、その上で、なぜ長町だったのかという問題が出てくるんですか。

酒井 交通量は多いんですけども、紀州街道で堺へ抜ける道ですね。京橋、八軒家(102)とは性格が違う。八軒家は舟着場で旅館があり名所函会に出てきますが、長町は性格が全然違う。アウトサイダー的な人がかなり住んでいるところなんです。その延長である高津(103)の辺と難波村もそうでしょう。

小田 高津というのは西高津新地のことですか。

酒井 天保期なら高津五右衛門町など。あの辺からずっと出てきますね。大坂のど真ん中では起きてないのに、その隣接地帯に出てくる。それから、難波村については、おもしろいことに逮捕された連中の記録が飯田にあります。数珠つなぎになつてる姿がね、長州征伐で大坂にきていた藩士の記録が『伊那』という雑誌に発表されています。案外離れたところで史料が出てきて、難波村が一つの騒動の場所になつてることがわかるんですね。

小田 そうしますと、今の酒井先生のお話では、やはり周辺で、特に難波村とか、長町とか、どちらかという、貧しい人々が住む場所というふうに考えてよろしいでしょうか。

酒井 船場の町には、恐らく大和とかね、大坂を取り巻く摂津も播磨も泉州ももちろん入るところが、そういうところのしかるべき農家から出てきて奉公している人は、船場や島之内のシステムに入つてますからね、これはほぼ打毀し勢力にならない。もっとアウトサイダー的な人が住み着くところ、それが長町とか、高津など。

(92) 株仲間

江戸・京都・大坂などの都市で、商工業者が幕府の認可を得て結成した同業組合。仲間は結束が堅く、独自の行動が許されず、新規の加入も制限された。

(93) 米谷修(一九〇三—一九八二)

『大阪御蔵跡とその周辺』(大阪履物会館建設委員会)、『おもい起す御堂筋』(内外履物新聞社)。

(94) 住友

近代日本の五代財閥のひとつ。初め銅商を営み、一六九一年別子銅山を開いた。長堀茂左衛門町の銅吹会所は諸国の銅山と長崎貿易を結ぶ製錬所として注目される。維新後は、関連諸産業に進出し、住友銀行を中心に大コンツェルンを形成した。

(95) 難波村

摂津国西成郡のうち。大坂南郊の畑場八カ村の一つ。名産に藍があり、蔬菜類も生産し、一八世紀後半頃からは青物市場を通さない直売買をめぐって問屋・仲買と対立した。一七二七年から一七二九年には鑄銭場が置かれた。

小田 これはたしか、その都市の裕福者に対する、不満分子が簡単に結びついてはいるわけではないですね。

酒井 本来は、食う米の問題です。だから、裕福な層への攻撃として出てきますけどね。やっぱり飯米がないという、恐らく日雇い層でしょうね。年季奉公人じゃなくて、日銭を稼いでいる連中が動いている。

小田 例えば、力仕事をする人、油絞人とか、米つき人足たちですか。

酒井 そうですね。それで、攻撃の相手は、米騒動と同じですよ。搗米屋を襲撃する。だから、鴻池屋の前へ行つて丁稚たちが騒ぐというのではない。対豪商は大塩のやることであって、一般庶民は門前払い。

小田 今のお話をお伺いしますと非常によくわかってきました。まだ、もうちょっと何か、付け足されることがありますでしょうか。

酒井 打毀しについては以上ですが、私の打毀し論に一つの反省がありましたね。それは経済史的観点だけだったことです。そのことが当時は、経済が社会の基盤、基底であり、打毀しというのは、こういう観点から迫るべきであるということ、かなり意識的に経済問題だけで説明したんです。ところが、東の方から、新潟大学の佐藤誠郎（98）さんが、東大へ国内留学したときに、東大の維新史料を追いかけて、私に対して批判を展開した。政治的役割を慶応二年について指摘された。そのとおりだと思った。山田忠雄氏は「直接的革命情勢」といつている。だつて、長州征伐中ですからね。米をよこせというような経済的な問題が、当時の幕府崩壊寸前の中で、どのように政治的意味を持ったか。ちょっと時代を下げると、大正七年の米騒動が内閣を倒すわけですからね。そういうこともあつて、佐藤さんのおっしゃることに私は賛成なんです。東京の人は、わりかた政治的意識が強いんですよ。関西の人より。関西は政治はなんじやいというような気持ちがありますからね。実じつとつたらええと思えますけど。だから、私も経済

(96) 東成

東成郡は古代から近代にいたる郡名で摂津国に属した。大阪府の中央部に位置する。地形は南北に細長く、淀川、旧大和川の沖積作用による平野部からなる。

(97) 西成

西成郡は古代から近代にいたる郡名で、摂津国に属した。大阪府の中央部西端に位置する。

(98) 紀州街道

大阪市と和歌山市とを結んだ街道名。高麗橋附近を起点として、今宮・安立・高石・泉大津・岸和田・貝塚と大阪湾岸沿いに進み、山中溪を経由して、和泉山脈を越えて和歌山市にいたる。

(99) 玉造

摂津国東成郡のうち。早くから開けていて、玉を作った。玉造部の止佳は古くから存在したことを語っている。近世では畑場の村で、綿打ち弓、参宮の起点の稻荷社で知られる。

(100) 奈良街道

生駒山脈の暗峠を越えて奈良へ抜ける

史に意識的に絞ったということの欠陥はあるだろうと思いますね。

小田 わかりました。また、そういうことを受けて、そこから新しく構築をされるんですか。

酒井 私の次の仕事の一つというのは十年來関心をおいているんですが、天明七年の打毀しを一遍整理してみたいと思っています。慶応の打毀しと大分離れてるんですけど、起こり方はほぼ一八世紀後半ですが、のちの慶応二年と同じように、大坂周辺から徐々に全国に波及する点では天明の打毀しも慶応の打毀しも同じで、そのスタートが大坂のど真ん中でなくて、周辺から起こることを再度、新しい若い人の研究を踏まえてやりたいと思って、そのファイルを積み上げています。

小田 全国的に動いていますから、かなりの作業になるとは思いますが、でも、今から取り組まれるわけですか。

酒井 だから、波及した先のことは、ある程度おいておいて、最初に火のついたところとして足元の大阪を押えて。

それから、もう一つは、これはやっぱり、社会運動が一般に反映した時代で、一九五四年からずっと六〇年ぐらいまでは、社会的に非常に高揚して、歴史家もその影響をかなり受けていたので、ある程度無意識ながら手をつけていた国<sup>(10)</sup>訴の研究。先の魚崎村の論文は、朝尾さんが『明治維新史講座』第三巻で紹介されました。国<sup>(10)</sup>訴は、ちょっとやってそれで終わっちゃったんだけども。そう、この打毀しの小論、旧制大阪高等学校の教授で、阪大から横浜・東北と移られた石井孝先生<sup>(10)</sup>の論文にも使ってもらったが。ガリ版の大阪歴史学会『近世史研究』に書いたのは、幸いに『明治維新史講座』第一巻で津田秀夫先生が、当時まだ少なかった国<sup>(10)</sup>訴研究の一つとして紹介しておられる。この雑誌には、朝尾さんにもお願いしていい論文を書いてもらいました。昨年著作集が完結して、その中に収められています。村々が連合して、そして大阪

(100) 街道で、明暦年間(一六五五～五八)に松原宿が整備されてから、大坂―奈良間の最短道として、伊勢参宮などに盛んに利用されるようになった。江戸時代は玉造が街道の起点となった。ただ、人馬継立の賃銭計算の道程としては高麗橋を起点とし、大坂―奈良間が八町八里。

(101) 京橋  
往古より難波から京都に通じる要地で、大坂城の北、寝屋川にこの橋が架けられた。

(102) 八軒家  
天満橋と天神橋の中間にあつた船着場。京都へ向かう河川交通のターミナルで、埠頭は物売り、船宿の女、馬方、乗客などで騒がしかった程繁盛していた。

(103) 高津  
空堀以南、天王寺以北の上町が範囲で、現在は高津社の界限に限る。高津社の舞台は西望の勝地として知れ渡っていた。また、茶店の湯豆腐も有名。

(104) 佐藤誠郎(一九三一―一九九四)  
新潟県下の幕末・維新期の研究を軸

の種物問屋とか油問屋とか綿の問屋を訴えますが、朝尾さんがするどく指摘されたのは、そのときに、村と大坂の問屋との間に、いわゆる在郷商人(107)的な役割を指摘されてるんですよ。これが私の周辺論と結びつくんですよ。村の庄屋の役割のほかに村と奉行所へつないでいく小商人的なオルガナイザーの存在を指摘された朝尾さんはすごいすなあ。私が書いたちょっとあとに、書かれましたね。私のは、八木哲浩先生収集の史料をお借りして事実を並べただけで、随分いい加減な論文なんですけどね。

小田 それは在郷商人が指導した感じなんですか。

酒井 これはまあ、朝尾さんに聞かないとわからないんですけども、都市特権商人に対して、大塚史学(108)なんかで、在郷商人の動きが出てきてるんですよ。そういうのが背景にあるかもわかりませんね。それを、文政六年の国訴の文書を分析しながら指摘されている。その内容を見たら、株仲間を廃止しようというようなことまで言っている。画期的な文章ですね。都市と農村という単純な比較、対立関係じゃなくて、間をとりもつオルガナイザー、村を本当に経済的にオルガナイズしているのが、その周辺の小商人、あのときは代表に高井田村の庄屋が出てきますけれども、さらにもうちょっと都市に入ったところの表面に出ない商人の役割を指摘されて、私も同感でした。

小田 こういった国訴というのは、例えば百姓一揆とか都市の打毀しですね、そのような動きがあったと思いますが、同じような所に行き着くんではないか、流れとしては、それとも、別な傾向でしょうかね。

酒井 民衆運動としてはその概念にもちろん入るわけです。ただ、担い手と目的が違うということです。都市の打毀しは主に飯米の問題であり、今言ったように村の人は、これには動かないという特徴がありますね。百姓一揆の目的が一番大きなのは年貢です。だから、これは土地を持つる層が中心で、そして、藩とか幕府との関係で。しかし、当時一九五〇年代で問題に

に、その世相と明治維新のあり方を問うた。『近代天皇制形成期の研究』(三一書房)、『幕末・維新の政治構造』(校倉書房)。

(105) 国訴

摂河泉地方の村々の庄屋を惣代に立て、在郷商人の指導により、村々が都市株仲間の流通独占に反対し、大坂町奉行所での訴訟という合法的手段で対抗した。綿・菜種・油・肥料の流通などをめぐるもので、一八二三年から千カ村をこえる共同闘争となった。

(106) 石井孝(一九〇九—一九九六)

明治維新から自由民権期を中心に、外交文献と国内研究を広く取り入れた研究を進めた。『明治維新の国際的環境』(吉川弘文館)、『明治維新と自由民権』(有斐閣)。

(107) 在郷商人

都市商人に対し、農村と結びついた小商人で株仲間に組織されず、農民的性格を濃厚にもっていた。

(108) 大塚史学

第二次大戦後、大塚久雄を中心に形成された西洋経済史学の一潮流。資本主

なつたのは、近畿畿内は百姓一揆が少ないということ、それで全国を三つに分けるとしたら、畿内、先進地帯と、それから余りよくない言葉ですけど、後進地帯と、中間地帯というふうにおくとしますね。そうすると、中間、後進地帯の藩領では、惣百姓一揆のようにものすごい規模の一揆が起こる。畿内の民衆は何していたのかということになりますね。打毀しは全国に波及する役割を果たしているんだけれども、百姓一揆としては、小規模で数えるほどしかないんですよ。そうすると、畿内農民、特に摂河泉の村々はどうしたかというところ、つまり、裁判が日常化してるから、個人的な貸借関係もあるでしょうし、商業関係の取り引き上の問題もあり、もちろん刑事事件もあるでしょうけれども、かなり民事に係る動きで、奉行所の裁きを日常的に経験している。そういう伝統が国訴を生み出してくる。だから、私は国訴を畿内的な闘争だと思っんですね。

それに対して、いやそんなことはないんだ、東北の村山地方、山形県のあたりにもあるんだと言われるんだけど、やっぱりね、裁判というものの受け止め方は、畿内農民あるいは先進地帯で大坂町奉行所管轄の摂河泉播とほかの地帯とはかなり違う。江戸の町奉行所のもとになる地域とも違う。摂河泉播というところが、町奉行所を軸にしながら、さまざまな形、国訴以外も含めましてね、細かく広域的に集まって合法的訴願運動をやって、実現、勝ちとっている。この場合、犠牲者はゼロになります。だから、百姓一揆は勇しいのでよく脚光をあびましたけれど、畿内ではむしろ、それよりもこちらの方が日常化している。実際、維新の前、慶応元年まで国訴していますから。だから、私は実に畿内の特色じゃないかと思っんですね。

小田 今おっしゃっているように、特色と言われれば、特色でしょうが、政治的に考えますとね、高度に非常に発達していると。喧嘩してなんの得があるんだと、それより、裁判に訴えてはつきりした方がいいやないかとそういう姿勢は高度な判断だと思います。だけど、裁判というふうに見ると、簡単には結論は出ないでしょうし、村々での出費いうのも、大変な金額

義の起源を農村の中産的生産者層による同地的市場圏の形成に求めた。



にのぼると思いますが、これなんかも、『江戸の訴訟』をみますと、かなりのお金がかかったように書かれています。それは畿内だって同じやないでしょうか、それにもまして、その裁判に訴えるというところがやっぱり特色なわけですね。

**酒井** 実をとるわけです。

**小田** 実をとる。

**酒井** だから、百姓一揆は一命を捨てないといかんで、「身を殺して仁を成し」ますね。これは大坂町奉行所の管轄では、『江戸の訴訟』のような江戸へ遠いところから来て奉行所に座る人は余りいないですよ。摂河泉播ですからね。江戸へ出訴するのと比べればそんなに費用はかからなかったと見ているんです。それで、渡辺敏さんが書いたように、裁判に出頭してくると、郷宿・公事宿が奉行所のそばにあって、知恵をさずけてくれたんじゃないか。それから、庄屋または村役人が立ち上がりますが、日常的に呼び出されたりしているから、簡単に言うと、ちよつと行つてきますという形でできそうな、ちよつとじゃないんだけど行つてきますと。一揆は命を捨てますからね。もちろん三方国、千カ村にまたがる国訴の組織化は、大変ですが。

**小田** そういう点からすると合理的と言えば非常に合理的な考え方を持っていたというふうに考えていいわけですね。それから、この惣代というのは村の代表ということでよろしいでしょうか。

**酒井** そうです。庄屋が出ますからね。庄屋連合みたいなもんです。それもやたらに立つものじゃなくて、支配ごとに立つわけです。村が幕領だったら幕領、旗本領だったら旗本の、藩だったら藩領の代表というふうな、当時の支配、藩領を超えて惣代に立つことはいない訳です。必ずその何々領分の村惣代、しかし、領主を超えて打ち合わせをやるということところがすごいですね。村役人の政治的力が育つわけです。

小田 ひとつの村だけに限らずに、似たような条件がその村々で持つておれば、お互いが話し合いで何十カ村か、あるいはそれをもつと越えた郡とか、そのような単位でもつて国訴をしていく、あるいは裁判をしていく、そのような認識でよろしいんじゃないか。

酒井 つまり、経済的な関係において、完全に一致しているということですか。年貢は領主によつて違ふ。だから、年貢で領域を越えるということは余りない。あるとしたら、ともに飢饉で、藩領や幕領で起きたのが、隣の支配地に波及するということがあるんですね。だけど、一緒にやることはほとんどありません。

打毀しは、米だけで走りますから、百姓よりもむしろ日銭を稼いで飯米をみずから稼がなきゃならない買食い層ということですか。国訴は、村全体にかかってくる経済的な大坂商人との綿とか菜種油・肥料との関係で、それはもう藩領を超えているんです。支配を越えた関係でできた。ここにね、もうそろそろ文政以後、最近青木美智男さんなどセンスのいい方が言われているように、近代の予兆が始まっているんです。おかげまいいもそうです。藩札だつてそうですよ。藩の中だけ通用するんじゃないかと、領域を超えるような経済関係が生れてきて、これが後に藩を超えてついに廃藩にもなるでしょうし、伊藤博文<sup>(109)</sup>が郡県制度の設置ということを明治二年に言い出して、廃藩にいたる動きの社会的背景が国訴の中にあると見ているんです。

小田 そのような村々は都市の株仲間が、流通過程において独占しているという声が出て、自分鐘の収益が奪われているという認識を持つていたわけですよ。そういうことにも反対して、国訴をした。それが株仲間の解散につながったと思いますが、これは幕府が、このような事件を、受け止めてそういうふうに至つたんでしょか。

酒井 それはね、国訴の結果がそうだったとは、単純に言にくいところなんです。ただ、朝尾さんが明らかにされたように、文政六年の綿をめぐる国訴で、恐らくこれは在郷商人的な発想だと思ふんですけどね。株仲間を廃止するということが別書きのように書かれている。そ

(109) 伊藤博文(一八四一—一九〇九)

明治の政治家。維新の功臣で公爵。憲法制定を推進し、首相・枢密院議長・貴族院議長などを歴任する。ハルビンで韓国人安重根に暗殺された。

これは願書では消えているんですよ。だけでも、少なくとも一八二〇年代において、そういう発想が出てきているという点ですね。それからあと、それが底流としてあるけれども、直ちに株仲間の解散になるかという点、やっぱり天保改革という、幕政の全国的な展開の中での路線に入れなといかんで、地下水としてはつながっているけども、株仲間の廃止のためには、もつといろんな要素を入れる必要がある。畿内だけでは説明できない。

小田 酒井先生も古い時代から関心を持っておられたと思いますが、周縁論、周辺の示唆というんでしょうか。この辺りは。

酒井 私自身、都市と農村というものを考えた場合にね、都市そのものの分析はあまりやっていない。ただ、都市で起きた打毀しについてはときどき書いたり発言したりしているという程度ですね。

経済史的に言えば、宮本（又次）<sup>(110)</sup>先生のグループが都市商業を非常によく調べたので、それはそちらにおまかせしておいて、私などは、農村の史料を追いかけて、それを分析する形で入っていったわけです。そのうちに今申しましたような打毀しという事が関連してきて、ここから都市のご真ん中から打毀しがどうも起きていないと。走つてるところを見たら、どうもその周辺の連中が動いて、同じ人が動いているかどうかは疑問ですけれども、階層としてはつながっているものがある、いわゆる日傭層というか、日銭を稼いでいる、賃労働者の階層が動いているということですね。

そういうふうな考えてみると、今までは単純に都市と農村という二つの面のみでみてきた。国訴もそうでしょうね、国訴の本当の本質は特権的な都市資本が農村経済を圧迫しているというのが、当時の議論だったんですが、そういう単純な議論じゃなくて、もう一つ間に媒介を入れる必要がある。その後、藪田貫氏の頼み証文や平川新氏の消費市場の観点もありますが、地域論としては中間地帯的なものですね。そして、都市の周りの半ば都市化している農村というの

(110) 宮本又次（一九〇七—一九九一）

当初は商業史を八十パーセント、経済史を二十パーセントの比率で仕事をしていたという。株仲間など大坂の商業、特に鴻池屋についての共同研究を進め、門下による商業・金融・物価史について、『大阪の研究』『上方の研究』などの研究業績がある。『宮本又次著作集』（講談社）。

は、名前は、例えば難波村だと、実際は百姓をほとんどしてない、なんらかの屋号をもったり、村の中が、何々町、何々町にわかれてるんですよ。名称は村だけでも、大坂に隣接して都市化している。大坂の町に住んでる人とはちよつと違う人たちが周辺の地域から集まってきたところに注目したらどうかということ。実はこれにはタネがあります。

小田 どんなタネなんですか、一体。

酒井 私の生れたところが、そのひとつなんです。摂津国西成郡上福嶋村というんですけど、大塩の乱に施行札がまかれ、参加もしているし、大坂の町の外で曾根崎新地の西にあって、蜷川沿い、市中とはちよつと違うところですよ。今は一部堂島になっているんですけど、ど真ん中の地域とは違うんで。難波村・天王寺村も同じだと思っただけです。

それがひとつと、院生の頃、中村哲君と大阪周辺地域で市内に編入され都市化したところを歩いたことがあります。旭区とか東成区ですね。その時、中村君が近世の東成・西成郡の重要性を示唆してくれました。それが第二のヒントです。

### 地域史からの視座

小田 つぎに「地域史からの視座」、地域史から日本を見通す、これはどのようなことでしょうか。

酒井 それはね、一転、大きな日本の、例えば近世社会がどうこうということを議論するのはなくて、自分の直接見たり、触れたりしたところから議論を組み立てていって、そして、望むべくは、日本全体、近世社会を考えるようにしたらどうかと。大前提に近世社会がこうであったから、地方はこうであるという議論がよくあると思っただけですが、それとは逆ですね。その地域をそれぞれ追っていきますと、全国共通のものと、個別的なものとあるんですね。この二つがあって、共通なものばかり探してもおかしいんで、あるいは個別的なものだけを追

いけるのも問題で、それぞれの独自性を認めながら、その時代の姿を地域から二本柱で考えようというのが私の気持ちですね。

**小田** わかりました。それは、先生が長い間地方自治体史にかかわられ、かなり多くの村に史料を探しに行かれたと思いますが、その辺りのお話しはどうなんでしょうか。

**酒井** それは今の史料の所蔵の仕方は、我々のよく歩いた時代とは随分変わってきました。一昔前の話になるんですが、我々の場合は特に近世文書、あるいは明治二三年の戸長役場の廃止までのものは、村の庄屋、村役人の家か、地域の共有文書としてあつて、調べるときは、村から村へと尋ねていきましたね。もちろんやみくもに行くんじゃなくて、それなりのおうちというのを見当つけていくんですけど、村から村へ手弁当で歩いた。最初はですね。そのうちに自治体史が始まると、そちらのお世話になりながら、掘り起こしに行つたということですね。

**小田** 多くの自治体史を手がけられ、多くの人的関係といいますが、人的ネットワークを構築されたと思います。そこでのおつきあい、あるいは勉強されたことがたくさんあると思いますが、その辺りで堺市史(1)の続編を手がけられて、小葉田先生、あるいは朝尾先生、他にも成田先生など、いろいろおられると思いますが、その辺りのお話をお伺いしたいと思います。

**酒井** 堺市史(旧)は戦前に小葉田淳先生がお若いときに三浦周行先生のもとで従事された。

小葉田先生が大学を出られて間もない頃の写真が市史に収められています。そのご縁で京都大学へ堺市から話を持ってこられたと思つたんですけども。そして朝尾先生がその編集主任として全力を投入された。その途中で京都大学へ就任されるということがありましたね。私がたまたま畿内特に摂河泉辺りの農村めぐりをよくやつていてということと、近世担当として入つたと思いますね。ほかに福島雅藏先生などが加わられた。

我々が担当したのは、旧堺市史以後新しく堺市に合併された旧村の歴史を、考古古代からずっと近現代まで書くということですね。で、朝尾先生が全部を統括されましたけれど

(1) 『堺市史』

八冊、三浦周行監修、堺市役所、一九二九年～一九三一年刊。『堺市史続編』六冊・付図、小葉田淳編、堺市役所、一九七一年～一九七六年刊。

も、もとの旧市内については別の、京大の人文科学研究所の渡辺徹先生を中心に前の堺市史で取り上げた以後の旧市内の近現代史を担当された。ちょうど大学紛争の最中でしたね。苦労しましたね。もともと筆が遅いところへ。

小田 新史料をかなり探されたと思いますが、それまでになんらかの方法で史料が集まっていたんでしょうか。

酒井 いや、もう新地域は、基本的な調査を本格的に始めたということですね。文書をカメラでとって、CJに焼いて文書ごとにファイルして、並べるといって、撮影してきましたね。そこで一番大きかったのはね、私の印象だけでも、百舌鳥赤畑の高林さんの文書ですね。これは一橋領知ですけど、すでに津田先生が調査されていましたが、ここに広域的に天保期の史料がありましたね。あと夕雲開せつうんひらきの筒井家など別の古い時代の史料がありましたけど、私の担当では高林家の印象が強いですね。

もうひとつ、明和の一揆の史料がね、資料編のまとめの終わりぐらいに出てきましたね。これは本場にびつくりしました。この発見はエッセイに書きました。

小田 明和の史料で特徴的なものがあつたかと思いますが、何か思い出されるようなことはありませんか。

酒井 これは北野田の井上さんというお宅なんですけど、その村を含めて丹南藩高木領(112)があります。丹南藩の百姓一揆が起きたということは大体知っているわけですね。その家に、その一揆の史料があるのかないのかは、確証はなかったんです。ところが、何回か行くうちに出していただいた古文書の中に、その一揆にかかわる断片があつたんです。それで一揆の史料があるでしょうとお尋ねしたんです。そしたら、ないとおっしゃるんですよ。この方は公的な役所に、職業安定所だったかにお勤めの方だったから、史料を市史に簡単に見せてもらえるかなという甘い考えを持ってたんですよ。個人ではちょっと問題があるけど、市の仕事だから。何回目

(112) 丹南藩高木領

一六二三年大番頭高木正次が大坂定番となり、その後、河内国丹南郡内二カ村一万石に移され、丹南村に陣屋を設けて立藩、維新に及んだ。

かは忘れましたが、僕が行ったときに、明和の一揆にお宅の御先祖が関係されていると思う。ついでに、そのお墓に参りたいって言ったんですよ。そしたらね、井上さんが先頭に立って、三カ村の共同の墓地へ、今はもうなくなってますけれど、連れていかれましたね。墓地に入ったらね大きい声で、きょうは酒井先生が来ておられると墓に話しかけられました。あつと思つたらね、実はこの間の戦争で戦死した息子に話したのだと。こうして連れていってもらうと、墓地の真ん中に三カ村辺りの亡くなった方の柩を置く石の細長い台があつて、その台のすぐうしろに百姓一揆に関係した庄屋さん、井上さんのご先祖の墓があつたんです。驚いたのは、村の死者一人一人をおくりますね。そのときに、自然に後ろにある墓をおがむ形になっちゃうんだ。それで感激しましてね、お宅へ戻ったら古文書が出てきたんですよ。江戸の小伝馬町の獄中からの手紙です。そのときは朝尾先生が、よう見つけたなという感想を編さん室の那須（久仁子）さんに伝えられたそうです。資料編の最終段階です。資料調査の仕方ですが、文書がありますか、見せてくださいではね、所蔵者が無条件に出してくれるという考えが間違っている。やっぱり個人のものでしたらね。ちゃんとしかるべき共通の認識の上に立たないと、古文書というのは、個人のお宅からは提供してもらえないじゃないんだという実感を感じた。

小田 共通的な認識というのは、人間としてというような。

酒井 そう、そういうことです。

小田 どのようなことでしょうか。

酒井 獄中で亡くなったのでなくて、幸いに釈放され善光寺へ御礼参りに寄って、帰ってくるわけです。坂迎えといって村人が迎えるんですね。ご苦労さんでしたと。村のちに亡くなるんだけれども、それにしても、村の百姓を率いて立ち、獄中に入ったということは、我々からみると村のために立ったということになりますけれども、一応社会的には、獄へ入れられたと

いう認識があるでしょう。だから、そういう意図、立場をよく理解し、井上さんに対する敬意を表して初めて、じゃあまあいいかと。その後盛んに、お便りをいただいて、堺市史続編にはさんであります。

小田 そういうことを契機にして、人間のいい意味での関係がついたという証拠ですね。そのあとですね、尼崎市史の方も担当されたと思いますが、これはどういふふうな。

酒井 あれはね、若いときですから、助手みたいなもんですな。執筆は全然やっておりませんが、いい経験だと思うのは当時村の悉皆調査をやってるんですね。市史などをやる場合にしても、悉皆調査をせずに目に入ったところだけで資料集をつくる場合が時折あるんですけども、そうでなくて、担当の八木哲浩先生は、庶民資料所在目録の作成という戦後の全国的な仕事に兵庫県担当として従事され、尼崎藩大庄屋の上瓦林村岡本家の古文書を見つけて、それで今井先生と共著で『封建社会の農村構造』（有斐閣）をお書きになった。そういう考えから悉皆調査をされた。私はまことに役立たずでしたけれども、まず、文書のチリを払いながら古文書の目録をつくる。そして、それを踏まえて、内容に入る調査を行うという、その基本勉強をしました。小田さんも経験されたように、文書名をつけるのは非常に難しいですな。特に冊子はいいんだけども、とりわけ一紙ものはね、若い人には、こういう訓練をきちつとやってもらう必要があるんじゃないかと思います。在るものを調べるのじゃなくて、極端にいうと「こみのよ」なものをあさって、内容別に一点一点分類してというような、基礎的な訓練をさせてもらいました。

小田 昭和四十年になりました、大阪百年史とか、兵庫県百年史といったお仕事をされますが、近代史への広がりについて、どういふような感じを持っておられたんでしょうか。

酒井 この大阪府の成立と兵庫県の成立は、大体同時なんですね。だから、同時並行で『大阪百年史』では教育を担当したんです。黒羽（兵治郎）先生がトップで府立大学が引き受けて、



酒井 一 氏



森杉夫先生<sup>(113)</sup>と私が近代の文化、その中で私の担当は教育。生の史料を探してくる時間がほとんどなく、突貫工事でした。

それで既成の本を並べて書きました、教育史としてまとめたのは一応最初ではないかと思うんですが、このあと『大阪府教育史』が本格的に、福島雅蔵先生たちによって大阪府から出るんです。そのときに一番参考になったのが、曾根崎小学校というのが梅田にあり、愛日小学校とか、大阪の北にある小学校を調べてまして、第二次資料ですけど、学校沿革史を見たりしました。曾根崎小学校の校長さんが明治時代、児童の退学がふえることをものすごく嘆いているんですよ。そういう一節にあって驚きましてね。それでなぜかということを考えていますね。当時、私は龍谷という私立大学におりましたから、学費をいかに上げずに学生に就学してもらえるかということに非常に関心がありまして、その目で見たら、大阪市 of 授業料の値上げによる退学なんです。このことに気がつきまして、読んでみると、校長先生が、その授業料の値上げによる中退者の増加に憤慨していたわけなんです。これが一番印象的でした。あとは、大阪の南の学校です。愛隣学校というのに関心があって、大分力いれて、当時『どんぞこの子どもたち』という本を確井先生が出ておられ、活用させていたいただきましたね。

もう一つの『兵庫県百年史』では、明治の後期を担当しました。監修は、今井（林太郎）先生、東大で平泉派の皇国史観になじまず、莊園研究をされた方。戦争中外務省の嘱託をされていたので、近代史にも詳しい。私は、政治と文化以外は大体取り上げたんです。つまり、兵庫県というのをおもしろい。江戸時代でいうと五力国が入っているんです。日本海側と瀬戸内海側と内陸部が入っています。わかりやすくいうと、日本の縮図みたいなもので、また初代の知事が伊藤博文です、開港場として出発した。それで、特に経済的な関係も調べて、初めて近代史の勉強をしました。このあと私、龍谷大で日本近代経済史と経営史にかかりましたので、これがものすごく役に立った。一県から、日本の経済を見ていくという、近代史で、本格的に

(113) 黒羽兵治郎（一九〇四—一九九三）

戦前から本庄栄治郎門下として大阪の経済史研究に従事し、『近世交通史研究』（日本評論社）、『近世の大阪』（有斐閣）を出版、戦後は府下の数多くの市史編さん事業を推進、『大阪編年史』などの史料の公刊にも尽力した。

(114) 森杉夫（一九一八—一九九一）

近世の年貢制度と被差別部落問題について丹念な地域研究を積み重ねた。『近世徴租法と農民生活』（柏書房）。

というと恥ずかしいですけども、初めて多くのことを学んだように思います。

小田 そのあとに大変な仕事をされたと思いますが、兵庫県史全二五巻、三十有余年にわたるお仕事ですが、これについては、さまざまなお思いをお持ちであられるかと思いますが。

酒井 これは、期間がちよつと長過ぎるんで、簡単に言いますと、近世編としては最初は、今井先生、八木先生、作道（洋太郎）先生<sup>(115)</sup>などが編集の中心です。そこへ二番手として私なんか若輩で入れていただいた。『兵庫県百年史』の関係もあつたんでしょね。このときいちばん若かつたのは、京都大学に後に移られた大山喬平さんでした。中世担当、大阪市大におられたので、直木孝次郎先生のお声がかかり。その次に若いのが私だった。だから、幸いに生き残ってるんです。八木先生はまだお元気だけれど、今井先生、作道先生、小林（茂）先生<sup>(116)</sup>も亡くなって、あとまあ、残っている少ない人間の一人です。

兵庫県史の調査の頃は若かつたから、五カ国をそれぞれに歩きました。それで、本文篇と資料篇との完成までたどりつきました。

小田 新史料探して全兵庫県下回られて、前の堺市史のときに資料を貸していただいたときの教訓としてあるわけですから、いかななく、發揮されたと思いますけど。

酒井 堺のように特定の地域に食らいつくんじゃなくて、点々とある形でしょう。だから、必ずしもそういう密着型ではないんですが、地元で一生懸命調べておられる方の資料を提供してもらつて。印象的なのは、但馬の元文の一揆がありましてね、隠岐島に流された人が但馬の故郷へ行った手紙を、地元の人が確認されてましてね、これも、泉州の井上家の文書等と同じように、獄中、あるいは流された先からの手紙というもので感動的ですな。

小田 そうですね。かなりリアリティーがあつたんですね。

酒井 リアリティーあつたと思いますね。あといろいろ思い出すこともあるんですけど、こついつとこころですね。

(115) 作道洋太郎（一九二四—二〇〇五）

藩札の研究で知られ、『日本貨幣金融史の研究』（未来社）、『近世封建社会の貨幣金融構造』（塙書房）、さらに大阪府、兵庫県下の自治体史に関係して『阪神地方経済史の研究』（御茶の水書房）をまとめた。

(116) 小林茂（一九一四—一九九三）

克明な農村史料の調査と平明な論文で、近世経済史から被差別部落史までを手がけた。『近世農村経済史研究』（未来社）、『封建社会解体期の研究』（明石書店）。

小田 それから、あと『阪南町史』であるとか、『高槻市史』、『羽曳野市史』、『八日市市史』、『相生市史』と続け様に手がけられますが、お仕事を通じて、新しい発見とか、感動されたようなことはありませんでしょうか。

酒井 それぞれあるんですけどもね、阪南町は福島先生のお誘いで、これは昔南海沿線側の海岸沿いの尾崎村と山間の東鳥取村と、同じ泉南でも随分違うということ。合併して阪南町（いま阪南市）ですけどね。隣接してるんだけど、違うなという実感は持ちましたね。だから、地域ってというのは細かく見ると、いろいろおもしろい問題がある。尾崎を中心にしたところの感じはそれなりの早くから続いた文化も持つてるところですね。

小田 はあ。今言われた尾崎の方ですね、海側と山側が違うということですね。この阪南町では。

酒井 阪南町は二つの町村が合併したんですね。今も町村合併がいろいろ進んでいますけど。だから、尾崎を中心にして箱作はこくわだとか、海岸沿いは街村と漁村ですね、街道がずっと続いて。そういうところと離れて、JR阪和線の山中溪やまなかってありますね、あそこから自然田じぜんだあたりは、やっぱり村民性が違うんですよ。海寄りはまだ開放的です。

住民の意識が大分違うんですね。この山手の自然田村では、初期の免状に綿作が早くから入っていることがわかりました。これは大きい成果ですね。

小田 そうですね。泉州の方は早くから。

酒井 だから、綿作の発展のことを考える方はよく引用されますね。尾崎もまた特色がありますね。大庄屋吉田家などもおもしろいですね。

高槻市史は、松尾寿さん、島根大学、のちに大阪樟蔭女子大に先般までおいでになった。松尾さんとは若い時分からの知り合いで、私に声をかけてもらいました。これもよく歩きました。大塩関係の史料もそのとき出てきました。

小田 ああ、そうですか。

酒井 よく歩いたんですけど、本文編を書くときは、失礼いたしました、イギリスに留学しました。

羽曳野市史はね、これは山中（永之佑）先生、大阪大学の法制史、近代政治史の、私の尊敬する先生のお誘いで近代の経済をやれということ。山中先生は高槻市史で一緒にしたんです。山中先生がロンドンで下宿されたところへ、私もお世話になりました。羽曳野市史では、初代委員長が亡くなって、阪大の黒田（俊雄）先生になり、黒田先生が亡くなって、吉田（晶）先生が三代目の委員長、委員長が三代交代して、市長さんも変わりましたね。近世は數田（貢）さんがおられまして、私は近代の担当。一番おもしろかったのは、交通ですね。それと水平社設立時の推定が適中したこと。鉄道の発展と地域がどういふふうに変わって、住宅がどう出てくるか。村がどうなるか。あるいは村でも産業が広がっていくとかね。大変おもしろかった。遅筆でご迷惑をかけたが、納得するものができたと少々満足。

小田 多分、この仕事を通じて、そういうものを会得されたわけですね。

酒井 バットの芯にパチンと当たった感じですか。

小田 もともと先生はあるイメージを持っておられたわけですね。あるいはそういう問題意識みたいな。そうではないんですか。

酒井 ある程度持っていますね。羽曳野では、市史にはあまり載っていないんだけど、江戸時代から明治を通じて牛問屋の天王寺の石橋孫右衛門関係で、駒ヶ谷に牛市があった。駒ヶ谷村の古文書にあり、山口之夫先生が見つけてこられた史料群（真鍋甚策家）です。山口先生と広島文理大の同窓である宮川満さんという太閤検地論の先生と一緒に作業しました。私の親の家が会場でした。私は牛市を与えられて書いて『史林』に発表しました。朝尾さんが、その時分『史林』の編集をされてたんです。それで、羽曳野のイメージは大体できていた。後に奈良県

の高田に移住しまして、近所に下田とかの地名があります。駒ヶ谷から山を越えると奈良県へ入った辺の村がね、既に牛の研究で知っていたところです。だから、なんとなく身近に、大和へ住んでも感じたものです。

近代史については、鉄道というものがどういふふうに普及していくかということとは街道と違って面白かった。

小田 藤井寺のお仕事はどうでしたでしょうか。

酒井 『藤井寺市史』にもお世話になりましたが、直接関係ありません。羽曳野では鉄道敷設に伴う株主のお宅へ尋ねていたり、綿関係の工場の聞き取りをしてね。大正時代の資料ってあんまりないんですよ。そういうのを聞きとりと、わずかな文献と突き合わせてね、組みたてたり、鉄道の普及と住宅開発。白鳥町というのがそうかな。

小田 これは市史をつくるときに、自分に与えられた担当分野がありますわね。同じ教育で入っても奈良県の教育とほかの教育は違うと思います。あるイメージを自分なりにつくって、あるいは持つておかないことにはつくりづらいということがあろうかと思いますが、先ほどから、このピタッとくるといふのは、その自分でつくったイメージといろいろ資料を探しながら、そういうことが符合したというような解釈でよろしいですか。

酒井 いうよりも、地域によりますが最初は大雑把なイメージしか持ってないです。だけど、鉄道によって地域がどう変わるかという観点は持つてるんです。鉄道と工場が近代の河内だけじゃありませんが、特に大阪周辺を変えていったというイメージがありますね。地域経済をどういふふうに変貌させたか。一応近代経済史の知識として入れてあり、それが、どういふふうに展開してくるかは地域によって違いますわね。JRが走るところと、私鉄が走るところと。私鉄の場合は、地域の庄屋の流れを汲む、地方名望家が株主として、今日の近鉄南大阪線をつくっていつてゐるわけですね。そういうのを見て、そしてその地域に有力な株主がいたら、それ

を尋ねていたら庄屋さんだったとか。それで近世とのつながりを一応考えるとかね。かちんとあたったというのは、理論的に組み立てられたということですよ。

小田 そのような意味だったんですね。そうですね、『羽曳野市史』の時にはそういう思いを持たれたわけですね。『八日市市史』ではどうでしょうか。

酒井 『八日市市史』は、朝尾さんから声をかけていただいて、朝尾門下の水本（邦彦）さんもおられまして、ちよつと遠かったんですが、おかげ参りなどですな。幕末に近いところを担当させてもらいました。例えばひとつは、殿さんが違つと、村の生活が大分違つ。この市域に、東北の仙台伊達家の領地があるんです。そうするとね、向こうの文化が入ってくるんです。馬頭観音<sup>(17)</sup>があるんです。馬頭観音というのは、本来馬のことかどうかわかりませんが、東北型の支配を受けてるところは、牛より馬を使つてるんです。普通西日本は牛耕、東日本は馬耕、というふうに分けるんですけどね。だから、近江は、牛耕地帯なんですよ。そこへ、殿さんが違つとね、東日本型の馬頭観音が祭られてるとかいうようなことがあつて。おかげ参りは、ちよつと面白い。

それから、天保一四年の三上騒動<sup>(18)</sup>という、幕府の天保改革による検地に対して、村々が十日の日延べをかちとつた一揆があるんです。滋賀県のJ R東海道線に野洲駅がありますね。弥生時代の銅鐸のたくさん出たところです。そこでのちに史料が報告されましたけどね、おもしろい日記があつた。一揆を起こす前に、火伏せの秋葉権現<sup>(19)</sup>にお参りしているんですよ。秋葉山というのは、遠州、静岡県でそこへお参りに行つてるんです。何気なく書いてあるんだけどね、あとから見るとね、一揆の祈願に行つた感じなんです。よその村から一揆が波及してくる記述もあつて、おもしろいですね。それから、今度は京都の獄中に捕まつてからも日記があるんですよ。それがなぞなんです。私の推定では、親父が獄中に入ったんで、息子が書きついで。筆跡が変わつてると見たんですが、だから、興味深々。

(117) 馬頭観音

宝冠に馬頭をいただいて憤怒の相をなした観世音菩薩、馬の供養と結合して特に江戸時代庶民間に信仰が普及した。

(118) 三上騒動

三上山一揆とも云われ、一八四二年近江甲賀・野洲・栗太三郡で幕府の検地に反対し、領域を超えて集まつた。一揆参加者は四万人を数え、検地役人の三上村本陣へ押寄せ（十日日延）の証文を書かせて検地を粉碎し幕府の天保改革遂行に重大な衝撃を与えた。

(119) 秋葉権現

遠州の秋葉山三尺坊大権現をいう。秋葉山三尺坊は近世期には、朝廷・公

小田 あと、『相生市史』は何かありませんか。

酒井 相生で印象的なのはね、相生市には、播磨の赤穂郡ともうひとつ揖保郡の西部が入ってるんです。揖西郡の庄屋さんの文書があつて、色々小前の百姓から攻撃された家です、これを原稿に書いたら、市が慌てましてね。河本先生に相談しますといったんですよ。河本さんというのは、自民党の河本敏夫<sup>(120)</sup>さんですね。河本さんは相生市のご出身だが、龍野藩領の庄屋で、河本家の文書だったんです。だから、国会議員というのはね、これもときどき喋らしていただいてますけれども、大体、普通選挙法の成立までは、あるいは今日も含めて地方の村役人、豪農、地方名望家でないと出れませんね。名誉職、日本の伝統といったらいいか、構造と言つてもいいか。河本さんは、地元にも大の貢献をされている方です。市の問い合わせに対して事務所から返事がきました。どうぞ、ご自由にお書きくださいと。私、これを聞いてね、はあと思つたね。大物ですね。

小田 うれしいですね。

酒井 うれしい。そういう思い出がある。ほかにもあるんですけど、まあ、これで。

小田 あ、そうですね。それでは、あと『三重県史』の方は、先生、三重大学の方で三重県とは深いつながりがあるかと思いますが、これは今も進行中ということですね。

酒井 県史は今進行中ですね。

小田 ご担当は近世とか近代、両方……。

酒井 両方に入っています。県の要望で近代から始まつて、資料編を完結して、近くその通史篇の執筆の体制を固めるため、つい三日ほど前に打合せがありました。近世はまだ資料編が続刊中です。ちょっと若いときには、県下の方々にいっていましたが、今は職場を離れてからうとくなくなつてますけども。三重県は、伊勢の国、志摩の国、南の方は、それこそ世界遺産に入ってくる紀伊の国、紀州の東部、東紀州ですね、それから伊賀の四方国が含まれるんですよ。だ

卿・武将から庶民に及ぶ幅広い層の人々から信仰された。特に庶民の間では山城の愛宕山と並ぶ火防の神としてあがめられた。

(120) 河本敏夫(一九一―二〇〇一)

自民党三木武夫派を継ぎ、三光汽船を経営する企業家の国会議員として重要閣僚を歴任した。若い頃は、反骨のりべラリストであった。のち三木派伝統のハト派としての存在感を示した。

から、これまた、地域によってさまざまに違う。伊賀はやっぱり非常に特色がありますね。何方国かにまたがる研究っていうのは実にももしろいですね。伊勢国だって北、中、南とありますわね。紀州だって、和歌山城の方と、それから新宮<sup>(121)</sup>、東の方では、紀州藩領が伊勢国の要所、白子<sup>(122)</sup>とか、松坂<sup>(123)</sup>、田丸<sup>(124)</sup>をおさえていますからね。そういう点では、ここもおもしろいです。

小田 そうですね、三重県というのは、不思議な地形をしていますから。例えば山の中に入りますと、上野とか伊賀ですね、港で言えば、津もそうだろうし、それから、伊勢とか、志摩とか、不思議なところだと思って。やっぱりその趣も全然違うんだろうなと思います。文化圏にしましてもね。

酒井 ただ、一般的な辞書を見ると、例えば、野呂元文<sup>(125)</sup>は伊勢の生れとあります。伊勢のどこかまで知らないかね。南勢の勢和村波多瀬の生れなんです。なるほど、ここの生れだから、ああいう蘭学者、本草学者になった。本草学者が享保改革のときに、江戸へ動いてるんですよ。これはこの地域が紀州藩領だからですよ。この九月大商大さんでもお世話になります、世界遺産の紀伊半島論を考えるのは、この勢和村の研究やら東紀州の紀和町、これは熊野に近いものですから、熊野参詣道の一環ですよ。それぞれに歴史のボーリングをして考えました。

四日市市史は近、現代を担当しました。四日市公害の漁村問題をやりましてね、百姓一揆分析を、近代の住民運動に適用しましてね、旗を立てて海上の男たちの闘いを海岸から女・子どもが支援するとか。公害裁判の勝利では、貴重な聞き取りをしました。

小田 実際のところ、このような仕事をしたことがないのでわからないんですが、例えば、先生がお若いころに、朝尾先生に、誘われてこれやってみないかと言われたときに、近世史やってくれとか、あるいは教育史やってくれと言われてますね。それは若いこともあるけども、うん、と、あるいは「はい」と言わざるを得ないと思うんですけども、余り酒井先生のことや

(121) 新宮

熊野川の南岸にあり、紀州藩付家老水野氏の城下町。近代では、佐藤春夫・大石誠之助などの逸材を生んだ。

(122) 白子

伊勢国菟芸郡のうち。堀切川河口に位置し、東は伊勢湾に面する。良港で江戸積の回船が往来した。紀州藩白子領代官所があった。近くに伊勢型紙の特産地があった。今は鈴鹿市の町名。

(123) 松坂

伊勢国飯高郡のうち。伊勢湾西岸部、榎田川、阪内川流域を中心とした地域に位置する。蒲生氏郷以来の城下町で、紀州藩勢州領十五万石の拠点。近世以降、伊勢参宮街道・和歌山街道の分岐点・宿駅として交通の要地でもあり、松坂木綿をはじめ、伊勢商人江戸店の本拠、商業の都市として発展した。

(124) 田丸

伊勢国度会郡のうち。紀州藩田丸領の城下町、久野氏が支配した。



ら、否定はされませんね。でも、先生はいろいろな仕事をやらねながら、もう今は、お立場が全然違うと思いますが、例えば朝尾先生はよく知っておられるから、あんまり変なところは持たされることはないと思いますが、これやってくれと言われて、いや、僕はここよりは別な所をやりたいと、自分の希望を出されたことはあるんでしょうか。

酒井 それはありませんね。今ちょっとそういうことを言うような歳になりましたが。

ただね、私の悪い性格なんだけど、与えられた仕事はね、早々とやらないけれども、折角の機会だから、勉強するという気持ちで、お前近代やるかといわれたら、私はできませんとは言わないんですよ。やりましょって気持ちで、勉強に入るんですよ。だから、兵庫県と大阪府で近代を担当したのは、ある意味では、役に立っている。というのは、明治維新を皆さんで、近世の研究は大体明治の初めで終わるんですよ。せいぜい明治二〇年まで、史料が庄屋さんの家にあるから書くけど。その延長として明治まで書いたら、その部分は余りはつきりしないのです。明治は明治時代から独自性があるはずだが、明治維新の前も後ろも、大事な日本の変革を両方から押えているという気持ちなんです。で、歴史家も案外史料の所在によって、研究の方法は制約をうけもうち切ってしまうんですよ。しかし、村として住民として生きていて、一貫して居るわけですね。生活様式が変わっても、一つのものだから、歴史家の時代区分で切ってしまうわけにはいかんと見えています。それで、近代もやらせてもらって、おもしろい。そういう点で、余り禁欲的に他の分野に手を伸ばさない方もあるんだけど、私は貪欲にというか、思いをこめながら、裾野を広めてきたという気がします。

いろんな自治体史の担当をさせてもらって、やっぱり地域というものがそれぞれの特徴、僕の言う顔や声のあるものとして存在している。だから、一律に地域というものは議論できない。泉州だって、堺と阪南町とは大分違っています。

だから、さっき申しましたように、地域独自の問題、個別的な、特殊と呼んでもいいんで

(125) 野呂元文(一六九三—一七六一)

江戸中期の医者・本草学者。伊勢の人で、医を山脇道立に、儒を並河天民に本草を稻生若水に学ぶ。幕命により各地に採薬する。一七三九年に御目見医師。

しょうけど、個別的な問題と、それから大きく泉州なら泉州というところに共通する普遍的なもの、それを押えて、それが日本史の中で、どういうふうな位置付けられるかということを考えていく方がよい。そういう点では、この色々な史料を見せてもらったので有り難いと思います。これはなんでも食べようという悪いくせかもわかりません。研究者によっては、専攻以外あかんという人がいますからね。

**小田** そのような貴重な資料をたくさん集めてこられて、自治体史編さんから得た地域像とか、それから大切な資料の保存問題ですね。これについてはどのようにお考えでしょうか。

**酒井** 今まで我々のやったところは、必ずしも史料保存が完璧でないんですよ。大阪府に関しては、大阪府公文書館<sup>(126)</sup>というのがありますけども、本当に他府県の文書館などに比べると、公文書中心でしょ。兵庫県だつて、公館県政資料館というのを置いていますけども、明治以後の公的な文書と現地で集めたのを、写真、その他で置いているだけで、本格的な建物を持ってないんですよ。その点では関係したところが、例えば堺市史で提示した資料や、写真が今どこに入っているか、探し出すのがもう大変なんですよ。担当者がどんどん変わって部屋がなくなつてますからね。ほかの市域についても同じなんで、これはきちつとした保存体制を考えて、市史が終わつてもここで集めた資料は公開して、もちろんそれぞれから関係者の承諾をえなければいけません。そういうことの努力をやる。ところが、自治体も財政難でとてもこういうことをやらないけれども、この観点を我々がきちつと主張していかなきゃいけないと思います。

**小田** わかりました。

**酒井** もう一つちよつと付け加えると、村で保存されていた史料ですね。これは今、住民の生活様式が非常に変わってきましたので、村や個人で保存しにくくなつてきていると思うんです。蔵のあるお宅であればいいけれども、蔵も不必要になつてきました。これはもうもつと広い意味で資料保存と活用を行政的にも考えてもらわないといかんなど。

(126) 大阪府公文書館

府が作成入手した公文書や資料類のうち歴史的、文化的な価値があるものを保存する施設。保存資料は閲覧でき、代表的な資料を展示している。公文書、資料類に関する問い合わせにも応じている。所在地は大阪市住吉区。

## 大塩平八郎

小田 なるほど、わかりました。それでは、引き続き、大塩平八郎に移りたいと思います。

酒井先生は大塩事件研究会の創設以来の会長をお務めになっておられますが、大塩研究のきっかけということ、それから、大塩事件研究会の創設について教えていただけますでしょうか。

酒井 今年の秋で研究会の三〇周年を迎えますので、なんらかの形で行事をやりたいと思います。大塩平八郎の菩提寺は成せい正しょう寺じというお寺ですが、私の家も寺なんです。同じ北区の日蓮宗で成正寺の住職さんが、私の寺へも来られるんですね。その関係で親父が大塩中斎先生ちゆうさい顯彰会の案内のはがきをもらってきて私に見せたのです。それで、初めて話を聞きに行つたわけです。成正寺の主催で岡本良一先生りやういちが来てお話をされた。私が行き出して三回目ぐらいか、その席に東大阪の布施警察署の横近くに住んでおられた西尾治郎平さんじろへいという、日本の社会運動史上に名前の残る人が来られましてね、先生、会をつくつたらどうだと。私が世話役をやるからと。豪傑でしたからね、やりましようということになって、それで関係者子孫の政野敦子さんもそれまでは顯彰会の催しにいられているうちに、お寺を中心に研究会を作ろうということになった。若かつただけど、歴史の一応専門家であり、百姓一揆いっかいとか、打毀しうちこわしとかちよつと物騒な研究をやつてますので、それじゃということと西尾さんが私を祭り上げまして、精力的に会のメンバーを組織されました、当時会員が一五〇人ぐらいあつという間に集まった。

小田 そのような考え方でしょうけど、先生ご自身は、大塩平八郎だけじゃなくて、大塩の乱を乱そのものとしてではなく、社会構造から組み立てなければだめじゃないかと、そのようなお考えだと思いますが、それについては如何ですか。

酒井 それは私が関係したこの研究会は、研究者だけの会ではないんですね。まず研究者が入

(127) 大塩事件研究会

一九七五年十一月九日に、大塩中斎先生顯彰会大塩事件研究会を創立する。大塩家の菩提寺である成正寺を中心に二十年近くにわたって活動してきた顯彰会の一部門として研究会を設立し、その後顯彰会から独立して、同寺に事務局をおいて活動している。

(128) 成正寺

成正寺は読誦山と号し、開山は増長院日秀大僧都で、一六〇四年三月の創立。本家の尾張藩大塩波右衛門義勝の末子、大塩六兵衛成一が大坂に来て町与力となった。菩提寺は本家と同じ日蓮宗の身延山末の成正寺。

(129) 大塩中斎(一七九四—一八三七)

江戸後期の陽明学者で大坂東町奉行所の与力。通称は平八郎、中斎と号した。退職後天保の飢饉に救済を町奉行に請うたが、聞き入れられず蔵書を売り払って窮民を救い、一八三七年大坂で兵を挙げ、敗れて潜伏ののち自死。著書に「洗心洞劄記」。

らないと、ちゃんとした裏付けができないというんですが。まず、関係者の子孫が入る。それから、市民が入る。だから、市民学習の会なんです。講演会にしかるべき先生方に来ていただいたら、この会はえらいすごい質問が出来ますねというぐらいに、会員の方が成長されたんです。大塩というのは乱のイメージしか持ってないでしょう。貧しい人のために立ち上がった、飢饉だ、幕府と戦ったと。そういう意味で理解されるのは、いいんだけど、大塩の個人的な実態を明らかにするも大事な仕事で、大阪歴史博物館の相蘇一弘さんがよく調べておられます。

歴史において人物をどう見るかという、方法上の問題があり、人物の偉大さというものを、時代と切り離して考えてはいかんわけですね。だから、大塩が立ち上がったということの、哲学が一つですね。もちろん人柄がいますね。それから、彼をとりまく社会構造もきちつと入れないことにはね。ただ、貧乏人のためにだけ闘ったから、正しいというような単純な理解ではいかんということで、総合的に考えて行くというのが、ねらいです。天保の飢饉などにして、その前にあったあたらしい時代の心音というか、鼓動が文政時代に始まっている。天保時代になるとはつきり聞えてくるようになって社会不安が高まってくる。大塩の研究というのは、まず政治のあり方を考えるということなんです。それは大坂の政治もそうだし、経済問題、それから当時の思想状況はどうなっているか。文化はどうか。社会状況、飢饉の実態はどうだったのかと。私は総合的にこの事件を通して明らかにする段階に来たと思っんです。ところがなかなか、これができなくてね、だけど、一般の市民の方には、やっぱり歴史を総合的に捕まえて、地域と人物と時代、そして国家というのをきちつと入れて、なぜこの事件がおきたのかを伝えないといかん。それで、三〇年やってきたと思っんですけども、成果は、それなりに進んでいると思っすけれど、私はまだ満足してないんです。

小田 でも、難しいと思っんですね。今、先生がおっしやっした同じ天保期だけでも、政治で

(130) 岡本良一(一九一三～一九八八)

大阪城天守閣主任を務め、市民的視座から、信長・秀吉、被差別部落、民衆運動など広い分野で平明な文章をもつて研究を深めた。戦後は大塩研究の新しい基礎を固めた。『岡本良一史論集』全二冊(清文堂)。

(131) 西尾治郎平(一九〇七～一九九一)

戦前、全農の本部書記などを務め、和歌山県日高争議や高知県各地の小作争議のオルグに携わった。大阪の天王寺公会堂で山本宣治が行なった最後の演説を壇上で書記として聴き、「山宣ひとり孤塁を守る」という通説に異議を唱えていた。『日本革命歌』(共著、一声社)がある。

しよ、経済、思想、文化、社会と五つの大きな項目がある中で、それぞれのことを勉強した上で、総合的に判断をしなければいけないということになるんでしょうけど。

**酒井** 思想史では、宮城公子さんが大塩平八郎、思想史の専門家です。それから、大塩が、『洗心洞劄記』を書いておりますけども、大塩は中国の本を实によく読んでるんですよ。私の考えでは、大塩の読んだ本を読まなければ、大塩の思想はわからない。この間、小野和子先生に中国の王陽明<sup>(132)</sup>の思想を説明していただいた。明の時代の人ですから、これを大塩がどういふふうに見ているか。大塩が、明の時代の歴史について実に正確に知っていることを教えられましたね。これは中国の研究者ならこそわかるんでね。我々はそこまでわからないんだけど、中国の書物が長崎から入ってきて大塩が読んでるんです。だから、そういうことまでやる必要があり、研究者が大坂の町の研究で大塩を議論するのは基本だが、ごく一部分にとどまるんじゃないかな。総合的にそれぞれのお得意のところから入ってきてもらいたい。

**小田** そうですね。重要なご指摘だと思つんですけど、今の研究者はそういうのを見落としてる研究者が結構多いと思います。というのは、もう形だけしか見てない、いわゆる現象面だけしか見てないですから。つまり大塩平八郎だと、大塩平八郎の書いたものを分析すれば、ひよつとしてこういうことだった、こういう考え方は、どっか中国からの影響下にあるんじゃないかと。それを見抜いた人はやっぱり一流の学者だと僕は思います。

**酒井** 例えばある論文を読んだときにね、その先生が、マルクス主義の立場をとつておれば、マルクスを読んだらよくわかるんですよ。石母田正<sup>(133)</sup>さんの本を読んだ哲学者から、この人の方法にはヘーゲルの影響があるといわれて、まさにそうだとお答えしたことがある。それと同じでね、大塩が王陽明とか、朱子など膨大な本を読んでもみたいですね。文章を見ると、大塩が使っている言葉は実是中国の儒学や明・清の文献にいつぱい出てくるものです。だから、それを大塩と同じような形で読んで初めて大塩の著作がわかるんじゃないかというの

(132) 王陽明(一九二二—一九八六)

初め致知の学を講じ、後に知行合一の説を唱えた。陽明学派と称した。著書に「伝習録」「王文成公全書」。

(133) 石母田正(一九二二—一九八六)

史的唯物論の立場からの日本古代史研究を深め、古代家族・奴隷制に関する多くの研究成果がある。一九四六年に刊行した『中世的世界の形成』は、古代から中世への変革過程を実証的理論

が私の考えです。それはなかなか日本史家にとって大変なことなんで、宮城さんもよく挑戦されたが、中国史や中国哲学の人にも聞きたいところですね。

小田 大塩平八郎という人は、中国の古典ですね。それを教養としてじゃなくてね、思想化が、僕は読んでないからわかりませんが、今のお話をお伺いして、思想化していたかもわかりませんね。

酒井 そうそう。それが大塩の中齋学なんです。自分なりに編成し直したもので。そして自分の活躍した文政・天保の時代の現実をそれで批判し、最後にはこのとおり立ち上がるということになるんでしょうね。

小田 はい、そうですね。

酒井 例えば、話がそれますけど、大坂の道修町の薬種ですね。漢方の薬なんかも、やっぱり長崎が入口になって、薬の原料ですからね、唐本もそういうルートから入ります。中国は、江戸時代にとって大きい存在だと思いますね。もうひとつ大塩について言いますと、大塩の乱を民衆運動として見るかどうかですね。これについては、大塩は民衆のために立ち上がったのであって、その意味は非常に大きいんだけど、イコール民衆運動として言うていいかどうかですね。これは、吉田松陰<sup>84</sup>が大塩の後二〇数年経ってから書いている『講孟劄記』の中で、新しい時代の動きを、吉田松陰も武士の出身ですから「王者の兵」という言い方で示してるんですね。王というのは、どう解釈するのか、難しいと思うんですよ。例えば王であることの資格を持つている人の軍隊というもののなか、あるいは、日本でいうと、武士、中国でいうと士大夫と見るのかですね。私は治者としての責任をもつ武士の軍隊というふうに理解すれば、大塩は自分の決起は百姓一揆とは違つと、はっきり檄文で言っておりますから、為政者としてやはり政治のあり方を問うた。これでいいかどうか、評価が分かれるところですけども、私は万策尽きて、こういう行動に出て、民衆のために天命を奉じて王者の兵を挙げた。そして、政治責

的に描き出したみことな歴史叙述で、戦後の歴史学に多大の影響を与えた。『石母田正著作集』（岩波書店）。

(134) 吉田松陰（一八三〇—一八五九）

幕末の志士で長州藩士。兵学に通じ、江戸に出て佐久間象山に洋学を学ぶ。常に海外事情に意を用い、一八五四年米艦渡来の際に密航を企てて捕らえられた。萩に松下村塾を開いて弟子を薫陶する。幕府の条約調印に関して閻老間部詮勝の要撃を謀って捕らえられ、翌年江戸で斬刑。

任を持っている武士及びそれにつながる村役人を軸にして、民衆を動員した。だから、百姓一揆とは違うところをきちつと認識する必要があると思います。百姓一揆とこれとの違いは、百姓一揆にもルールがありまして、火を放たない、人の物を取らないという、それなりの村の共同体のルール、一揆の作法があるんですね。大塩はぶつ放しますから、火事が起きても構わんという感じですよ。悪いやつは徹底的にこらしめるといふ。だから兵乱です。

これは戦闘の仕方、乱の起こし方の違いがあるんだけど、もうひとつね、百姓一揆はね、社会関係の中で、もつという利害関係のあるところだけで戦うんです。大塩はね、政治と戦ったんですよ。だから、頼山陽<sup>(135)</sup>が大塩についていみじくも指摘しているように、大塩は、国家のための政治をめざした。百姓一揆の場合はね、藩領でも自分たちの所属する領内だけで隣の税金についてほとんど考えてないんです。だから、地域と領主単位で考えたのに対して、大塩は、一国の政治そのものを問うたわけです。残念ながら日本の百姓一揆はこの時点でそれを超えられなかったというところが一つの限界なんです。それを近世史の佐々木潤之介さんは、農民戦争到来期といったりしましたが、なかなかそうはならないですね。でなければ下級武士が、明治維新に躍り出てくることはないですよ。

大きな背景としては、民衆の運動があり、その上で武士が動いている。武士の運動があつて民衆ではないということ、これははっきりしておきますけれども、やっぱり民衆が本当に日本全体を動かすには至っていない。その条件を用意してくれただけ。踊り出るのは下級武士です。しかし、準備した民衆がみずから躍り出るのは、やっぱり明治になって民会、県会、それから後に国会、こつというのが置かれるときに、民衆の代表が踊り出てくるという、展望を持っているんです。

小田 そうすると、大塩平八郎は幕府に対して、幕府はだめじゃないかと、腐敗して。それはもともと皆、大なり小なりそういうのは持っているとは思いますが、それだけでなくて、ひと

(135) 頼山陽(一七八〇—一八三二)

江戸後期の儒者・史家。大坂生まれ、広島に移り脱藩、江戸で尾藤二洲に学び、京都に出て山紫水明処に住んだ。史学に通じ詩・書をよくした。著書に「日本外史」「日本政記」「山陽詩抄」。

つはそのようなこともあります。もうひとつは自分のその概念といいますが、それをやるにあたっての、百姓一揆とは違うよという自分のオリジナルな概念を持っていたと。そのように考えればわかりやすいでしょうか。

**酒井** そうですね、多分哲学ですね。百姓一揆の哲学というのは、具体的であって、領域である。国訴は、その領域を越えた問題ですが。大塩は国訴を町奉行所の与力の若手・中堅として見てるんですよ。だから、庄屋が白州に入っていくか、それと力同心、それから奉行とやり取りするか。彼自身村々の惣代や村の代表を見ながら、鍛えられてるんですよ。

**小田** じゃあ、その日々の若手で、結構愛された中で、あ、こんなことをやってるやないかということを見てるわけですね。観察しているわけですね。

**酒井** だから、庄屋がしっかりしなければ村々がだめになるぞと見ている。庄屋が駆け込んできますね。本当にこの村の後ろに村人何百人を抱えながら、惣代としてたずさわっているわけですから、その点を大塩は、この人たちを組織しなきゃならんと思ったに違いありません。大塩は幕府の存在そのものは否定していません。幕府担当者が腐敗していると。だから、幕府の首脳部を入れ替えてしまえということです。しかし、入れ替えようとしたら、構造的に幕府が倒れざるを得ないんですよ。幕府を批判してるんだけど、幕府そのものの解体、倒幕は一言も言いません。だから、むしろ幕府担当者が腐敗してるという考えです。

**小田** それで、その商人とつながっているというような、

**酒井** 大商人が政治を動かしてると。武士から言えば、町人であるのに、より対等な立場をとるのは何ごとだと。

**小田** これをするのに、一人でも二人でも、まだ何を書いてもね、一人、二人普通に読んでもらうだけでも大変なことだと思います。それを、統一しとく必要がある。それは数百人もいたわけですよ。



酒井 まあ、三百人ぐらい。

小田 そうですね、数がね、すごいと思いますよ。

酒井 百姓一揆のは、万単位にもなりますね、万と数千でやりますからね。それにしたら、小さなもんですよ。

小田 だから、百姓一揆は、共通の主に経済問題なんですね。みんな一緒に干であるのが、万であるのが、共通の問題ですね。で、大塩の問題はそうじゃないですね。暗に思想の問題も含んでいるわけですよ。別にそこに参加しないからといって、自分は困らないわけですよ、そういう人たちもいてるわけですよ。そこが違っんじゃないかなと思いますね。

酒井 だから、豪農層が参加しなくてもええやないかと。参加したために御家断絶されてるわけですね。これはどう考えたらいいか。

ひとつは大塩の哲学の魅力でしょうな。各地に行つて講義しているんですね、特に退職してからはね。だから、講義内容までの中で、寺子屋辺りでやってるような話と全然違うんですね。

小田 それは、もうどうしようもないぐらい違うんでしょうね。

酒井 懷徳堂<sup>(8)</sup>でやってるような話と全然違う。現実を切ってるんですよ。それが感動的だということと、大塩のカリスマ性でしょうな。

それからもう一つは、村役人とても安泰でない時代です。

小田 それはどういふような意味ですか。

酒井 それもね、領主との関係でね、村役人がかなりの矛盾に直面してるということですよ。みずからの経営が、必ずしも安泰でない。つまり、赤字経営になつて可能性がある。村人の窮乏がかなり進んでいる。村役人というのは、飛び抜けた階層ですけども、地域の領主との関係で、地域社会に責任を持ってるんですよ。そのことを踏まえて、村政を担当するっていうこと

(136) 懷徳堂

享保九年(一七二四)大阪町人の援助により中井整庵を中心として大阪に創立された学校。学生は庶民が多く富永仲基・山片蟠桃らの逸材を生んだ。

を儒学の教で説いているのです。だから、村民が苦しんでいるときに何かしなきゃならんという考えで、村役人が選ばれてるんですね。その人たちは後ろを放つたらかしにして進むわけにいかない。金がない人のために、なんらかの金をやらないかん。それから、年貢を納めない人の分を自分が責任を持ってやらないかんですよ。それでかなり難しい時代に差しかかった。だから、政野さんのご出身の河内国衣摺村(きずりむら)の庄屋熊蔵が淀藩の庄屋だったんですけど、放り出されるでしょう、あれは領主に対して、百姓の腰押ししたと裁判記録に書いてある。つまり、百姓の立場に立つて領主と対立する。そうすると、領主がやめさせて無宿にする。無宿というのは大変言葉が悪いんですけども、きのうまで庄屋だった人がにわかには村を追い出されていく。しかし、村人は熊蔵がなんのために無宿者になったかよく知ってるんですよ。熊蔵は喧嘩しなくてもいいのに、喧嘩してるんですよ。そういう社会的状況がかなり広がってきたと思っ  
ていいんじゃないでしょうか。それを村の状況をふまえて、それから血縁、地縁で、大塩が組織してたんでしょな。

小田 僕は、今の矛盾とかそんなことは小さい問題ですからね、だれでもあるようなことだと思えますが、そうじゃなくて、大塩自身を持っていた思想とか、哲学を研究することにより、どうして大塩の乱が起きたのか、乱の再評価言ったら、非常に変な言葉なんですけど、もっともつと光があたってもいいような事実だとは思いますが、そのような意味では、もっと思想的、哲学的に研究をしなければ真の姿は浮かび上がらない。そういう意識は持っています。本当にそのようなところを踏まえんと、先生、会長でいらっしゃいますから、これからの大塩事件研究会の行く末といえますか、あり方といえますか、それはどんなふうに。

酒井 なかなかこれは大問題なんですけど、常識的に言われている理解をもつと豊かにせななきゃいかんと思うんですね。それで、伊豆の蘆山の江川家から出てきた大塩の建議書、密書を見ると、大塩が恐るべき捜査力を持つてることがわかるんですね。幕府の幕閣に座っている老中連

(137) 衣摺村

河内国渋川郡のうち。一八五三年頃の村明細帳によると、綿作が盛んで、一八三七年の大塩平八郎の乱に、村民が参加している。

中や勘定奉行が、大坂の城代・町奉行としていかに不正を働き、名奉行だと言われている人物が獄中で人を毒殺や絞め殺すことを指示したことなど、出てくるんですね。もう大変な事なのですよ。単に、貧しい人が倒れ死んで、だから立ち上がったというのと違います。幕政の中核に座っている連中の不正を、本当にしつこいぐらい暴露している。他にも幾つかあるんですよ。例えば大坂の商人の問題。將軍家出入の魚商人、日本橋の商人が大坂へ進出し大坂の魚仲間が反対するけれど、結局押し切られる。そのとき、大塩が抵抗したという。江戸からの指示に対して。それから、有名な天保三年の油方仕法の改正があつて退職していた大塩は、江戸からの大坂の支配の強化と見たようです。これらを明らかにしたい。そういうものをいろいろ組み立てていく。単なる飢饉救済でなくて。

小田 そうすると、もっと高い次元での大塩平八郎、あるいは大塩の関係する人々について解明していかれると、そういうことでよろしいでしょうか。

酒井 若い研究者には、やってほしいんですよ。我々のような時代と、今と社会状況が変わってきてますからね。社会運動、民衆運動についての関心はやや薄くなつてきている。いずれこういうものを更に解明する時期がやってくると思えますので、そのために種を播いているんです。

### 歴史学の視座

小田 わかりました。それでは、いよいよ最後になります。歴史学の視座ということ、八月一五日の衝撃と国家崩壊の実感なんでしょうが、八月、それまでは天皇制ということ、皆さん、天皇万歳とか、軍国少年とか、そういう人達がたくさんおられたと思いますが、それは我々だって、そういう時代に放り込まれたら、多分軍国少年になつてたんじゃないかなと思います。ですから、玉音放送があつて、軍に務めるか、人がですね、軍の物資とか物を勝手に

持ち出して家へ持って帰ったりしてるとよくな国はお目にかかるんですけどね、このときに、やっぱり思春期なり青春期を迎えた人達は、非常に大きな問題じゃないかなと僕は思っていますが、酒井先生の八月一五日は中学生ですか。そしたら、もう十分思春期から青春にかかるころで、いろんな思いがあると思うんですけども、その実感からお話していただけますでしょうか。

**酒井** 朝尾先生がお話になったように、一九四五年ですね、昭和二〇年に墨塗りの教科書があつて、自分の歴史に大きな問題を投げかけられた、とおっしゃったと思いますが、私たちの年代は、ほとんどが八月一五日ですね。絶対に崩れることがないと信じ込まされてマインドコントロールされていた国家がつぶれてしまった。戦前国会で論陣を張つて、軍部と論争したすぐれた政治家たちはいませんが、ついに一五年戦争で国家が崩れ去りましたね。このときに、なぜ戦争に反対しなかつたかという青年や子どもたちがいるんですけど、とてもとてもそんな時代ではありません。それははめられた人でなければわからない状況ですね。それで、身近な教師が国家の崩壊とともに、きのうまで言つてたことを手の平をかえすように平和・文化・民主と言いつける。ほとんどの子どもたちが不信感を抱くね。学校も荒れました。大人の態度の急変ぶり、学校の教師がにわか態度を変えた。先生に対する不信感が非常に強かつたです。それと同時にね、国家というものはいつまでも安泰ではない。実際歴史を見てもらつたら、永遠に続いた国家というのではないわけですね。いずれ国家は崩壊する。今の学生にそれ言つても信じないけどね。我々、目の前で見ただけですからね。これは単なる内閣が倒れるのでなくて、社会システム全体が崩壊するということです。イラクが今そつで気の毒な崩壊の仕方をしてるかと思いますが、そういうことがやっぱり学問の一番奥にある。そして、今の若い人が何を原点に歴史を研究するのか私もわからないんです。盛んにこんなことを言つて学生に嫌がられてるんですけどね。

小田 それはやっぱりその大きな戦争体験ですね、それから病气やか、死に瀕するような事故に遭遇したか、何かそういうものがあれば、自分の中の出発点みたいなものが明確になるんでしょけど、今の若い人はそういう大きな社会現象みたいなものがないからだと思いますね。最近の事件、天災なら、オウムとか神戸の地震、たと思いますけどね。

酒井 あれから、どう若い人が学んでくれるかということがありますね。

小田 それと、先生ご苦労をされておられます、定時制教師をされていたときに、学生の方から新たに学ばれたことがあるということで、感謝しておられますね。

酒井 私ね、昼の学校の高校の講師してたんですけどね、かたわらしばらくは大学院へ行って、それを終わってからも勉強するためには、やっぱり収入もはからないといかん、昼働いていたら勉強できないと。昼間はいろいろ調査をしにいたりしながら、夜の教師になった。ここへ行って、定時制の生徒のおかれている条件が、いかに劣悪であるかに気がついたので。給食がありましたね、アメリカの払い下げの脱脂粉乳だったんですよ。「飲むとピー」といわれた。下痢するんですよ。それを、生徒はどうしてるか。極端に言うとな、一人一合ないんですよ。一人五勺しかない。一合びんを一日置きに飲めと学校は言うんですよ。私猛然と腹が立ちましてね。これで教育委員会と大げんかになり、市会の問題にもなった。これほど昼との格差の子どもたちをほつといて、飲むとピーになるなんてけしからんと言った。学校の近所の排水溝がね、給食の脱脂粉乳で真っ白になってるんですよ。昼一生懸命働いて、いかに腹が減っている、この牛乳は飲む気にならないというんですよ。定時制の教育がどう子どもたちのことを考えていたのか、疑問を感じましてね。それで、あいつを首にせよという策動が始まりました。授業は生徒が疲れるから寝かさなないようにするにはどうしたらいいか、それなりの工夫をして、自分の知識を相手に送り込んだってため、生徒の持つる知識を生かしながら、今とかかわって歴史を教えなきゃということをやったんです。それが自分の研究そのものにか

えってこないといかんわけです。生徒の持つてる問題を、自分の歴史学の中でどういうふうに取り入れるか、ということで大変苦労して、苦労したっていうかね。だから、定時制の生徒と私の行動を理解してくれる教師がいて、堅い結束ですよ、今でも。逃げない生徒と逃げない教師に守られたんですよ。これはええ勉強させてもらいました。

小田 これは酒井先生にとって、今でも大きな財産と。

酒井 だから、東大阪の辺で調査していて職員会議に遅れて行くんですね。私がドア開けると雰囲気之急に変わるんですね。いばっている校長を何言ってるんだという顔で入りますからね。それで、みんながほっとする。あいつは夜の校長だといばってるって密告している教師もいるんですよ。本当にもう命懸けでやりましたわ。これは自分の原点ですね。この二つが歴史の哲学を支えてるんです。

小田 で、そういうふうな貴重な、子供たちあるいは同僚という、それは定時制高校では獲得された。身近な先輩、友人という中でも朝尾先生、中村先生、山崎先生はおられたかと思いますが、簡単に纏めて下さい。

酒井 朝尾さんと中村哲さんとは同じ研究室の人で、朝尾さんはやっぱり泰然としておられて、安易に人も批判せずに、風格豊かにおられたんですね。そして雑用もきちっとされて、人に対する好き嫌いも余りなくて、やっぱり大したもんですね。朝尾さんの歴史学にはちゃんとした哲学があつて、それでいい加減に資料を読まずに、深く深く読み込みながら江戸時代、近世社会と今につながるようなものを出された。大したものですな。

朝尾さんとは一緒にいろいろ書かせていただきましたけれど、中村氏はもうちょっと距離が近い。この人に非常にお世話になったことは、私がつまらぬ研究を止めようと思った時に、家へ来ておだててくれてね。君は勉強したら伸びるんだといって励ましてくれたんですね。現地調査の思い出もあり、かれの文章はわかりやすい。今は日本から韓国、アジアへと問題を広げドイ

ツへ講義に行ったりしてますね。

それから、もう一人山崎隆三さん。大阪市大の先生で、それに中村氏には、経済史では非常に影響を受けましてね、まさに尊敬しております。

小田 最後ですね、地域から発して地域を超えるものとして、国際的・学際的な視点というこれはどういふふうに考えておられるんでしょうか。

酒井 私は地域史研究から歴史を組み立てるということ、大所からの議論は、余りやらない。これは能力のせいかな、大阪風かなとも思ってるんですよ。だけど、地域はがっちり押えて、自分の見たところを調べたところから一つずつ柱を立てて、そして建築するという感じですね。しかし、その地域の研究だけでは限界があるんです。そういう点で地域から外へ広がる研究、地域を外から見えていく研究をやって、はじめて社会構造になると思います。地域というのは、個別的であり、広がりや普遍的なものである。だから、個別、特殊なものや普遍的なものを両方持たなければならぬという気持ちです。これに、学際的ということ。歴史の人が歴史を一番よく知っているように思われますけれども、歴史上の人物の哲学に関しては、哲学者も研究するんですよ。そういう点では、幅広く専門の違う人と交流してやらないと、歴史家だけが集まって議論するのは、果たしてどうでしょうか。

それから、国際的というのはね、外にも通ずる学問をしなきゃいけない。これは朝尾さんもハーバードへ行かれましたけども、私は外国へ行つてからね、日本史のあり方に、外国の研究者の方法も含めて国際的な視野を意識するようになってきました。鎖国時代だからといってね、国内だけで調べてすみませんね、中国や、オランダというような広がりやを学ぶ必要ですね。ちょっと大きな話になりました。

小田 どうもありがとうございます。

酒井 どうもご迷惑をかけました。

(村井康彦氏、朝尾直弘氏の談話は平成一七年五月八日にホテルフジタ京都にて、酒井一氏の談話は同年五月二五日に大阪商業大学商業史博物館にて収録したものである。)

「注」については、左記参考文献を参考のうえ、当館の小田忠・池田治司が編集し、酒井一氏に監修していただいた。また、人名に関しては、鼎談者を例外として、生存者は立項していない。

#### 参考文献

- 『広辞苑』 第四版、一九九一年、岩波書店
- 『日本史広辞典』 一九九七年、山川出版社
- 『岩波日本史辞典』 一九九九年、岩波書店
- 『日本史文献事典』 二〇〇三年、弘文堂
- 『国史大辞典』 一九七九—一九九七年、吉川弘文館
- 『日本史大事典』 一九九二年、平凡社
- 『21世紀日本人名事典』 二〇〇四年、日外アソシエーツ